

記録集



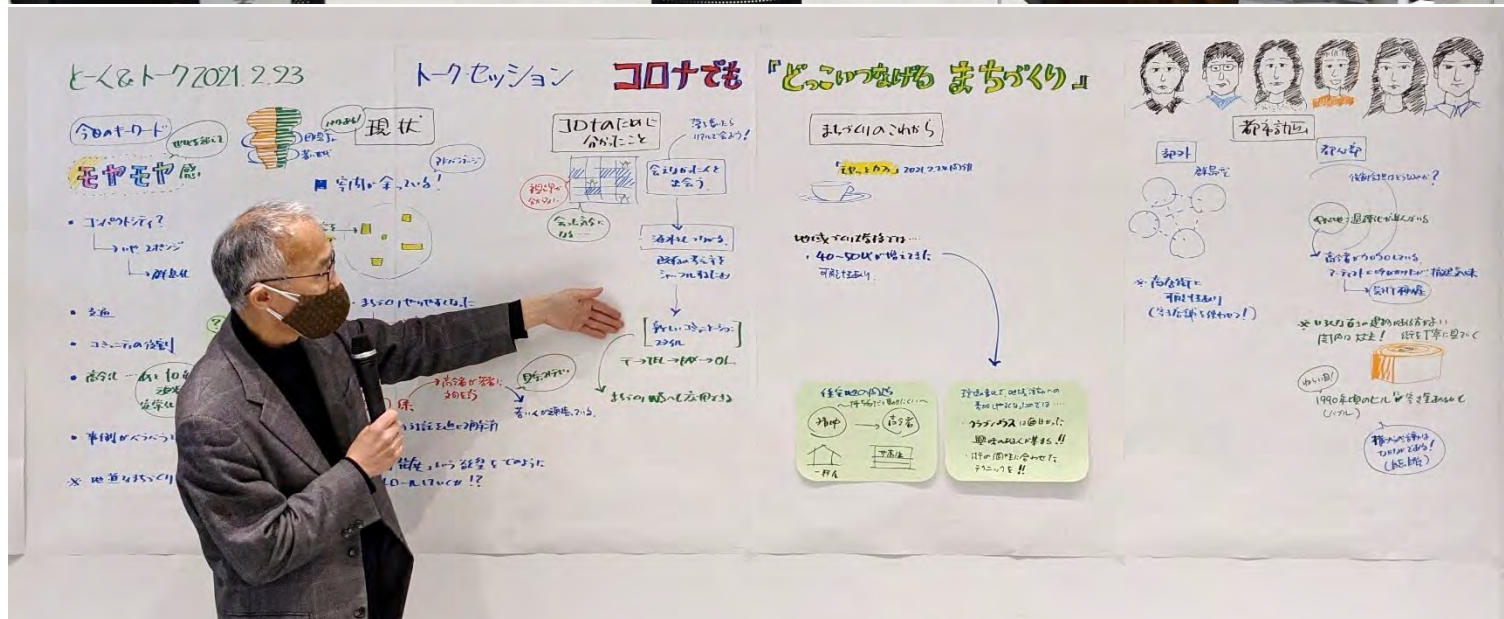
とく&トーク 地域まちづくりをみんなで語る会 2021

コロナでも『どっこい、つなげるまちづくり』

～課題はある、だから知恵がでる～

実施日 令和3年2月23日 (火・祝日) 13:30～16:00

会場 横浜市庁舎1FスペースAB + オンラインのハイブリッド開催



特定非営利活動法人 横浜プランナーズネットワーク (横プラ)

目 次

全体進行：高橋利通（横プラ） 写真撮影：大澤浩一（横プラ）

1 開催挨拶 特定非営利活動法人横浜プランナーズネットワーク理事長 菅 博嗣

2 基調講演 ポストコロナ時代の社会像と地域まちづくりの展望 03

饗庭 伸（東京都立大学教授）

3 実践報告 ～明日からのまちづくり～

1 「外」とつながる地域コミュニティ 31

奥井 利幸（野毛坂グローバル）

2 地域で多彩なつながりをつむぐ住み開き 43

五味 真紀（cafe ハートフル・ポート）

3 横浜の下町を盛り上げよう 64

小林 璃代子（横浜橋通商店街学生スタッフ：横浜市立大学学生）

4 地域にオープンな大学とは 76

木村 心香（YUC 〈Yokohama Univer-City〉：横浜国立大学学生）

5 オンラインセミナー「コロナで見た新しい気づきとつながり方」 91

韓 昌熹（東京工業大学大学院）

4 トークセッション

コロナでも『どっこい、つなげるまちづくり』

～課題はある、だから知恵がでる～ . . . 98

基調講演者：饗庭伸

実践報告者：奥井利幸、五味真紀、小林璃代子、木村心香、韓昌熹

モデレーター：山本耕平&櫻井淳（横プラ）

ファシリテーショングラフィック：奥村玄（横プラ）

資料 112

・基調講演者&実践報告者プロフィール

・アンケート結果&オンライン開催：松本道推（横プラ）

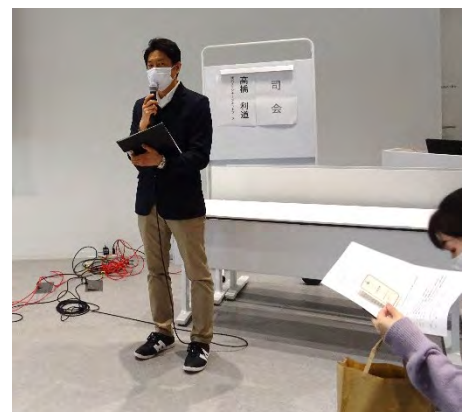
1 開催挨拶

とーく&トーク 地域まちづくりをみんなで語る会 2021 へのご参集ありがとうございます。理事長の菅でございます。今回は、地域まちづくり課との協働企画として本会場をお借りしました。そしてオンラインも併用して運営いたします。

テーマは、「コロナでも『どっこい、つなげるまちづくり』～課題はある、だから知恵がでる～」です。この一年世の中は、目に見えない新型コロナウイルスに翻弄されました。そんな中でも暮らしや地域に課題はあります。テーマでは「どっこい」という勢いの言葉を付けて、コロナ禍でも「つなげる」という想いを交換し、「地域まちづくりの意思や工夫」を学びたいと思います。

饗庭先生には基調講演、5 名の方々からは実践報告、そしてトークセッションと続きます。と一緒に本日の機会を大切にしていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

特定非営利活動法人横浜プランナーズネットワーク理事長 菅 博嗣



全体進行 高橋利道

2 基調講演

ポストコロナ時代の社会像と地域まちづくりの展望

饗庭 伸（東京都立大学教授）

序 ～住宅がたくさんある郊外はどうなる？

東京都立大学の饗庭と申します、よろしくお願いいたします。コロナということでお話する機会をいただきました。オンラインセミナーでしゃべったりするのですが、人前でこのネタを話しするのが初めてということで緊張しながらやらせていただきます。

二つほど話題（ネタ）を持って参りました。一つ目はまちづくりの提案です。「コロナ時代のまちづくり、こんなことができるといいね」と、研究室の学生と一緒に考えたことを紹介させていただこうと思います。

二つ目は、一つ目が「虫の目」かもしれませんが、二つ目は「鳥の目」となり、「大きく見て都市ってどうなっていくのだろう」ということです。まだコロナが終わってないので、経済にどんな影響があるかといったことが全くわからずに、専門家は無責任に「こうなる、ああなる」と議論しているわけです。私なりに考えた「これからの都市がどうなるのか」ということをお話させていただきます。

大学は南大沢という多摩ニュータウンにあるのです。私は大学のすぐそばに住んでいまして、去年の5月か6月ぐらいに近所を歩きながらパシャパシャと撮った2枚ほどを今日持ってきました。こんな感じです。

私は自宅と大学をウロウロしながら、学生にはズームで講義をしながら、「これからどうなっていくだろうか」と考えていました。学生たちが何を経験しているのかってことを教えてもらおうと思ったので、去年の7・8・9月の3ヶ月ぐらいスタジオみたいなことをやって、「身の回りの変化をスケッチブックに描いて送って下さい」みたいなことをしながら、「どういう風に都市が変わっていくのだろうか」を考えていました。「これからどうしていこうか」、「どういうことができるのだろうか」、「まちづくりは何ができるのだろうか」ということを提案してみようと思いました。去年の4月に出そうと思っていた提案をコロナ対応版に変えて7月に、研究室の提案として『定常型市街地をつくる』を出しました。せっかくなので参考になりそうなことを、まず皆さんにお話させていただこうと思っています。

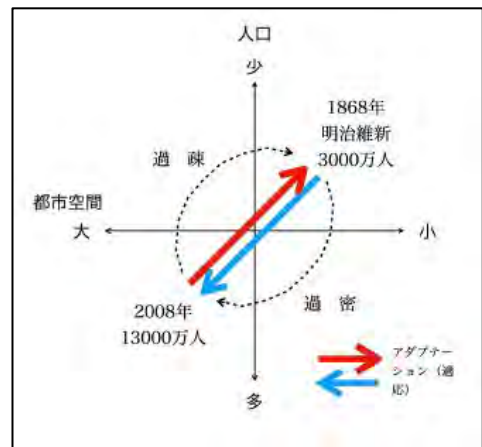
まず何の提案だったのかということをお話いたします。対象としては大学がある東京の郊外を考えていました。都心は、デベロッパーさんがすごく張り切って頑張って都市をつくっていて、それはそれで楽しいのだけれども、大都市の郊外では違うなと思っていました。「住宅地がたくさんあるところはどうなっていくのだろう」ということを考えてつくった提案です。



1 ポストコロナ時代のまちづくりへの提案

都市計画は 150 年かけて強大な「過密」と戦ってきた

今見ていただいているのは、提案を作るとき
の背景です。ちょっと長い時間軸を取って考
えています。縦軸と横軸の二つの軸がありま
すけど、縦が人口で横が都市の大きさに、空
間は左に行けば行くほど大きくなって人口は
下に行けば行くほど多くなるということです。
【図 1】それでは 150 年ぐらい前ですね。1868 年が明治維新
でしたので、それぐらいから日本の都市は
どのようにやってきたのかということをし
ごく簡単にまとめました。右上の方、日本の



人口は 3000 万人ぐらいでした。人口は少ないし都市も小さいという状態でした。そこから 150 年間かけて人口が最大、おそらく都市の空間も最大っていう状態にきたわけです。右上から左下にずっと来たということです。この会場のみなさんは、基本的に都市計画とか建築の専門家の方だと思います。私もその一人です。私も皆さんも皆さんの先達もそうですが、150 年間かけてずっとこれをやってきたわけです。都市が大きくなる、人が増えたので都市を大きくしよう、快適な都市を作ろうってことをずっと 150 年間やってきたということです。

縦と横、二つの軸をつくってバランスを見ているわけですが、都市が大きくなると人が増える、人が増えると都市が大きくなるという風に、常に人と都市の関係がバランスよく進んでいけば何の問題もなかった。この青い矢印がちょうど真ん中のところ 45° に入っていますけれども、この青い矢印の上を 150 年間かけてずっと、バランスよく進んでくれれば何の問題もなかったのですが、どうしてもバランスが崩れるときがあったということです。

どうバランスを崩したかと言うと、これ「過密」の方に振れるという風に言っております。点線が下の方にグーッと回っている矢印がありますが、先に人口が増えてしまって都市が足りない状態っていうのを都市の成長の過程で何度か経験しました。横浜の方は多分心当たりがあると思いますが、密集市街地ができてしまいました。

それを放っておくと人が増えてしまって空間が足りなくなる。この下側に矢印が膨らむことになるのです。そうすると色んな問題がおきてしまうのでまずいということです。過密が起きそうになったらこの青い矢印のほうに矢印を押し戻して 150 年間やってきたというのが、今までの都市計画とかまちづくりがやってきたことです。

「過密」は災害の問題とか病気の問題とかを引き起こしますので、過密はかなり強い敵だったわけです。今の状態では、新型コロナが来たからわからなくなっているのですが、今の状態は基本的には過密ではない状態です。日本の都市というのは、150 年間ずっと都市計画とかまちづくりの専門家は戦い続けてきて過密に勝ったという状態です。ついに勝利を収めたということです。

過疎は敵なのか、強いのか？

勝利を収めたらのんびりすればいいと思うのです。勝ったのだから、もう何もしなくていいと。一言で言うと、私は、都市計画の仕事は無くなっていいのではないかと思いますわけです。けれどもどうやら、「今度は次の敵が出てきたぞ」と今はなっております。それはどういう敵かと言うと「これから人口減ってきます。都市の空間は小さくなってきます。次はそっちがゴールになるので、そっちに向かってどういう風にやっていこうかってことが問題になってくる」ということです。この赤い矢印です。今は左下に丁度到達したのですが、今度は赤い矢印の上を、150 年間ぐらいかけて戻っていくかもしれません。この赤い矢印の上をどうバランスを崩さずに歩いて行けるかということが、今、都市計画とか建築の専門家の頭を悩ましているということです。赤い矢印の上をまっすぐ行けばもちろん問題がない、人と空間のバランスが取れているから問題がないわけなのですが、また、寄り道をするのではないかと言われています。人と空間のバランスが崩れた状態に入ってしまうのではないかと言われています。それはどっち側かと言うと、今度は上側ではないかということです。先に人が減ってしまって都市の空間が余ってしまう。一言で言うと空き家とか空き地だらけの町になってしまうのではないかということです。

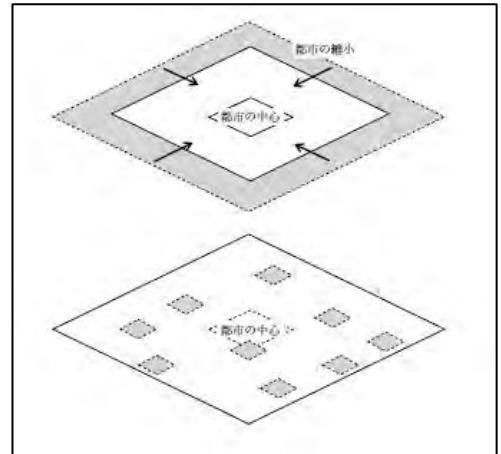
5 年ぐらい前から、そういう問題が随分と新聞を賑わすようになってきていて、皆様方のフィールドでも空き家が増えて問題だとか、空き地が増えて大変だとか、そんな話が結構聞こえてくるようになったということです。人が減って都市の空間が大きい状態のことを「過疎」と名付けています。「過密をやっとやっつけて、過密がなくなったと思ったら、過疎という新しい敵が現れてきてまた戦いましょう」とネジを巻いているというのがたった今の状況です。

問題提起的に申し上げると、過密というのは災害の問題とか、伝染病の問題とかを引き起こすわけですので、過密は悪だと思います。今度は過疎が出てきたのですが、過疎は例えば密度が下がれば下がるほど災害のリスクは下がります。伝染病のリスクも下がります。つまり、もしかしたら敵じゃないかもしれません。さらに言うとなかなか倒れなかつたけど、過疎はあっさり倒れるかもしれないということです。つまり、過疎の状態をこれから心の隅において、まずいかなと思いつつも、「戦う」という感じでまちづくりや都市計画をやらなくてもよいのではないか、そんなことを考えているということです。

日本の都市は「スポンジ化」の構造から逃れることはできない

その過疎がどういう風に起こってくるかという話をさせていただこうと思います。二つの図がお手元にもあると思います。上の図は、私が「最初に人口が減って行って過疎はどういう風に起きるんだろうか」と考えた時に、最初に書いた図です。2003・4 年ぐらいに書いたのでかなり古い図なのですが、人口が減って行って、都市は外側に向かって拡大していたから、今度はギュッとこう萎んで行くのだろう、風船みたいなイメージで「都市って外側から縮小するだろう」と最初考えていたわけです。【図 2】

では実際に、どこらへんから縮小していくの
だろうか、縮小の線はどこにあるのだろうと
思って、15 年ぐらい前、車に乗って調査に行
ったことがあります。調査に行くときにすぐに分
かるのですが、横浜でも結構です、横浜の都心
から出発をして車に乗って外へ外へと行きます
。北の方に行くとも早く外になると思いますが、
外へ外へと行くと、皆さん想像していただ
ければ分かると思いますが、外に行けば行く
ほど都市が新しくなるのです。当たり前です



よね、中心部が古く、外に向かって都市が広がっていくので、どんどん新しくなっ
ています。新しい都市というのは、例えば道路もしっかりしている、公園もしっかりし
ている、住宅もしっかりしている、車もいっぱい停められるというような感じで、基
本的なスペックが良いものになります。そして一番外に一番新しいものが建っている
はずですが、そう考えると一番外から内側に向かって小さくなるってことは、絶対自
然には起きません。上の図が間違えているということです。

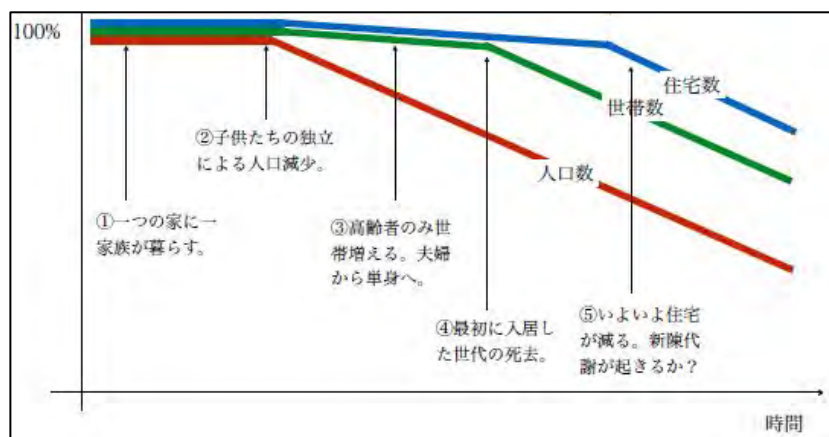
一番外側が新しいので一番外はおそらく今から 30~40 年間ぐらいはそこに人が暮ら
し続ける。では人口が減った影響はどこに現れてくるかというと、都市の内部に現れ
てきます。つまり上の図ではなくて下の図のような形で都市の縮小は起きてきます。
先ほども申し上げましたが、空き家と空き地が身の回りに増えてきた、空き店舗も商
店街に増えてきたと思いますけれど、それが人口減少の最前線です。都市の中に、小
さく穴が空くように低利用の空間がジワジワ増えていきます。それが、これから起き
ていくことで、下の図がその過疎の実相です。

これがなぜ現れてくるかというと、基本的には日本の都市の作り方の問題です。日本
では土地を細かく分けて個人に分譲して都市を拡大してきました。私の家もそうです
し、皆さんのご自宅もそうだと思います。どこかに土地を求めて、上に住宅を建てて
住んでいるという形で、日本の都市は大きくなってきました。その所有権が強いので
す。日本の場合は土地の所有権が非常に強くて、例えば町内会長が、「君の家はどいて
下さい、都市を縮小するから」と言っても、絶対言うこと聞きません。横浜市長が言
っても言うこと聞きません。日本の首相が言っても言うことを聞かないわけです。皆
さんをご自身の土地を買って持っておられて、それをご自身のペースで使っていかれ
るということです。よそさんは関係なく自分のペースで使ってきています。それがあ
る時に空き家とか空き地になる。それも全部その人の事情の中で起きてくるというこ
とです。

結果的には、あちこちで本当にランダムに小さく穴が空いてくるような形で、都市の
空間が縮小していくということが起きる。このことは避けることができません。都市
が縮小していくのだけれども、こうやって小さく穴が開いていくということは、これ
から先に必ず来ることです。私はあと 30 年ぐらい都市の仕事をすると思いますが、
多分ずっとこれと付き合う、あちこちに空きが出てくる状態と 30 年間付き合い続け
るということになると思います。

人口減少と「スポンジ化」には時間差がある

コンパクトシティという言葉があつて、「外側から内側に小さくします」というカッコいい都市図を描いていらっしゃるのですが、あれは多分出来ません。上の図のように都市が小さくな



らなくて下の図のように小さくなってくるので、コンパクトシティは簡単には出来ません。つまり理想的なコンパクトシティを諦めて、むしろ下の図の状態で如何に豊かな都市を作っていくかということです。このようになるのは目に見えているのだから、「この小さく開いてくる穴とかに、新しいものを埋め込んだら楽しいのではないか」、そんな事を考えることが大事だと思っています。

では、小さく穴が空いてくるという現象が、どういう風に起きるのかを少し詳しく見ていただこうと思っています。横浜の郊外住宅地でもよくある話だと思います。

縦軸が密度で横軸が時間軸です。右に行けば行くほど時間が経つということです。三つの直線が書いてあります。人口と世帯と住宅と三つの直線が書いてあります。ある時期に、例えば 1000 棟の住宅を作ったニュータウンがあり、5 人家族が住み始めたとしましょう。それがスタートだと考えてください。その町には、開発が全部終わってしまったので新しく建物が建つことがなくて、外からあんまり引っ越してということを前提に考えていただきます。最初は住宅数が 1000 で世帯が 1000 で人口 5000 ということでスタートします。【図 3】

これをしばらく放っておくとどうなるかということ、住宅地ができてから 15 年くらい経つと人口が減り始めます。図に書いてありますが、5 人家族の家の子どもの 3 人がだんだん独立をしていくからです。15 年後大学に入る頃とかを想定しているのですが、人口が必ず減り始めます。どれくらい減るかということ 5000 人の人口が 2000 人になるまで減ります。

5 人家族が夫婦だけになるまで確実に減っていくので、人口はガンガンと減っていきます。横浜にもこういうところがたくさんあると思います。郊外の住宅地で人口がいっぱい減っているところがあると思うのですが、人口減っているから大問題だと張り切って行ったことがあります。張り切ってその町に行ってみたが、空き地とか空き家がひとつもない。それぞれの家に 2 人ずつ 55 歳ぐらいの人達が暮しているというパターンは結構あるわけです。

つまり人口が減ったからといって、その町が危ない状態ではなくて、長い時間軸の中で見た時の「二人暮らしの段階」に至っているというだけのことです。この段階では、人口がガンと減って 2000 人になる前までは、まちづくりや都市計画ができることっ

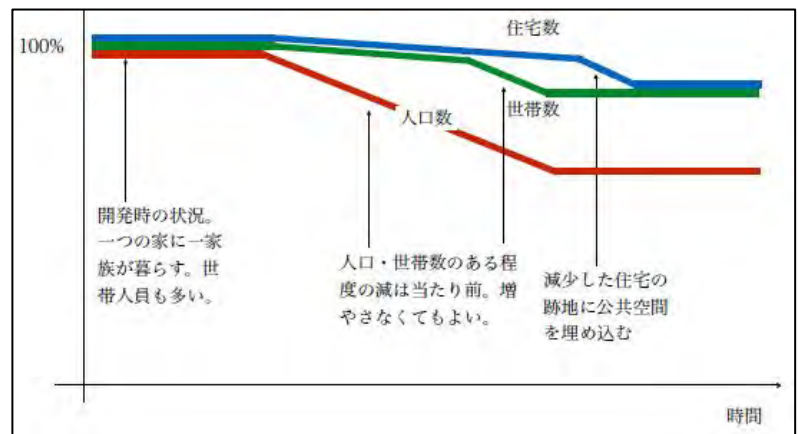
てあんまりありません。

それでそのまま放っておくとどうなるかというと、今度は二人暮らしが一人暮らしになって1人が0人になっていき世帯数が減り始めます。世帯数が減り始めると、空き家とか空き地が目立つようになってくるということです。世帯が減り始めた時が次のタイミングということになります。横浜のデータをきちんと見たことはないのですが、まだ世帯数が減っているところはないのではないかと思います。

少なくとも東京の郊外は、世帯数が減っているところはほとんどありません。都営住宅の建て替えとかピンポイントな事件があったところだけ減るのですが、ほとんど自然に減っているところはないと思います。世帯の数が減ってない、横浜でもないと思います。世帯が減り始めると、町がだいぶ寂しくなってきたということで、その段階で先ほどの形で低蜜化、過疎化が起きてくるということです。そこに対してこれからまちづくりとしてどう介入していくかが問われてくることになってきます。

住宅の跡地に町の魅力を上げるものを埋め込んでいく

今まで「だいたい放っておいたらこうなります」という話をしたのですが、「そうやってきた時に何をやればいいのか、どういうことを次のゴールにしたいのか」という話をしたいと思います。人口と世帯と住宅がどんど



ん減っていく、時間差で減ってきますという話をしました。けれども、次にどこかで下げ止まる段階があるのではないかと考えています。コロナの感染者数でも「下げ止まった」とか言いますが、どこかで下げ止まると考えるといいのではないかと考えています。コロナみたいな自然現象ではないので、ひたすら下がってくるだけかもしれません。

放っていたらどうなるかというと、人口が減って何もしないと空き家だけの町になって負の循環みたいなことになって、我先にみんなが逃げ出して土地の価値がゼロになって誰も買ってくれないという状態は、放っておいたらおきます。横浜でおきるかどうか分かりませんが、地方だと起きてしまうわけです。

そうならないためにはどうすればよいかというと、少なくとも100%の状態に戻ることはないです、無いと思っていた方がいいです。日本の人口は、全部減ってきますから、100%に戻ることはなく、例えば8割ぐらいで止まると考えてみたらどうでしょうか。【図4】

そして、100%から80%の2割の空間とか住宅が空いてくるわけですから、2割の空いたところに何か都市の魅力を上げるものを作りこんでいく、住宅地の魅力を上げるものを作り込んでいくとどうなるでしょうか。100%の時には、例えば公園も足りま

せんとか、公共施設も足りませんというようなことで、キチキチで暮らしていたわけですが、空き家・空き地が出てきて2割ぐらいの所に欲しかった公園を埋め込んでいくとか、欲しかったドッグランを埋め込んでみるとか、子ども達が火遊びができる空間を埋め込んでみるとか、そういうことをやっていく。2割は相当いろんなものができます。

それで埋め込んだ時に、「この町やっぱりいい町だ」となります。町の魅力を上げるものを埋め込んでみた時に、この町なかなかいい、子どもが遊べる場所もあるし公園も豊かだし高齢者も気兼ねなく暮らせることになれば、魅力にひかれて人が移ってきますので、人口はそこで下げ止まるということになります。うまくいけば、外から入りたいという人達が、ウェイティングリストを作って待っているみたいな状態になってくると思います。

つまり申し上げたいことは、どこかで下げ止まりそうだと、この辺ぐらいが次のゴールだろうなということ、町ごとに見極めて、そこに至るまでに空いてくる小さい空間を使ってまちづくりをやっていくというのが、今やれることではないかということです。

最初のほうのスライドで『定常化市街地をつくる』という大きいタイトルを出しましたが、その次の状態、次に下げ止まった状態を「定常化」と呼んだらいいかと思っています。まだ誰も使ってくれていないので一般化した言葉ではないですが、次に定常化して、8割ぐらいのところで定常化して、居なくなった人の分だけ新しい人が入ってくるみたいな感じの状態ができるといいかと思っています。これからの都市は、定常化した状態を探して目指していきましょう、そんなことが私からの提案です。

東京郊外の低密度化は敵ではない

具体的にはどういう事をやっていったらいいのかということが、研究室で作った提案の中にたくさん書いてありますので、いくつかその内容をご紹介させていただこうと思います。

提案書自体は、大きく三つのパートに分かれていて、一つ目は「6つの新常識」と書いています。新しい常識はこうだということで、先ほど申し上げたような、そもそも論を噛み砕いて書いています。次に「7つの郊外に向けて」というところ。これは提案をたくさん作ったのを7つの場所ごとに分けてまとめてあります。3番目のところが「ウィズコロナ、ポストコロナ時代の定常型市街地」ということです。これをまとめている時にコロナが起こってしまったので、少し考え方を改めてコロナ対応型の提案を書いています。その内容を簡単にご紹介していきたいと思っています。

「6つの新しい常識」では、先程申し上げたように、過疎化って恐れることはないという話とか、世帯数ってまだほとんど減っていないので、まだまだ東京の場合は安心してくださと書いています。4番目には、「東京郊外の市街地には多様性が維持されている」と書きました。スプロール開発でできた町って東京の郊外にたくさんある。農地があって農地の中にダラダラと住宅地が増え続けてきた町というのがあります。横浜にもあると思いますが、ニュータウンではなくてスプロール型のものがあります。そういうところを調べてみると、実はこの状態って人口が20年間ずっとジワジワ増

え続けているので、小学校のクラスが一定数です。ドーンと増えてドーンと減らない、常に増え続けている。その時代に住宅を借りた家族が入ってきている。高齢者もいれば若い人もいるという多様性のある町になっている。東京の郊外には、結構こういうスプロール型のところが多いのです。そういうところでは結構多様性があるという、そんな話をしています。



5 番目には「東京郊外の低密度化は敵ではない。」と書きました。二つ目は先ほど申し上げたことに近いですが、「過疎がこれからの問題だろうか」ということです。私も都市計画の専門家なので「過疎が起こりそうだから、これからのまちづくりを頑張りましょう」とつい言うてしまうのです。しかし、「日本の町の密度ってそもそもそんなに高くないです」という話をしています。これは、東京の 30 km 圏ぐらいのところの住宅地の航空写真が左側の写真です。同じような場所をロンドンで撮ったら真中の写真、ニューヨークで撮ったら一番右側の写真です。これを見る限り、日本の町はもっと密度を下げて大丈夫ですよ。先ほど 2 割ぐらい下げるパターンを紹介しましたがけれども、この中の住宅が 2 割ぐらい空いてきて、その跡地に緑が埋め込まれてきてもロンドンになれるかどうか、そんなことになると思います。「今、人口減って困るのです」と左側の写真の人たちが言っているわけなのです。けれども、「もうちょっと減らしてもいいでしょう。もうちょっと低密度化しても、特に何の問題もなくむしろ豊かなものができるでしょう」と言っています。

鉄道の話も大事なかなと思っています。東京、東京って言って皆さんの反感を買いますが、これは多分横浜も同じだと思います。日本の公共交通って異常に密度が高くサービス密度が高いです。東京圏は交通分野で CO2 の排出量が少ないことが知られています。環境的に見たら東京はすごく良いと言われていて、それはなぜかという、通勤の時に自家用車を使っていないからです。ものすごい我慢をして、すごい姿勢になりながら満員電車に乗っているわけですが、本当に地球に優しいことを私たちは行っています。あそこで耐えているから化石燃料をあまり使っていないということなのです。東京と横浜も含めて、かなりリッチな公共交通があります。その公共交通網って誰がやっているのかとの質問に、プライベートカンパニーだって海外の人に言う、と皆さんびっくりされます。「基本的な鉄道って政府がやることなのに、何でプライベートカンパニーがやっているの」とびっくりされるぐらい、東京とか関東は公共交通網がしっかりしている。これも大きい財産かなと思っています。

住宅地の検診事業とプロモーションをしっかりやる

前提を話した上で具体的な提案をいくつかまとめて参りました。提案は、30 か 40 ぐらいあるので、全部お話すると大変なことになりそうなので、どれか一つ二つぐらいにしようと思います。提案の組み立てが 1 番から 7 番まで書いてあります。これらは、それぞれ動かすポイントごとに分けて書いています。空き家とか空き地が出たらオーナーさんに「こういうことやりませんか」と言いに行きましょう、都市農地が困って

いそうだと思ったら農家さんに行きましょう、公共施設の再編とかを市役所が言い始めたら「こういう風にやりましょう」と言いましょう、「都市計画道路とか作りたい」と横浜市が説明会をしたら「道路つくるのならこう作って下さい」と言いましょうというように、いろんなところやいろんな人が考えて都市計画をやっていますから、それぞれに対して「こういうことをやっていくといいのではないですか」ということをまとめたのが1番から7番です。

今日は、郊外の住宅地の話になると思うので、7番関連の提案を説明しておく、アイデアの1がいいかもしれません。住宅地の検診事業とプロモーションをするというのではないかと思います。現在、研究室で八王子市と一緒に、実証化、実装化というか、実現化に向けてやっているところです。日本の人たちの住みたい町ランキングがあると思います。東京だと吉祥寺や田園調布などが一位になってくるのですが、それは吉祥寺や田園調布しか知らないからなのです。知らないからランキングすら付けられないという状況なのです。しかし、それぞれの住宅地の状態をしっかりと調べると、結構違うことがわかります。開発業者によってすごく丁寧に道路を作っているところもあれば、すごく丁寧に地盤を作っているところもあったり、開発業者によってやってきたことが全然違っていたりします。それをきちんと掘り起こして調べて、うまくいっているかなと見て、それを情報として外に出していきましょうということです。

大体の人たちは、「駅と小学校から何分ぐらい離れているの」と、二つの情報ぐらいからしか物を決めないわけなのです。それに対して、「この住宅はこういう風に作られていて、地震の時とか揺れません」とか、「景観協定があってこんなに綺麗にされています」といった情報が住宅を選ぶ人にきっちり届くことができれば、最終的にはその住宅地の価値が下がらないのです。「中古の住宅になって、親が亡くなったから2000万円でしか売れない」と思ったけれども、きちんとプロモーションをしたら3000万円で売れるかもしれません。ですから「住宅地のプロモーション事業をしっかりとやりましょう」というアイデアが一番に書いてあるということです。

ウィズコロナ、ポストコロナ時代の定常型市街地

コロナ過に入った時にどうその問題を読み取ったかということも報告書の中で書いてあります。四つぐらいの強みと弱みが書いてあります。一つ目は、コロナ過になって郊外の住宅地で「人口の動きと低密度化」と書いています。これまで郊外に住んで通勤していたということなのですが、遊べなくなりました。「都心に行くときちょっと密度が高くて危ない」という価値観が出てしまったので、おそらく低密度なところの価値があがっていくでしょう、人口もそちらの方に動いていくでしょう、ということが書いてあります。先程来、私は、過疎のことを申し上げていますが、過疎ほど良いと思う人たちが増えたということではないかと思います。二つ目は、「空き家の強み」



が書いてあります。まだ実態調査ができないので正確には分からないのですが、コロナでテレワークだのということで自宅が手狭になった人たちがたくさんいて、「自分の実家ほったらかしだったから、あそこに行ってテレワークの拠点を作ろう」とか、住宅をいくつか持っている人たちの動きがあったのではないかと考えています。数字としてつかめていませんが、皆さんが自分の隠し財産のように空き地や空き家を持っているわけです。そういうものによってコロナ禍を乗り越えることが出来たということがあるかもしれない。空き家を持っているというのは、負債を抱えているようなイメージがずっとあったわけなのですが、それは負債じゃなくて可能性を持っていたんだというふうに、意識が変わっていくのではないかとということが「空き家の強み」に書いてあります。

三番目の「多様性の強みと弱み」に何が書いてあるかと言うと、先ほど申し上げたとおり、東京の郊外の市街地には、いろんな年齢の人たちが住んでいる。「いいところだなあ」と評価をしています。一方で、今回特に、新型コロナによってエッセンシャルワーカーの人たちや飲食業の人に負荷がかかったとなっているわけです。それがきつと皆さんの隣人なのです。多様性があってごちゃごちゃ住んでそれなりに多様性があって都市の中に住んでいるということなので、エッセンシャルワーカーだけの町があるわけではなく、医療従事者の町があるわけでもないし、飲食業者の町があるわけではなくて、混ざり合って住んでいる状態ということです。強みは、支え合うことができるのではないかとということです。近隣の人たちと支え合うことによって、エッセンシャルワーカーの困難に立った人たちを支え合うことができるということが強みであるのです。

逆に感染症のリスクとしては、「いつうつるかわからない」ということがあります。いろんな人たちが町に住んでいて、結構きわどいリスクにさらされた人たちが隣に住んでいたりする可能性もあるということで、その人からうつったらどうしようみたいなこともある。強みと弱みの両方があると思っています。

四つ目の話題ですが、交通手段については、公共交通がかなり厳しくなっていると聞いています。日本の場合は、公共交通はほとんど民営化しています。飛行機も民営化していますし、電車もバスもフェリーもほぼ全部民営化していますので、マーケットがダメになると民営化されたものがどんどんダメになるということです。公共交通が駄目になるというのはかなり大きい問題がこれから出てくるかもしれない。交通が変わってくると、「電車に乗って都心に行けるから郊外住宅地でいい」という前提も変わってくるかもしれないということで、交通の転換をしっかりと頭の中に入れておきましょうということの問題点として書きました。

そういうことも踏まえて何ができるのだろうか、空き地や都市農地に何かできることがあるのではないかとということを提案書の中にはまとめてあります。例えばアイデアの1-1には、「地域型テレワーク拠点」では、空き家と空き地に普段から Wi-Fi とかを飛ばしておいて、いざとなったら皆が距離を取ってテレワークできるようにしておくといいのではないかとということが書いてあります。「生活道路パーク」では、自分家の周りの生活道路でお子さん達が遊んでいたのが結構危ないと思っていました。コロナになったらそういうところの交通をコントロールして、生活道路を遊ぶ空間とし

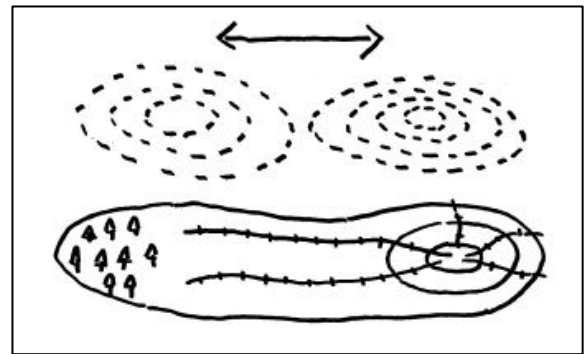
ていけるといいのではないかという提案をしています。このように提案をたくさん書いています。

2 ポストコロナ時代の都市はどうなるのか

今日は、私の提案発表会でもないのですが、個々の提案についてはここまでとさせていただいて、最後 10 分ちょっとで、「じゃあこれからの都市がどうなっていくのか」という、上から目線の「鳥の目」の話を最後やらせていただき終わりにしたいと思っています。四つほど雑な絵を書いてきましたので、四つの問題提起をさせていただこうと思っています。

何が起きているのか

まず一つ目です、今何が起きているのかということです。「東京の都心の方への転入が減って横須賀とか茅ヶ崎に増えている」、そんなニュースを読みました。郊外に人口増えたのではないかと言われていますが、実はわからないと私は思っています。人口は、3 月にいっぱい動きます。転勤とか入学があるの



で、この 3 月を過ぎていよいよという風に見えると個人的には思っています。では、どういうことが起きているのかと言うと、都市の形にはまだ全然変化がない。人々が都心の住宅を売ってしまって、郊外に引っ越してきて住宅を建てると都市の形は変わるのですが、まだ、皆さん様子見をされていて、新しく郊外に住宅を買った人はそれほどいない。

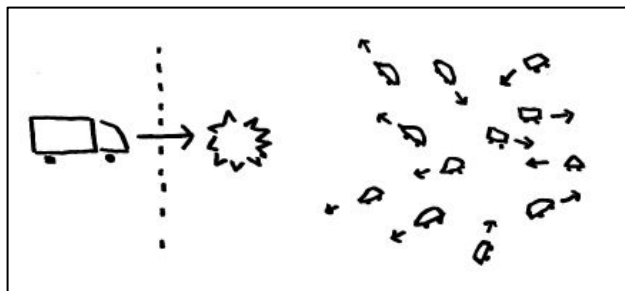
「田舎暮らしが流行する」といった話も流れていますが、知り合いに聞いたらほとんどまだですという話でした。問い合わせは増えたけれども、実際に移住した人はそれほどいないということでした。都市の形自体はそれほど変わらないのではないかと現時点では思っています。

ただ変わったなと思うのは、通勤するか、しないかという日々の行動です。図の下側には都心と郊外がありますが、コロナがない時には重心が都心の方になる。右上がそういうことなのですけども、ここら辺に重心がありそうです。しかし、コロナがひどくなったら郊外の方に重心が動く。人の重心が動いていくということです。そんな「重心の移動」が毎日起きているのではないかという風に思っていて、まだ形自体に変化はなく、人の動き自体は都市にいる日もあれば郊外にいる日もあるという、今はそんな状態なのかなというのが、一つ目のポイントです。【図 5】

誰が動かしているのか

二つ目です。今、その人の動きは誰が作り出しているのかという話ですが、私たちが作り出しているという風に言っています。どういうことかと言うと、例えばコロナを災害に例える人がたくさんいます。10 年前の東日本大震災の津波に例える人がいて、

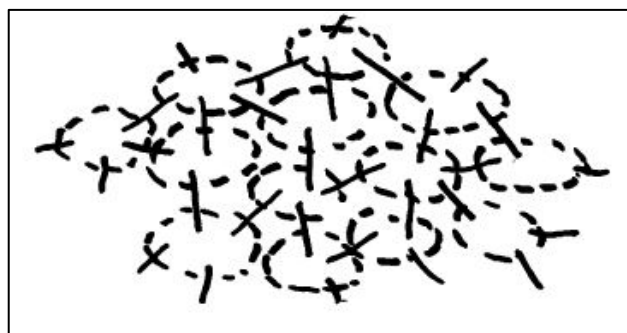
波が来て家が流されてしまったから高台に動いて行ったとか、内陸部に動いていった動きがあったわけなのですが、ああいう動きと重ね合わせて捉えている方がたくさんおられます。実は、今回のコロナ過では、皆が被災されています。私も被災していますが、ほぼ日本人全員が被災した状態にあるということなのです。東日本大震災では、僕は被災しなかった。東北の人は被災した、東北の方に行っても、海の方は被災して内陸の人は被災しなかったと、被災者がはっきりしていましたが、今回は全員が被災しているのです。災害というのは、人を強制的に動かしていますし、困った人がいれば困っていない人が助けに行くというはっきりした動きが出てくるのです。けれども、今は、私たちが明日どうしようとか、自分の子どもをどこに住ませようか、うちの子なんか東京の大学を受けたいと言っているけどどうしようかと、一人一人が被災した気分になって小さい動きをたくさん作っているというのが今の状態です。【図6】なので、図の例えが分かりにくいかもしれませんが、東日本大震災の時は被災地、被災したところに対して、トラックを東京でチャーターしてそこに水とか食料を積み込んで助けに行くといった、わかりやすい動きが起きたのです。今は誰もトラックをチャーターしておらず、全員自家用車に乗っていて自家用車の中に少しずつ荷物を詰め、家のことをどうしようか、ご近所さんをどうしようかと、フラフラ動いている。あちこちの方向に向かって動いているという状態です。災害に例えるのはあまりいいことではないかもしれませんが、今の都市の変化というのを強制的に動かしているのではなくて、私たち一人一人の動きにかかっているということです。それが二つ目のポイントです。



都市はどういう形になっていくのか

それでは、都市の形はどうなっていくのかということです。巨大都市みたいなものがあって、新幹線で東京と大阪が2時間50分ぐらいでつながれている。リニアモーターカーができると、それが1時間ぐらいでつながるというようなことがあって、どこにいても日本中に行ける、世界中に行けるというのがコロナ以前の状態だったかと思います。そして何が起きたかと言うと、公共交通が今かなり打撃を受けており、飛行機とか滅多に乗れなくなる、新幹線も結構珍しいものになるという状態になっていくのではないかと思います。

距離を移動する時にいろんな交通手段を使いますが、中距離はバスとか電車を使います。それが自家用車に代替されている。長距離は行かなくなったということで、新幹線とか飛行機を使った移動は使わなくなったということです。中距離は車で行けるところで繋がった都市になっていくというのが、これから起きてくるこ

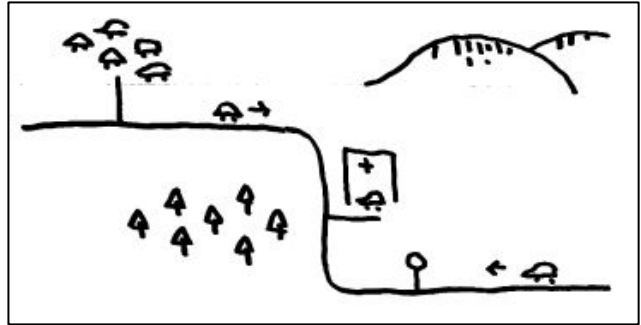


とだと思います。

一昔前だと、それは非常に寂しい状態だったのです。今や家にいながらにしてフランスでやったシンポジウムが覗けてしまう時代になりました。結果的には、情報は十分に取れる、空間的には少し小さいまとまりがバラバラとあるような感じの都市になっていくのではないかとということで、キーワード的には「群島型の都市になる」と私は言っています。【図7】

そこには何が必要か

最後は、何をやっていったらいいのか、どうすればいいのかということです。今、次の都市の形に向かって全員が自家用車でフラフラしている。今を例えると、そういう状態かなと思っています。今日の時点で新型コロナが終息していて、これからは違う未来が待っている



と言えれば良かったのかもしれませんが、2～3年、下手をすると5～6年続きそうな予感がしているわけです。ですから、全員が不安に駆られ、いろんな情報に踊らされながら、自分の家族とかを乗せた車で移動しているのが今の状態です。これから何ができるかと言うと、小さい移動を支えていくような、小さな車がたくさん入れるドライブインとか、メンテナンスできる場所とかを増やしていくというようなことかもしれません。車社会になることを申し上げているわけではなくて、それぞれの人たちが自分の住宅とかを使いながらどういう風に改築していこうとか、どんな町にしようかを考えていくこと、相談できる場所とか、お互いがメンテナンスできる場所とかそんなものを作っていくことが大事だと思っています。【図8】

最後は、ちょっと煙に巻くような雑な話をしてしまいましたけれども、前半で少しまちづくりをどうやっていくのか、後半では都市はどうなっていくのかという話をさせていただきました。

人口が減っていったらどうなるかという話は、皆さんから見て左側の本（「都市をたたむ」2015年）に結構書いてあります。人口が減って都市の空間が過疎化して来たらどうなるのかという話は、左側の本に書いています。もう5年ぐらい前の古い本なのですが、ご興味があったらご覧いただければと思います。右側の本（「平成都市計画史」2021年）は、最近出た本で、よろしければ読んでいただければと思います。コロナのことは全く書いていませんが、平成の都市計画をまとめて都市がどうなるのかと書いてあります。ということで、時間が少し過ぎたぐらいかもしれませんが、私の話は以上とさせていただきます。後半の皆様方との議論の中で申し上げることがあれば申し上げてという風に思っています。ご清聴ありがとうございました。

3 質疑応答

【進行者】

どうもありがとうございました。ここから質疑応答に入ります。コーディネーターと親交が深い横浜プランナーズネットワークの内海が進行させていただきます。

【内海】

饗庭先生、ありがとうございました。

モデル的に東京の郊外がスタディされていて、空き家の具体的な利活用の話は、後半の五味さんの住み開きという形での空きスペースの話につながります。最近、横浜郊外では、移動販売の話があちこちであります、経済をきちんと回さないと移動販売も継続しないというので、移動販売車が停まるのに合わせてサロンを開催したり、公共施設の講座を来る時間に合わせて行い、販売車が来ると「買い物行っていいですよ」みたいな創意工夫をされていたり、これらは饗庭さんのお話した内容に入るのかなーっていうのを感じたところです。



それでまずお話を聞きしたいのは、人口減少時代の本も書かれていて、都市が少し縮退するのも人口が減るぐらいだったらまだ大丈夫で、世帯数が減少してくると黄色信号が灯るというお話がありました。横浜の郊外でも、世帯数の減少が出はじめてきていて、そういう意味ではもう黄信号が発動されているようなところがあります。人口減少とか高齢化とか、今、横浜の郊外でも問題になっていて、団地再生といった問題もあります。その流れの上でやる都市計画の施策だとかまちづくりと、今回のコロナの問題がどういう関連を持っているのかというお話をいただけるともう少しすっきりするかなと思います。

【饗庭】

わかりました、ありがとうございます。

横浜の郊外のことは私はほとんど土地勘がないので、一般論しか分からないのですが、さっきちょっと飛ばしましたけれども、世帯が減って更にしばらくしないと住宅減らないのです。これはおそらく相続でもめたりでタイムラグが発生するので、私の親は80歳ですけど親がもし今亡くなったとしても私は50歳で動けないので、10年ぐらいほっとくわけです、自分が退職するまで。だから世帯減の後にすぐに空き家になって、すぐに縮小していくかというところでもない。少しだけタイムラグがあるということなので、黄色信号と見られるのだったら、その持ち主がいなくなったけれども、空いている住宅みたいな所に対して「こういうことやってみませんか」という感じの10年間ぐらいがありそうというのがまず一つはあります。

八王子で調べていて面白いと思ったのは、郊外の住宅地でも1950年代後半に造成されたところもあれば、60年代、70年代もあり、横浜も同じなのですが、世代で言うと第8世代ぐらいまでであるのです、年代によって。その人口と高齢化などのデータと

建った年、開発された年とのグラフを作ってみたのですが、それが二次曲線の逆さまのような曲線になっていて、開発してしばらく経つとひたすら高齢化がグワッと起こっていき、50%を超え、開発から 40～50 年経った所というのは、初期入居の方が亡くなった後に若い人が入ってきて、高齢化率が落ちてきて 3 割ぐらいになる町が結構あったりするのです。

なので「古い住宅地にきちんと学ぼう、そこに何が起きているのかをきちんと見に行こう」みたいなことを今考えています。横浜でも 1960 年代の初期の郊外型住宅団地で今何が起きているか、どういうバランスで人が暮らしていて、どういうサービスがあるかっていうところを見ていかれると、その手前の高齢化率 50%ぐらいのところに対するヒントと言うのですか、あれを目指せばいいのだというヒントが見えてくるのではないかと思います。横浜でもそういう作業をされてみると面白いのではないかと思います。

それからコロナの影響ですが、コロナの影響は、とりあえず今は皆さんが派手に動くことを控えているのではないかと思います。コロナが来たから都心のオフィスや住宅を畳んで郊外に引っ越そうといった動きはまだ来てないと思うのです。企業レベルの動きは起きていて、都心のオフィスはもう持てられないからやめてということで、パソナとか電通とかの動きがあります。しかしそれぞれの人が自分の財産とか住宅とかの財産をどうするかという動きはまだあまり見えてないし、大きい動きはなさそうだと思います。少なくとも郊外の戸建住宅に移ったり暮らしていることへの反対のアドバンテージ、マイナス要因ではないと思います。コロナに関して言えば、都心にギュウギュウ暮らしている人の方がはるかにまずいと思っていますから、郊外住宅地はそんなに今危機感持っている人は少なそうだと思います。郊外住宅地の今後という意味では、コロナ過というのはプラスに働くという怒られるかもしれませんが、あまりひどい影響を与えないのではないかと見ています。

【内海】

はい、わかりました。特に、横浜には市街化調整区域が地域の 1/4 ぐらい、しかも群島型にあるわけです。調整区域には、農地があったりまとまった山林があったり群島のようにあって、その間に郊外住宅地がある。その郊外住宅地も集合団地もあれば戸建団地があって、そこで空き家の問題をはじめ、集合団地などでも 40 年以上経過したところだと高齢者率が 5 割以上というのが続々と増えています。

そこでの人の入れ替えをどうしようかといった話が結構出ていて、広い住戸に一人暮らしの高齢者が住んでいるのでサ高住みたいところに移動させて、空いたところに若いファミリー層を低廉な価格で入れるようなことを管理組合なんかもやるべきではないかといった話が始まっています。まだ議論ベースで実際にできるところまではまだ時間がかかるかなというような状況です。だから、コロナ禍をきっかけに動くかもしれないですけど、そんな状況もあるので粛々と進めていくような感じになるのかな。

【饗庭】

そうだと思います、言われても多分決断できないのが多いのではないかと思います。仕掛けを作ってもエイやって引っ越す動きにまだ繋がってないのではないかという風に思います。今の時点ではですね。

【内海】

また交通環境ですが、横浜で言うと都筑区とか港北区とかは東京並みの公共交通インフラが整っていますが、私が住む戸塚の方だと貧弱そのものです。多分都内の1/10以下だと思いますけど、そういう意味でいうと、整った公共交通機関がないところに、いきなりパーソナルな交通手段が新しく登場するとかは考えにくい。今は、鉄道事業者も一緒に一生懸命新しい地域の足の確保をやろうとしていますけど、なかなか一気に進まないというような状況です。しかし、現実には移動が困難な高齢者がかなり増えており、困った状態があるような状況なので、東京よりも早く進めないといけない問題かなというふうにお話を聞いていました。

【饗庭】

はい、ありがとうございます。少し東京との違いもありますけども、その都市が縮むのに合わせてどういう手を打つのか、それに輪をかけてコロナの問題が覆い被さってきているので、どう進めていくかというのは大規模にやるというよりは少しずつ少しずつ進めていくようなそんなイメージになるのでしょうかね。今の交通の話なんですけども、どういうところかわからないので具体的には申し上げられないですが、先ほどは高齢化率があげ止まって落ちてくるのではないかと話をしました。それを信じるのであれば、高齢化率50%の状態というのは多分10年ぐらいだと思うのです。10年ぐらい何とか耐えきろう、孤独死ゼロとかそういう目標を立てて、高齢化率50%の町を10年間ぐらい支えようとはっきりと言えるのであれば、そこに集中的にバスか何かを走らせればよいのです。10年でいいのに永遠に走らせてと言われると、バス会社はちょっと嫌だなと思います。10年間だったら市もきちんと税金を入れることができるし、事業者も走らせることができると思ういました。人口減少は少し長い話なんですけども、その間をどう暮らすか（どうつないでいくか）、5年後をどうしよう、10年後をどうしようとか、時間を区切って戦略的に動いていく作戦を組み立てるのはとても大事なかなと思っています。

【内海】

ありがとうございます。では、また後半にお願いいたします。

コロナでも『どっこい、つなげるまちづくり』 ポストコロナ時代の社会像と地域まちづくりの展望

2月23日

東京都立大学 饗庭伸

- 1 ポストコロナ時代のまちづくりへの提案
- 2 ポストコロナ時代の都市

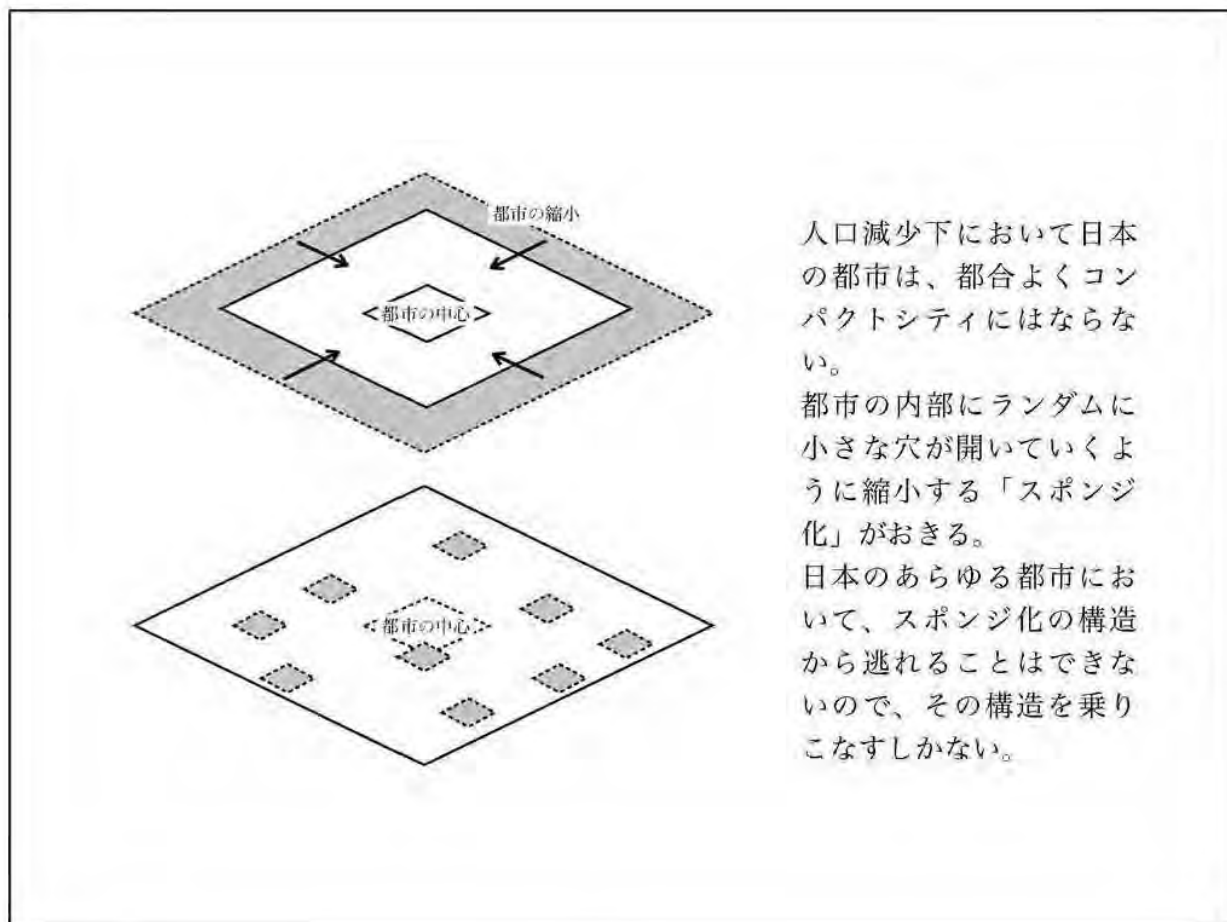
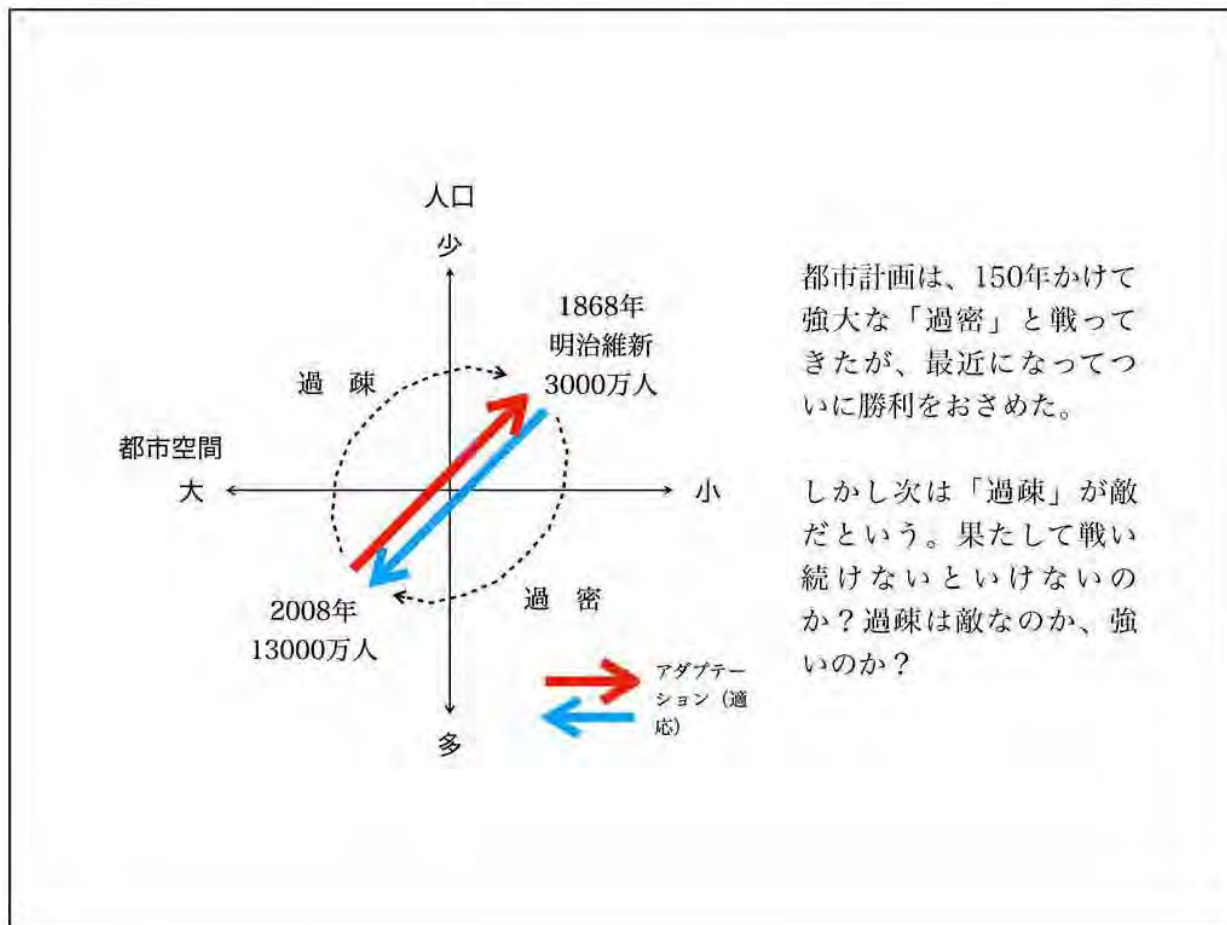


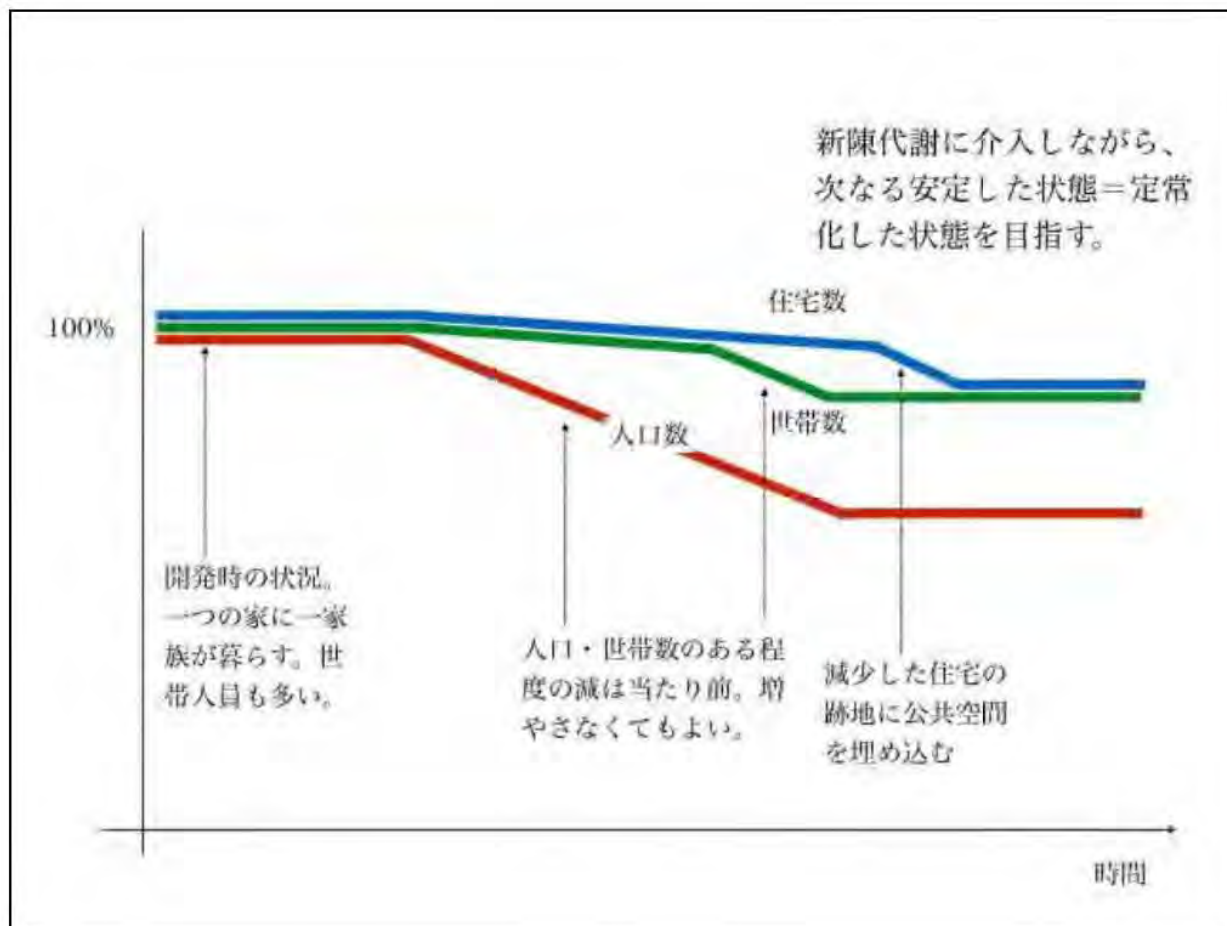
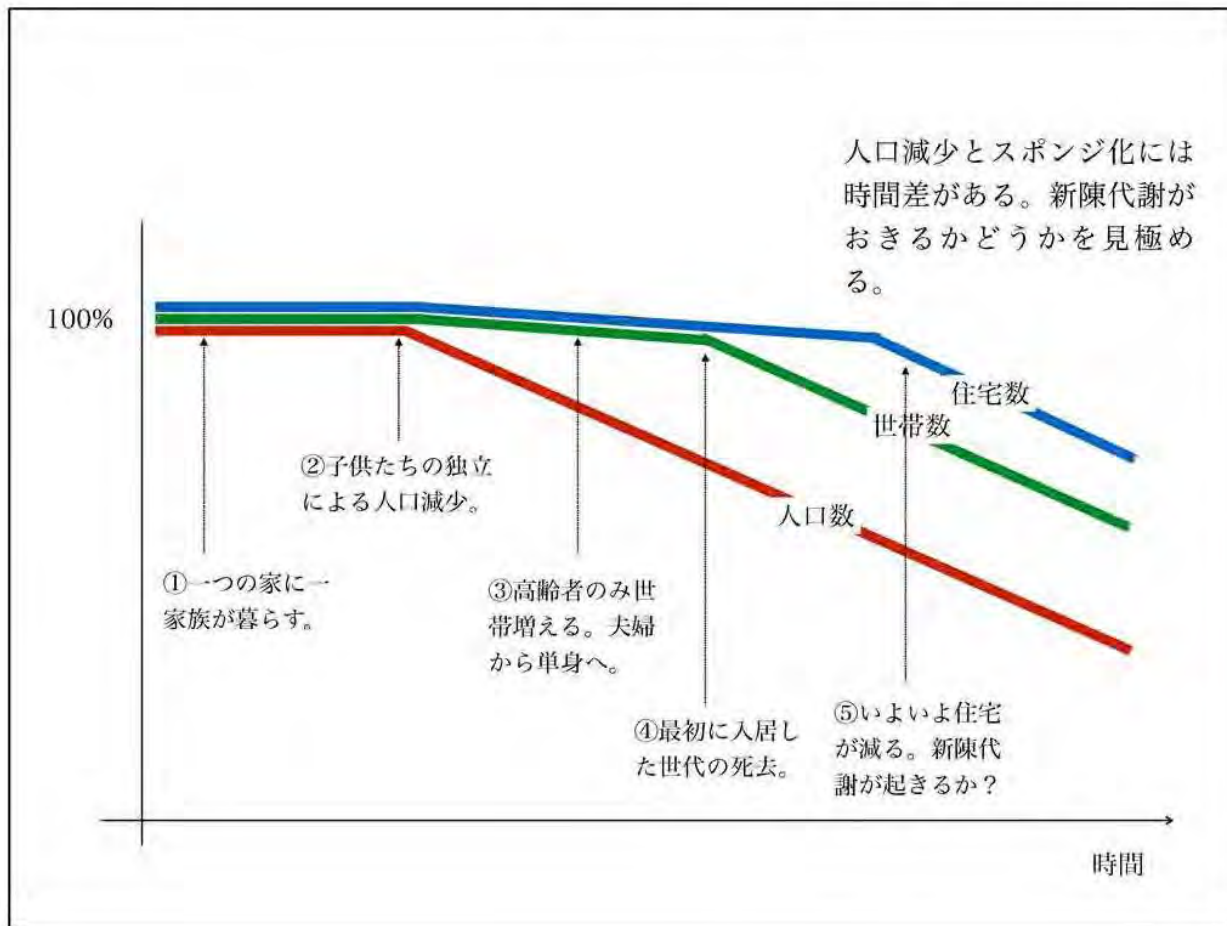


1 ポスト
コロナ時代
のまちづく
りへの提案



<https://drive.google.com/file/d/1sXnTvJ9pN7Ch8gsVXCTxnQYoSQSWsw9H/view?usp=sharing>





もくじ	
6つの新常識	2ページ
東京郊外の世帯数は減っていない	2ページ
東京郊外では二重の低密度化が進んでいる	2ページ
東京郊外の空き家はゆっくりとした新陳代謝の過程である	4ページ
東京郊外の市街地には多様性が維持されている	4ページ
東京郊外の低密度化は敵ではない	5ページ
東京郊外には世界一の公共交通網がある	5ページ
7つの郊外に向けて	7ページ
空き地・空き家を利用するなら	8ページ
都市農地を活用するなら	8ページ
公共施設を再編するなら	9ページ
都市計画道路をつくるなら	10ページ
駅前を再配するなら	11ページ
集合住宅のガバナンスを整えるなら	12ページ
戸建住宅を維持するなら	13ページ
ウィズコロナ、ポスト・コロナ時代の定常型市街地	14ページ
4つの変化	15ページ
再び、7つの郊外に向けて	16ページ
ケーススタディ1 茅ヶ崎駅と海岸地区	18ページ
ケーススタディ2 南大沢地区	18ページ
ケーススタディ3 豊ヶ丘地区	20ページ

6つの新常識

- ①東京郊外の世帯数は減っていない
- ②東京郊外では二重の低密度化が進んでいる
- ③東京郊外の空き家はゆっくりとした新陳代謝の過程である
- ④東京郊外の市街地には多様性が維持されている
- ⑤東京郊外の低密度化は敵ではない
- ⑥東京郊外には世界一の公共交通網がある

■ 今もスプロールが起きている住宅地の航空写真（小平市）

2002年



2009年



2019年



50m

6つの新常識

- ①東京郊外の世帯数は減っていない
- ②東京郊外では二重の低密度化が進んでいる
- ③東京郊外の空き家はゆっくりとした新陳代謝の過程である
- ④東京郊外の市街地には多様性が維持されている
- ⑤東京郊外の低密度化は敵ではない
- ⑥東京郊外には世界一の公共交通網がある

■ 東京郊外、ロンドン郊外、ニューヨーク郊外の住宅地の航空写真（2019年）

東京



ロンドン



ニューヨーク

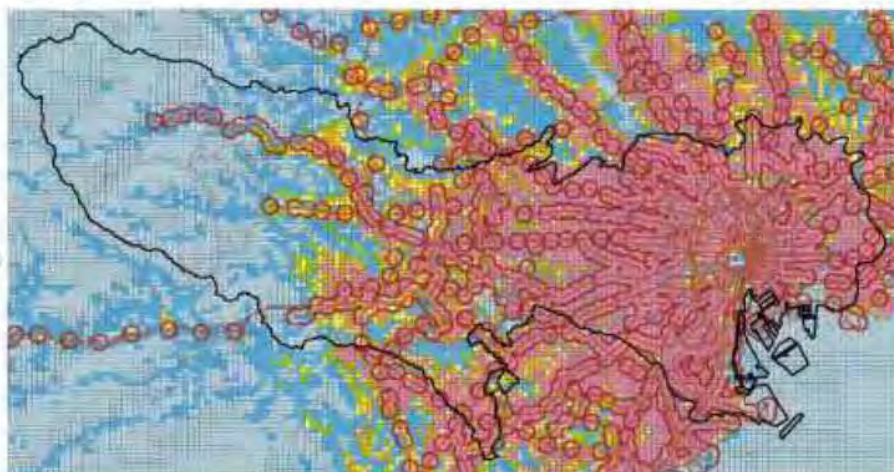


50m

6つの新常識

- ①東京郊外の世帯数は減っていない
- ②東京郊外では二重の低密度化が進んでいる
- ③東京郊外の空き家はゆっくりとした新陳代謝の過程である
- ④東京郊外の市街地には多様性が維持されている
- ⑤東京郊外の低密度化は敵ではない
- ⑥東京郊外には世界一の公共交通網がある

駅間距離500m
 500mメッシュ人口（人）
 0
 1-500
 500-1,000
 1,000-1,500
 1,500-2,000
 2,000-
 （2015年国勢調査）



7つの郊外に向けて

7

戸建住宅地を維持するなら

6

集合住宅のガバナンスを懸念するなら

5

駅前を整配するなら

4

都市計画道路をつくるなら

3

公共施設を再編するなら

2

都市農地を活用するなら

1

空き家・空き地を利用するなら

ポイント 1 住宅地の換新事業

既存の住宅地を解体し、新しい住宅を建て替えることで、都市の再生を図る。特に高齢化が進む地域では、新しい住宅の導入が重要となる。

ポイント 2 駅前を整配する

駅周辺を核として、新しい商業施設や住宅を誘致し、地域の活性化を図る。駅周辺の整備は、都市の発展に不可欠である。

ポイント 3 公共施設の再編

既存の公共施設を再編し、効率的なサービスを提供する。特に人口減少地域では、施設の再編が重要となる。

ウィズコロナ・ポストコロナ時代の定常型市街地

人口の動きと低密度化

人口の動きは大きく変わるだろうが、リモートワークが普及したこと、高密度な通勤環境や都市の職場を避けるといった理由から、都心から郊外へ、東京から地方へと、低密度な市街地に移住する人、あるいは複数拠点で生活する人たちが増えると考えられる。「低密度化は敵ではない」ところではなく、「低密度は価値である」としてとらえられるようになる。そこにあるべき「適切な密度」を見出し、創出していくことが求められる。

多様性の強みと弱み

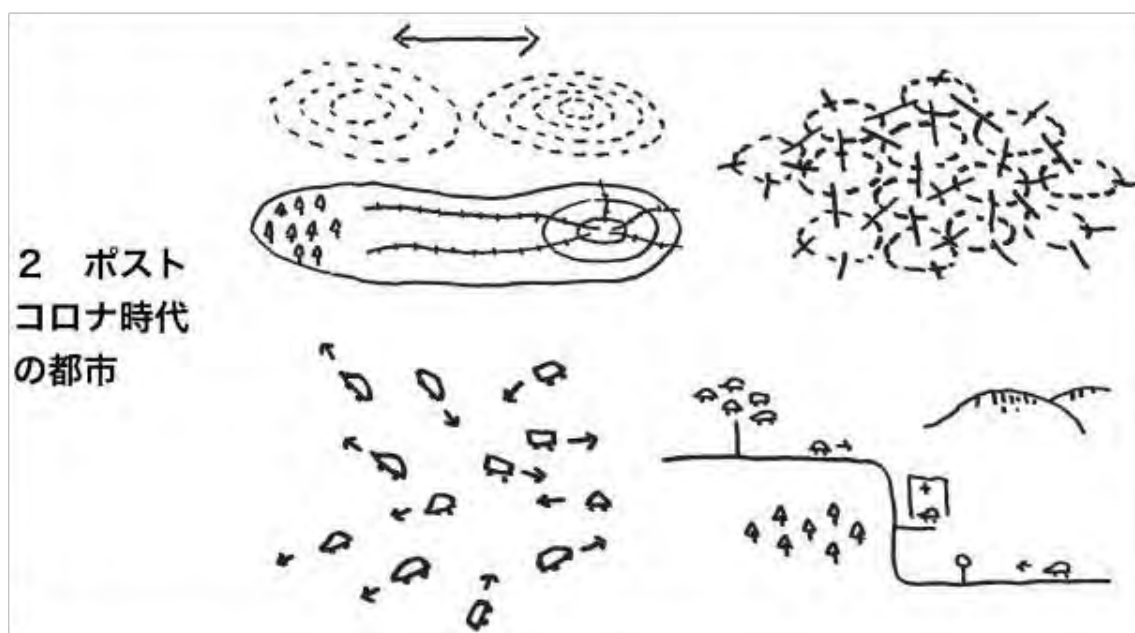
東京郊外の市街地は、都市空間に格差が固定されておらず、空間と、そこに暮らす人たちの多様性が維持されている。ウィズコロナ、ポストコロナ時代においては、感染症のリスクに晒される職種とテレワーク導入が容易な職種のような新しい違いや、ライフスタイルの違いが顕在化すると思われる。こうした新たな違いが空間的に顕在化することはないため、感染症のリスクは特定の都市空間に集中しないはずだ。それは真実か、せよどこにリスクが潜んでいるかわかりにくい都市空間であり、そこに安全・安心の施設をどのように埋め込んでいくかが問われている。

空き家の強み

経済の落ち込みにより、住宅地の新規開発が停滞することも考えられ、空き家の活用が積極的に行われると考えられる。空き家はここ数年のあいだ、「すぐに壊すべきもの」として、ネガティブな問題として認識されていたが、ウィズコロナ、ポスト・コロナ時代の空間の使い方の変化をきっかけに、戦後することができるようになる。例えば、空き家を「第二の低密度化」に、これまでよりは少くともしたものに、空き家の新陳代謝も、よりゆとりとしたものになるという。

交通手段の転換

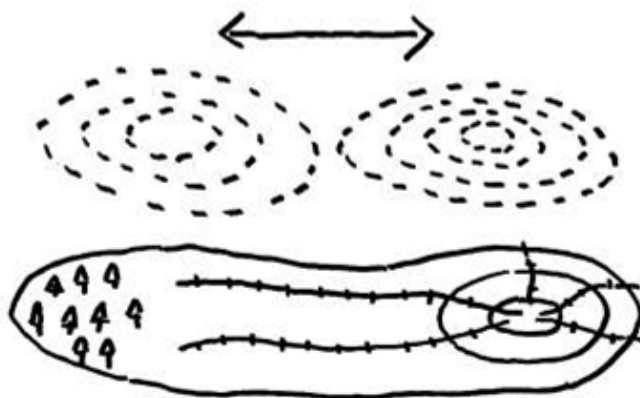
電車やバスなどの公共交通は感染拡大防止のため利用者が減少しており、大幅な収入減が予想される。車内の密度を下げ、改札に検温センサーを設ける、乗車履歴データにより感染経路を予測する、といった感染拡大を抑制する仕組みづくりも重要であるが、公共交通では支えきれない人の移動を支えるよう、交通手段の転換が必要である。自家用車の増加は望ましくないため、自転車への転換を誘導するとともに、自動運転の公共交通を導入する必要がある。



Q 何が起きているか？

A 都市の重心が日替わりであちこちに動いている

都市の形にはまだあまり変化がなく、その固い形の上に、毎朝の新型コロナウイルスのニュースにあわせて、日替わりで数百万人分の都市の重心があちこちに動いている



Q 誰が動かしているか？

A 私たちが動かしている

災害のように、強制的に動かされているわけではなく、動きかたの選択の余地は私たちが持っている。東日本大震災のあと、私たちは空っぽのトラックにたくさんの支援物資を詰め込んで被災地に向けつけたが、いま私たちができることは、一人ひとりがすでに75年分の荷物が積みこまれた自家用車を運転し、あちこちで何かをおろし、何かを積み込んで、誰かを道連れにして次の目的地に向かっていくことである。



Q 都市はどういう形になっていくか

A 群島型の都市になる

広がりきった都市は小さく分かれて群島のようになり、都市は細いネットワークでつながれた群島のようになる。それぞれの島の内部は細かく作り込まれ、そこで暮らしと仕事が完結する。それぞれの島は孤立しているわけではなく、目に見えない高密度な情報のやりとりが全ての人をしっかりとつないでいる。

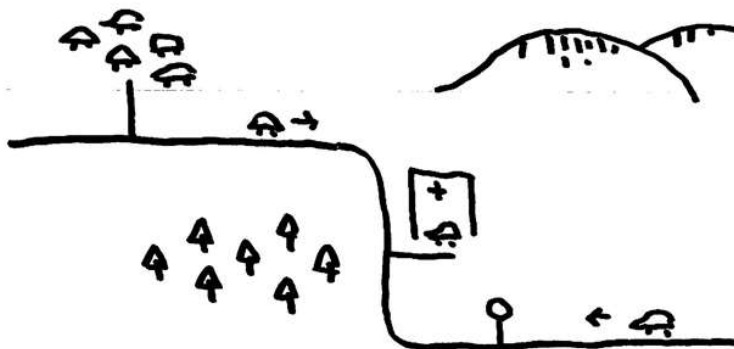


Q そこには何が必要か

A 小さな移動を支える小さなインフラを増やしていく

都市においてまず必要なことは、自家用車の待合所やドライバーが体を休める場所、自家用車のメンテナンスの場所など、自家用車の移動のための小さなインフラを増やしていくことなのだろう。（もちろんこれは比喻であって、物的なドライブインやコインパーキングがただちに必要であるという意味ではない。）

そして1~2年ほどこれらの自由な動きを積み重ねた上で、それぞれの群島を結ぶためには細い道ではなくやっぱりハイウェイが必要だとか、自家用車ではなく小規模なバスでも安全だとか、自家用車が維持できないので歩くしかないとかいう判断をし、大きなインフラを増やしていく





**コロナでも『どっこい、つなげるまちづくり』
ポストコロナ時代の社会像と地域まちづくりの展望**

2月23日

東京都立大学 饗庭伸

- 1 ポストコロナ時代のまちづくりへの提案**
- 2 ポストコロナ時代の都市**

3 実践報告 ～明日からのまちづくり～

1 「外」とつながる地域コミュニティ

奥井利幸（野毛坂グローバル）

グローバルの奥井と申します。今回は貴重な機会をいただき、ありがとうございます。

本来は主催団体の横浜プランナーズネットワークの会員ですが、今日は野毛坂グローバルという団体として発表させていただきます。

今回は『「外」とつながる地域コミュニティ』というタイトルで、アフターコロナ時代の地域コミュニティを目指して、ということで、あくまで

「目指す」というお話になりますが、そこはご容赦ください。先ほどの饗庭先生は具体的なお話と、それを踏まえたお話でしたが、私の方はもう少しモヤモヤした、明後日の話かという気がしております。



■地球規模課題と地域課題はつながっている

いきなりですが、この写真が何処か分かる方はいらっしゃいますか？ …、香港ですね。香港の人が横浜に来て、みなとみらいに連れていくと「何で日本のビルはこんなに背が低いのか？」と不思議に思うようです。それはともかくとして、去年のお正月に家族旅行で香港に行きました。海外旅行といっても、香港とか安く気軽に行ける、ということで。いま、何が言いたいのかといいますと、ここでお見せする「中国で原因不明の肺炎患者相次ぐ」というニュース。これが2019年12月31日、だいたいこの頃にこういうニュースがあった。こういうニュースがあった時に、「中国、怖いよね」というような印象を持たれた人はいると思いますが、その時点で今の日本を想像していた人ってほとんどいないんじゃないかと思います。

地球規模課題。感染症とか気候変動、普遍的な人権とか世界経済とか、そういうものを地球規模課題ということでよく話題になります。その一方で地域課題と言われるものもあります。過疎化、ごみ置き場の場所、地域防災、そういう多様な課題がたくさんあります。

この二つは全然違う話かな、と思ったら実は新型コロナの例にあるように、実は結構密接に関係しているんじゃないかな、というのが今日の私の結論です。

ここで終わってもいいくらいですが、これで終わると時間があまるのでもう少しお話させていただきます。

■社会課題への対応の方法の変遷

野毛坂グローバルという団体ですが、グローバルとはグローバル、プラス、ローカルということです。よく野毛坂グローバルという団体をやっていると、「野毛坂グローバルが解決しようとしている地域課題は何ですか？」、あとは「早くコロナが収ま

って元に戻ると良いですね」っていうこともよく話します。もちろんそれはそうですけども、ですけど、「元」って何なのかな、元の社会が良い社会だったんだろうか、という違和感というかモヤモヤを感じることもあるんですよ。何でそういうふうに違和感やモヤモヤを、感じるのかと思ったんですが。

ここにお見せするのは横浜市の組織図の一部ですが、ピラミッド型で細かくて見ていてクラクラします。横浜市は人口 370 万人の規模の都市ですので、縦割りで緻密に出来ているということです。乱暴に一言で言ってしまうと、これは「課題解決型の組織」です。各々の課題の担当部署があって、ピラミッド型になって、こういう組織図になります。それが悪いことではないのですが、決して柔軟にはいかない、いわゆる「縦割り」の弊害ってことです。縦割りがすべて悪いわけではないのですが、それでもこのようなコロナ禍に柔軟に対応は難しいところがあります。たとえば、いまだに、オンラインの活用は行政は遅れていますよね。

そのような行政的な組織の考え方に我々市民団体もひっぱられているのかなと思うことがあります。市民社会の NPO や NGO、あるいは町内会のような地縁団体が目指す組織図はこういう組織図ではないのではないかと思います。

次に、示すのは、いろいろ社会で議論されていること、それと私の話を合わせたところをまとめたものですが、「社会課題への対応の方法の変遷」の図です。

東京都市大学の佐藤真久先生の絵を使わせていただいておりますが、今も以前もそうですが、課題解決への対処というのはどういうことかということ、問題分析から始める。どういう問題があるんだろう、それがどう絡み合っているのだろう、というような、そういうことをやります。プロジェクトを始めると、まず問題分析から始めます。そして、その問題を解決するにはどうするかと考える。私も役所にいるときはずっとそうやってきたし、今もやっているはずですよ。

ただ、それだけで、良いのかという話で出てきて、「持続可能」という言葉がでてきた。30 年くらい前ですかね。少し遅れて、「人間の安全保障」という言葉が注目されてきた。「人間に着目する」ということですね。

そして、今、言われはじめているのが「ありたい社会、理想の社会」です。

SDGs なんかで 2030 年に何を達成するんだ、2050 年に何を達成するんだ、それを達成するためにはどうするんだ、という「バックキャスティング」という言葉がいろんなところでいわれている。みんな、好きですよ、「バックキャスティング」という言葉。

ただ、それだけではだめで、「あり得る社会」つまりいわゆる VUCA、つまり、変動、不確実、複雑、あいまいな社会、要はどんなことが起こるか分からない、想定外のことが起きるのを想定内と考える、それに対応できる社会が必要なのではないか、それが今です。

まさに今、With コロナ社会ですが、去年は誰も「コロナは想定していなかった」のですけど、何が起きようが柔軟に対応できる社会というのが必要なのではないかな、ということで、むしろこれはチャンスでもあるのではないかなということです。

■課題解決で何をリセットするのか

ダボス会議のテーマが何かというと、私もニュースで見たですけど、「グローバルリセット」というのが話題になったと。グローバルリセットというのは何かとい

うと、マクロのリセット、ミクロのリセット、個人のリセットということです。

地域コミュニティで私は活動していますので、私の立場からは、地域コミュニティの何をリセットするか、ということをおもったりします。

先ほど述べた課題解決型組織をリセットしなければならない。私が思うのは、行政が中心になってやるのではなくて、地域コミュニティが中心になって先行取り組みをする。地域コミュニティが行政に参加を促す、これが一つのリセットではないか。

行政が市民に参加を促すということが今まで、これからは逆で、「市民が行政に参加をしてください」と促す事態があるのではないかな。

横浜には、市民発意のまちづくり事業で、「まち普請事業」というものがあります。この事業はまさにVUCAに対応しているのではないかなと思います。

ところで、野毛坂グローカルの活動場所の例ですが、一つはグローバルですね。海外での国際協力を行ったり学びあいを行っています。

もう一つはローカルなんですが、丁度、今日の活動している場所の自治会長さんがいらっしゃるので、ここはどういう場所か、川島会長さん簡単に説明していただいてよろしいでしょうか。

川島明弘 横浜市西区羽沢西部自治会長：

この街はですね、すり鉢を想像してもらって半分に切った感じの地形です。上下の難段のようなところにみんな住んでいます。木造家屋の密集地で災害に弱い。道が狭く段差があるので、火事になっても消防車もはいつて来れない。坂道なのでお年寄りの移動が困難。しかし、上下方向に散らばっているもんですから結構風通しが良いというのと、日当たりが良いし、地域のつながりの深い住みよい場所です。戸数は約500戸で、自治会役員は11名で奥井さんも含めて活動させて頂いております。

■繋がらないものを繋ぐ

川島自治会長、ありがとうございます。グローバルとローカルでグローカルですが、私は野毛坂グローカルが取り組む課題を「3つな」とよんでいます。今日のテーマは「繋がり」ですが、「地域コミュニティの中と外で繋がらない」、「日本と途上国が繋がらない」、「主流の人と取り残される人が繋がらない」。これを繋げる活動をしているのが、野毛坂グローカルの活動です。

「3つな」を少し説明すると、ひとつめ「コミュニティの中と外が繋がらない」、ということですが、人を中心とした活動場所をイメージしてください。日本では小さい時は、幼稚園、小学校、子ども会といった地域の中で多く活動しています。高校、大学となると、地域の外の活動が多くなってくる。そして、地域は単に寝に帰るだけになる。

それが日本の一般的なところではないかな、と。それに対して途上国ではどうかと言うと、実はかなり似ているのです。子ども時代は地域の中で、そして成長すると、活動の主となる場所は、地域の外になります。

しかし大きく異なるのは、活動場所が地域から地域外に移動するのではなく、活動場所が広がって行く。つまり、地域でも活動する、その外でも活動する、そういう人が多い気がします。

このような社会が私の目指す社会というふうに思っております。そのために、海外と日本が学びあうということが大切になってくると思います。

では、野毛坂グローバルの活動例を少し紹介させていただきます。

たとえば、町内会と国連とで地域防災について考えたり、ミャンマーの NGO と町内会や小学校と意見交換する、タイの地方自治体と町内会の意見交換、大臣級の方に来ていただいたりすることもありますし、南米日系人グループとコミュニティ女性グループのコミュニティ食堂のオンラインでの相互訪問、アセアンの学生と町内会コミュニティづくり、こういった活動をしています。先ほど、紹介した川島会長はこのような活動のキーマンです。

まとめさせていただきます。先ほどの絵で言うと、野毛坂グローバルのキーワードは「多様な価値観」、「住民主体」、そして、国内外の様々な人や団体をつなげる、そして学びあう。そういった活動を行っております。どうもありがとうございます。

「外」とつながる地域コミュニティ

～アフターコロナ時代の地域コミュニティを目指して～



2021年2月23日

野毛坂グローカル

奥井利幸

地球規模課題例

感染症

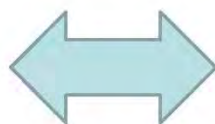
気候変動

人権

世界経済

エネルギー

.....



以前は地球規模課題
と地域課題は別の課題
でも、これからは、
密接に関係する課題

地域課題例

過疎化

ゴミ置き場の場所

地域防災

買い物難民

.....

よく聞く問い：

野毛坂グローバルが
解決しようとする
地域課題は何ですか？

はやくコロナが収まって
もとに戻ればいいですね。

⇒違和感を感じることもある

地域課題解決の先に「あるべき社会」があるのか？
コロナ前の社会が「あるべき社会」なのか？

注：ここでいう「課題」とは短期的に実現しようとする
課題であり、広い意味での課題ではありません。

社会課題対応の方法の変遷

（図：東京都市大学 佐藤真久教授）



市地域コミュニティの「リセット」例

行政は縦割り組織
(課題解決型組織)
= 「ありたい社会」実現型、
「ありうる社会」対応型
の組織では基本的にはない。



地域コミュニティが
中心になって先行取り組み

地域コミュニティが
行政に参加を促す

新型コロナ後の地域コミュニティのいちモデル



ヨコハマ市民まち普請事業
市民発意の市民主体・対話型事業

VUCA(変動、不確実、複雑、曖昧)
対応社会の先行事例！ 多し！

野毛坂グローバルの活動場所例

1. グローバル

日本⇒タイ



2020年11月26日
協力協定調印式

ブントー市
タップマー市
タマサート大学

タイ⇒日本



2020年9月21日
日経新聞

4年間で30回
1000人以上訪日研修

野毛坂グローカルの活動場所例

2. ローカル 横浜市西区西戸部町



急傾斜



木造住宅密集地



細い道・階段

◆課題がある地域だからこそ
最先端の場所

野毛坂グローカル

の活動

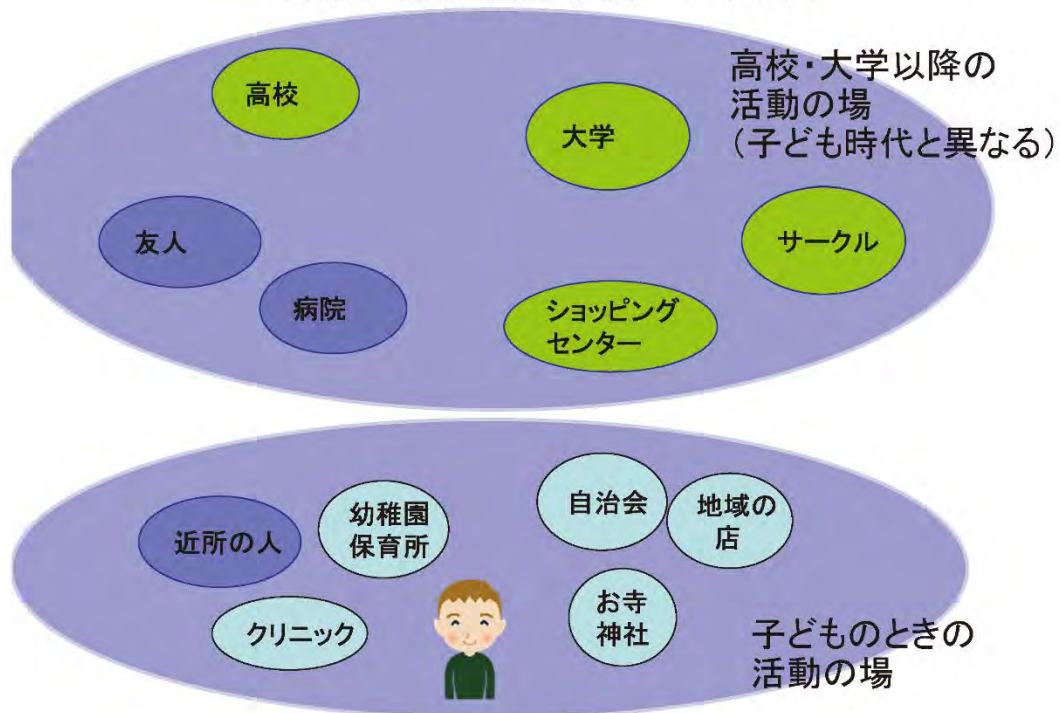
3つの「つながり」のリセット

『三つな』

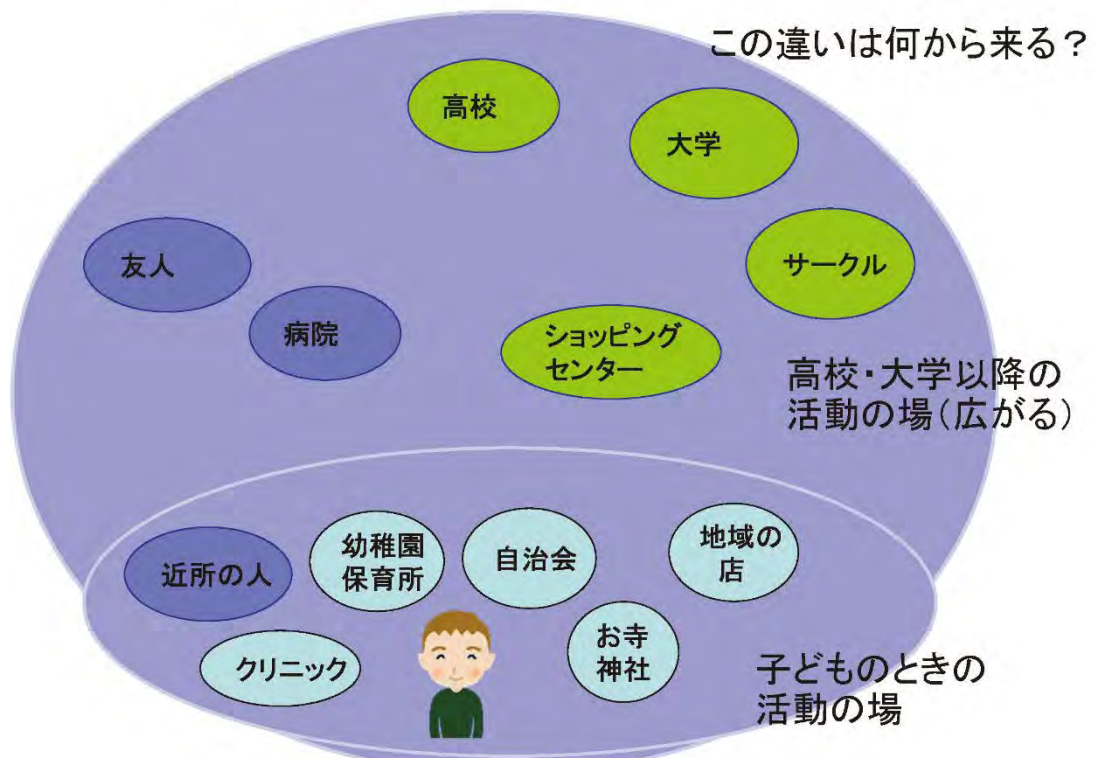
1. 地域コミュニティの『中』と『外』がつながらない
2. 『日本』と『途上国』の人々がつながらない
3. 『主流の人』と『取り残される人』がつながらない

1. 地域コミュニティの『中』と『外』が繋がらない

自分から見た社会の資源(日本)

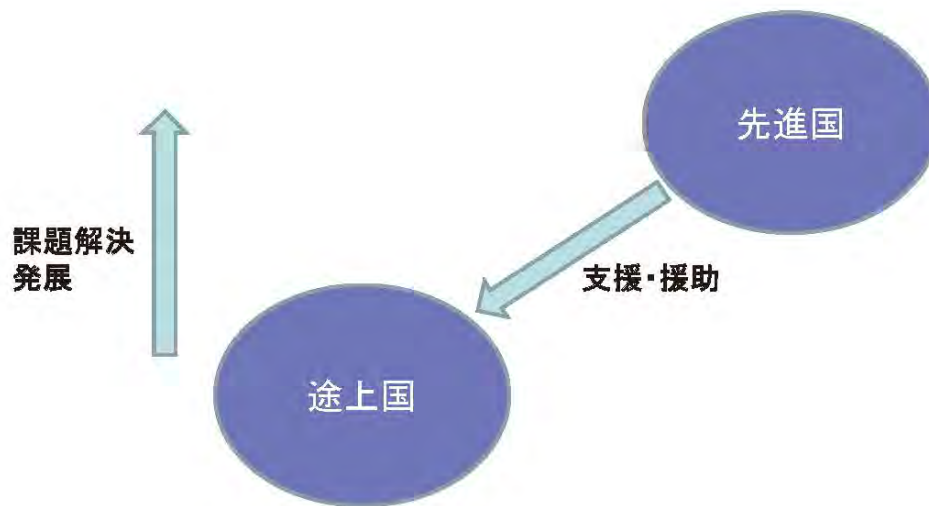


自分から見た社会の資源(途上国)

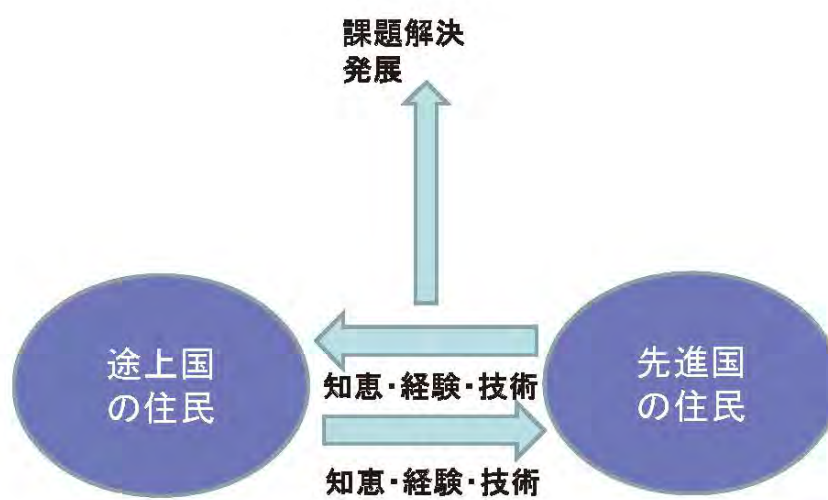


2. 『日本』と『途上国』の人々がつながらない

従来の途上国との関係性



私の考えるの途上国とのかかわりの考え方



活動具体例

国連※町内会
(コミュニティ防災)



タイの地方自治体※町内会
(コミュニティ高齢者ケア)



南米日系人女性グループ※コミュニティ女性グループ
(コミュニティ食堂)



ミャンマーNGO※町内会・小学校
(学校中心のコミュニティづくり)



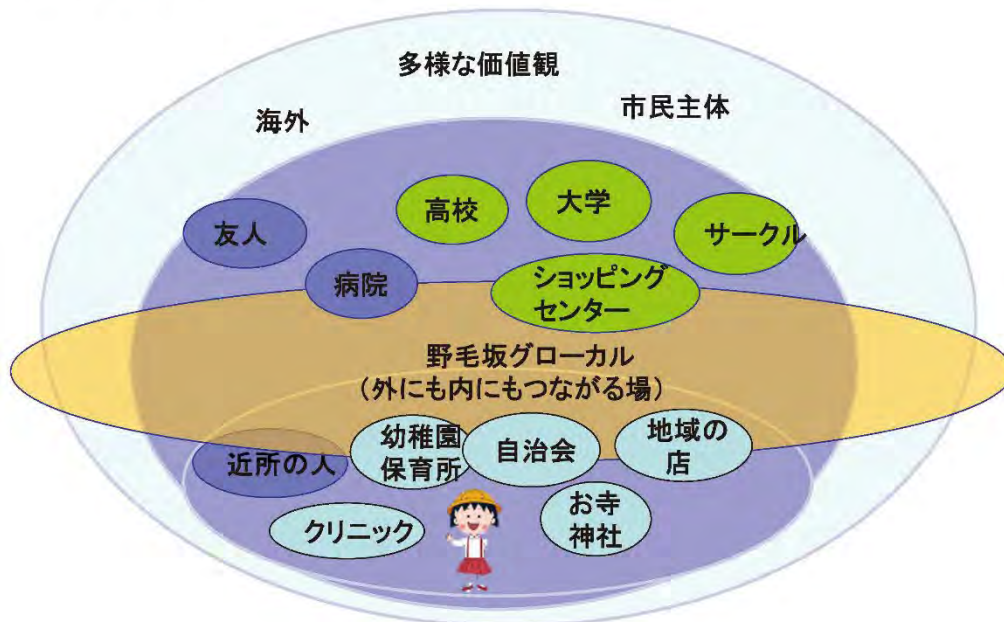
大臣級(タイ・メキシコ)※町内会
(高齢者福祉政策(コミュニティケア))



ASEAN学生※町内会
(コミュニティづくり)



野毛坂グローバルとは？



2 地域で多彩なつながりをつむぐ住み開き

五味真紀（cafe ハートフル・ポート）

旭区希望ヶ丘で「住み開きカフェ」をしています五味と申します。

先ほど饗庭先生からお話があった空き家利用です。二世帯住宅の一階部分に住んでいた母が亡くなってから十年になりますが、この空きスペースを使った「住み開きのカフェ」を今日はご紹介します。

その前に、菅さんからどうしてもこの曲を先に流してほしいというリクエストがありましたので（笑）、これを聴いていただいた後で私の活動についてお話したいと思います。



■まちづくりは楽団を作るようなもの

『この希望の街で』

♪ この街で生まれこの街で育ったこの街で学びこの街で遊んだ

1. この街で生まれ この街で育った この街で学び この街で遊んだ
悲しいことも 悔しいことも 涙を拭いて 大人になった
見守りあって 助け合って みんなで支えあう この街で
2. この街に嫁ぎ この街で育み この街で笑い この街で泣いた
うれしい時も 苦しい時も 分かち合える 仲間がいた
はげましあって いたわりあって みんなで支えあう この街で
この街を離れ この街に戻る この街に暮らし この街に眠る
この街はふるさと 希望の … ふるさと

「音楽はまちの人をつなげて元気にする役割がある」と思っています。

希望ヶ丘には、音楽家がたくさん住んでいて、うちのカフェでいろんな音楽イベントをやってくださっています。実は、以前私が地域活動をしていた時にふと思いついて作詞作曲した『この希望の街で』を、この音楽家のおひとりが聴いてくたって、「この曲をCDにしてまちの曲にしませんか？」と言ってくださったのをきっかけに、小学校の校長先生や、ケアマネさん、ケーキ屋さん、子育て支援者、八十歳のハーモニカ奏者のおじいちゃんなどが集まり、みんなで楽しくワイワイとカフェでレコーディングをしてCDを作ったんです。

「まちづくりは、楽団を作るようなもの」だと思っています。

楽団には、楽器を演奏する人、歌う人、それから指揮をする人、それから裏方も必要だし、演奏会をしようと思ったらお客様も必要になってくる。いろんな人たちが一つの演奏会をつくり上げていく。まちづくりも同じで、いろんな人が関わって一つのハーモニーを作っていくのではないかと考えております。

本日のテーマが繋がるまちづくりということですが、「人と人とがゆるやかにつながっていくまちづくりをカフェからはじめる」ひとつの事例として、本当に小さな虫の目の事例ですので、そのつもりで聞いていただけたらうれしく思います。

■自宅を地域に開くと

ハートフルポートですけども、横浜市の相鉄線希望ヶ丘駅から徒歩 10 分くらいの所にあります。住み開きカフェということで、飲食業として開業してかれこれ 7 年目になります。私の他にスタッフが 4 名の計 5 名。住み開きカフェ——これは本当に究極のテレワークなんですね。自宅でしかも、自分が好きな時間に好きなように、お金も好きに使えて、営業日も決められて、好きなことができるということです。自宅という空間を自分のために、来る人達や地域のためにプロデュースするのです。

自宅を地域に開いたことによって、いろんな物語が生まれました。認知症のおじいちゃんおばあちゃんご夫妻が毎日毎日来て、「ここはカフェなの？ ご飯食べていいの？」と同じこと聞かれるので、「いいんですよ、ここはいつ来てもいいんですよ」と応える。すると本当に毎日来られて、自分が何か食べたかも忘れてしまうので、「これはさっき食べたから今日はもうやめておきましょうね」なんて会話のやりとりをする。施設に入所されるまで、うちはそのご夫妻にとっての居場所になっていました。

地域の 85 歳の男性が、赤ワインを飲むのを楽しみによくいらっしゃっていました。昔は横浜のおしゃれなレストランに行ってたようですが、今は行けなくなったので、歩いて来られるところにあるからうれしいといって、お友達や奥様とよくいらっしゃっては、昔の話をいろいろお聞きしていました。今では施設に入られ、時々メールのやり取りをしています。

同じく高齢の男性で、毎日一万歩以上歩くことを目標にお散歩の途中に寄られる方がいます。カフェに入って一杯のコーヒーを飲むのが楽しみだとか。「デイサービスとかには行かないですか？」と聞くと、「僕はあんなところ行きたくないよ。僕はやりたいことを、自由にやりたいんだよ」とおっしゃる。時に、ちょっとしたお花などを私たちに持ってきてくださることも。それもまたその方の楽しみになっているようです。

またご事情があり一人暮らしを始めた女性が、ここに来ると誰かとお話ができるからと、「ここは私のリビングルーム」と言って来て毎週来てくださったり。まさにカフェではいろんな人にとって物語が生まれる場所になっています。

■こういう時だからこそ居場所

とは言ってもコロナ禍。人が集まる場所を作ったのに、人が集まることができなくなってしまった。どうしよう・・・と、皆さん同じような悩みを抱えていらっしゃると思うのですが、コロナ禍、人と会えなくなった人が孤立化しています。地域では本当に孤立した人が増えました。

最初の緊急事態宣言下では子ども達も学校が閉鎖になり、家にご主人もいる。「ご飯作んなきゃいけない、大変！」という声を聞きました。また、オンラインが進んだとはいっても高齢者はオンラインにはとてもついていけず、ますます高齢者の孤立は進んでしまい、コロナ鬱になってしまう方がとても増えていると、自治会の役員の方からもお聞きました。

そこで私たちにできることは何かまず考えたことは、やはりこういう時だからこそ地域の居場所というのは絶対必要！なくしてはいけないということ。誰でもふらっと

来て、顔を見て、声を掛け合って、ホッとできる場所、それが今こそ必要だと。でも三密にはならないためにはどうしたらいいんだろう。スタッフともいろいろと考えました。

まず大切にすることは、繋がりを維持すること。それでカフェとしてやったことは、お家でご飯作るのが大変だというお悩みや人と会わなくなって孤立化する不安を解消するために、去年の5月からお惣菜の販売を始めました。お家でご飯は炊けますよね。だけどもおかずが大変なんです、主婦としては。なのでお惣菜の販売を開始。メインと副菜。お惣菜を各種作って予約していただき、時間をずらして買いに来ていただきました。屋外で顔を見ながらちょっとしたお声がけもでき、お客様同士が外でお話もできるしということで、ニーズがあったのか、とても喜ばれ、売り上げがカフェやってた時よりも上がりました。

それから6月中旬の緊急事態宣言が解除されてからは、中でも飲食 OK にし、9月からは免疫力アップできるようなメニューを開発し、年が明けてからの2回目の緊急事態宣言下では、テレワークをしている人がすごく増えてると聞くようになったので、すぐ食べられるお弁当販売を始めました。

先ほど人口動向の話もありましたけれども、希望が丘というまちは、60年ぐらい前に開発されて開始された世代の人たちから入れ替わり、第二世代に変わってきていて若い人たちが流入してきてるんですね。そういう若い世代が入ってくることによって仕事をする人たちも増えてきます。そういった地域のニーズをキャッチすることもできました。

「居場所として繋がりを維持する」ために、オンライン、ハイブリッドでいろんなイベントを開催してきました。うちのコミュニティカフェができたことによって、近隣に同じようなコミュニティカフェがいくつかできてきたんですが、そういう地域のカフェをサテライト会場としてつないでハイブリッド企画をしました。Zoomなど便利なオンラインが増えましたが、ちょっと悲しいなと思ってることは、イベントが終わり退出したら、画面から誰もいなくなり、ポツとひとりぼっちになっちゃいますよね。その寂しさを解消するために、近隣のカフェに分散して参加してもらったんです。大きな集団ではなくて小さな集団をいろんな所に作ってそれをつなげるのです。そうすることによってイベントが終わった後、聞いたことをもとに皆で感想を言い合うこともできました。

■コロナが教えてくれたこと

哲学カフェも開催してきました。子ども達、大人にとってもモヤモヤすることがたくさんあります。「学校って何だろう?」とか、「そもそもつながりって何?」とか、モヤモヤすることを吐き出し、妄想し、また環境問題について学んだり、SDGsについて参加者同士で考えたりすることも並行して行ってきました。モヤモヤすることは本当にいっぱいあります。

「そもそも居場所ってなんだろう?」ということを私も考えるようになりました。「コミュニティカフェって、そもそもその役割は一体何?」。地域の溜まり場は必要だとは言われるけど、「なぜそれが必要なのか?」。場は作りました、はいじゃあどうぞ来てください、では人はけっして来ない。つまり、「人は一体何を求めてその場に行くんだろう」——そういうことを考える機会を頂けたのは、コロナ禍だったからな

のかもしれませんが。

それから考えさせられたことは、飲食店は単に飲食を提供するだけの場ではないということ。飲食店は本当に今大打撃を受けています。お店を開けているだけで赤字になるので、お店を閉めて持続化給付金を貰っているところもあります。もともと売り上げが少ないところにとって、この給付金はとても魅力的です。でも私ちょっと思うんですね。「そのお金を貰うことによって何か本来やるべきこと、本当はできたことをやらなくなってしまってるのでは」と。

飲食店というのは、決して飲食だけが目的ではない、もっともっと大きな価値を生み出している場所であるということを考えさせられましたね。社会の価値観が大きく変わっている今、変わってる時だからこそ、「何を変えないといけないか、そして何を変えてはいけないか」と言うことを自分に問いかけ続けました。じっとしては何も変わりませんからね。考えたら行動です。

■目指すのはインフォーマル・パブリックライフ

ハートフルポートが目指しているものは、「インフォーマル・パブリックライフ」。これは『カフェから時代は創られる』の著者のパリのカフェの文化とサードプレイスについて研究されている飯田美樹さんがおっしゃっていることなんですけども、そこは自由な空間であり何をしてもいい場所。そこに行けば何かが生まれる場所であって誰かと繋がることができ、自分でやりたいことが地域の課題解決につながっていける場所、そしてそれが住みやすい街づくりにもつながる場所。

とは言ってもお金はやはり大事な問題です。事業化を目指す売上を考えなきゃいけない。ボランティアでいいといえれば生きがいとなる。そこで、私たちが目指しているのは、そこそこ儲けて無理なく楽しく生きがい、もっと言えば、「大きな価値を生み出す小さな商い」——これができる場所です。

ハートフルポートの三つの事業は、「カフェ」と「多世代のイベント」と「地域の課題解決」です。

まず、場の入口としてのカフェ。

次に、多世代が交流できるイベントもいろいろあり、音楽、本、手作り、哲学、しゃべらん会など、いろんな事をやっています。

それから地域の課題解決としては孤立している人を孤立させない。みなと食堂という子ども食堂やひとり親サロン。認知症カフェは月一回やっていますが、今は広いスペースのあるケアプラザをお借りしています。

地元の福祉事業者との繋がりとして、商品開発を一緒に考えたり、一人暮らしの高齢者の生活支援をする団体との連携をしていろんな活動したり、ほかのコミュニティカフェと連携をしたりしております。環境活動も行っております。

このようにハートフル・ポートにはいろんなコミュニティがありまして、それは決してこちらが作ろうと思って作ったものではなくて、集まってきた人達で自発的にどんどん作られていったものです。いろんなイベントは、何かをやりたい人がそのやりたいことで地域のためになることにつながります。場を提供している者としては、それを応援することでコミュニティが生まれ、つながりが生まれていくことは嬉しいことです。

コロナ禍でやったことは、モヤモヤすることを吐き出す「もやっとカフェ」（子ど

も向け、大人向け)、それから夢を語る「妄想カフェ」があります。この時の参加者の中には実際一歩踏み出した方もいらっしゃいます。

■地域の小さなコミュニティを繋ぐ

このように多様な関わる人を増やしていくということで、この繋がり、今回のテーマである「繋がりをつくる」ってことでしたけども、私は、「つくるのではなく、つくられていくもの」だと思っています。ただ、つくられるためには、そのきっかけをつくってあげることが大事ですね。

社会というのは、このようないろんな小さなコミュニティの集合体です。家族というのもひとつの小さなコミュニティもあります。地域の自治会とか子ども会とかいろいろありますけども、どんなコミュニティであっても、大切なのは自分がそこにいて居心地がよく、大切な場であり、そこにいて生きがい生まれ、社会を変える場にもなっていくということです。

そんな場所が、地域に点在してつながっていくことで地域コミュニティは形成されていくのだと思います。先ほどの饗庭先生の話にも通じますが、空き家となったスペースにコミュニティカフェをどんどんどんどん作り、そのオーナーさんが良き理解者となり一緒にやろうよっていう動きになれば最高にうれしいですね。

コロナ後のコミュニティを考えたときに、オンラインといってもやっぱり限界があると思います。むしろこれに頼りすぎることの危険性も感じています。特に若い人たちがオンラインに頼りすぎてリアルな場で人と触れ合う機会がなくなったら、生身の人とどう接していけばいいかわからず、コミュニケーションが取りづらくなる人も増えてくるのではないかと心配です。

地域にあるコミュニティカフェがそういう人達をつなげる役になればいいなと思っています。小さなカフェの大きな役割です。

まちという場が今「暮らす場であり、働く場になり、学ぶ場にもなって遊ぶ場」にもなってきました。そういうまちを、自分たちが住みたいまちを、自分たちで作っていく時代にこれからはなっていくんじゃないかなと思って、先ほどの饗庭先生のお話を聞いて本当に共感したところです。

以上でハートフルポートの活動のご紹介を終わりたいと思います。

ありがとうございました。

これは宣伝、先ほどの CD を 300 円で売っておりますのでご希望の方はこの会場に置いてありますのでどうぞ。

この希望の街で♪

～まちの人が作った、まちの歌～

【制作の背景・目的・趣旨】

「社会的孤立度」が先進国の中でも最も高いと言われる日本——
「つながり」や「コミュニティ」が希薄になりつつあるということが大きな社会問題となっています。

そのような中、この希望が丘のまちでは、人と人とが支えあい、助け合う文化・土壌が育まれてきました。困った時には、地域の人同士で助け合い、声をかけあって支えあう人の温もりが感じられます。

そんなまちへの愛着が深まり、音楽を通してそこに住む人同士がつながり元気になるようにと、地元の音楽家有志が「まちフェス実行委員会」を立ち上げ、「この希望の街で♪」のCDを制作しました。作詞作曲・編曲、演奏、レコーディング、CDデザインもすべて地域に住む方々によるものです。混沌とした世の中、日本各地に希望の輪が広がるようにとの想いが込められています。

(2018年6月制作)

制作：まちフェス実行委員会希望が丘（代表：伊原鉄朗＊イハラ音楽教室）
演奏：希望が丘Lovers（希望が丘を愛するまちの音楽家・まちの人）
作詞・作曲：五味真紀
編曲：秋岸寛久

販売価格：300円（売り上げはまちの音楽活動に使われます）
連絡先：café ハートフル・ポート ☎045-777-8159

1. この街で生まれ
この街で育った
この街で学び
この街で遊んだ

悲しいことも
悔しいことも
涙を拭いて
大人になった

見守りあって
助け合って
みんなで支えあう
この街で

2. この街に嫁ぎ
この街で育み
この街で笑い
この街で泣いた

うれしい時も
苦しい時も
分かち合える
仲間がいた

はげましあって
いたわりあって
みんなで支えあう
この街で



この街を離れ
この街に戻る
この街に暮らし
この街に眠る

この街はふるさと
希望の … ふるさと



住み開きカフェ ハートフル・ポート



ハートフル・ポートについて

所在：横浜市旭区南希望が丘
住宅街にある2世帯住宅の
1階部分をリフォームした
「住み開きカフェ」



開業：2014年6月

業種：飲食業

運営：個人事業主
スタッフ4名（＋私）





住み開きカフェについて

究極のテレワーク！



住み開きカフェのいいところ

自分の時間を自由に使える
自分の空間を自由に使える
自分のお金を自由に使える

ひとりでも、
家族とでも、
仲間とでもできる
他団体・自治会とやる

家族とのコミュニケーションが増える



住み開きカフェの困るところ

オンとオフが付きにくい
プライベートとパブリックが一緒になりやすい
事業の収支があいまいになりがち

家から出なくなる

家族への家事の負担が大きくなる？



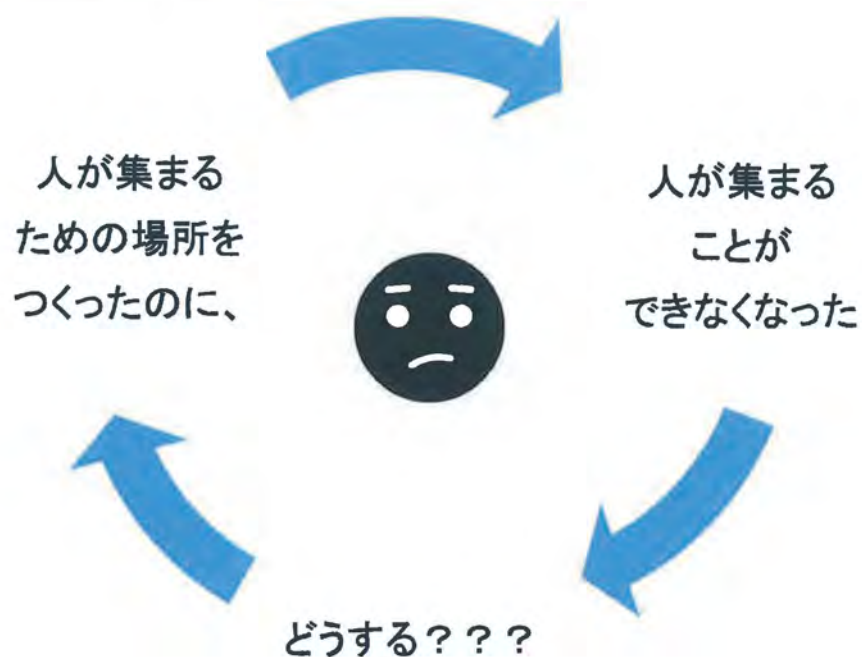
カフェのある街の日常風景

～カフェでは、たくさんの物語が生まれる～

- ・認知症のIさんご夫妻
- ・80代のSさんと1杯の赤ワイン
- ・Tさんのお土産は…
- ・Sさんにとってのリビングルーム



コロナ禍のハートフル・ポート



コロナ禍、人々は…

😞 感染への恐怖 → 人と会わない → 孤立化

😞 家族がみんな家にいる → 食事作りが大変 → 食事がワンパターン

公的機関は閉鎖 …
誰かと話がしたくても、なかなかその機会がない…
外食をするのも不安…
オンラインといっても、シニア層には使えない…

コロナ鬱…



考えたこと！

こういう時だからこそ、

こういった地域の居場所は、なくしてはいけない！

誰でもふらっと来て、

顔を見て、声を掛け合い、

ホッとできる場…

今こそ、必要！ でも、「3密」にならないように、どうやって？



コロナ禍、ハートフルポートのこの1年①

～今地域のニーズは何か？ ～カフェとして～

つながりを維持する！



- 2020年4月(緊急事態宣言下)は1か月間お休み
- 5月連休明け～ 「お惣菜」販売のみ開始
→売上は増えた！ ニーズがあることを実感！
- 6月中旬～ カフェの人数減らして、お惣菜販売と併用
→売り上げは変わらず
- 9月～ 新メニュースタート イベントも再開
免疫力を上げること 腸活メニュースタート
- 2021年1月～ お弁当販売+おひとり様に関り店内OK
→民生委員、ひとり暮らし支援のグループと連携
来られない方の処には配達・声掛け
→**テレワークの人のニーズが拡大**



コロナ禍、ハートフルポートのこの一1年②

今、地域のニーズは何か？～地域の居場所として～

つながりを維持する！

- ①オンライン
- ②ハイブリッドのイベント開催
- ③シニアのICT化の講座

- 子ども哲学カフェ「学校って何？」
- 哲学カフェ「つながりって何？」
- もやっとカフェ
- 妄想カフェ

- 勉強会
～消費者の選択が世の中をつくる～
- SDGsワークショップ
～今私たちにできることは？～



もやもや…

そもそも、「居場所」って何だろう？

- 😞 人が集まる場所を作りたくて始めたものの、それができなくなった。
- 😞 じっくり、ゆっくり、居場所の意味を考えるようになった。
- 😞 そもそも、コミュニティカフェの役割って何？
- 😞 地域のたまり場ってなぜ必要なの？
- 😞 場をつくりました！…ハイどうぞ来てください！では人は来ない！
- 😞 人は何を求めて、その場に行くのか？



コロナが教えてくれたこと

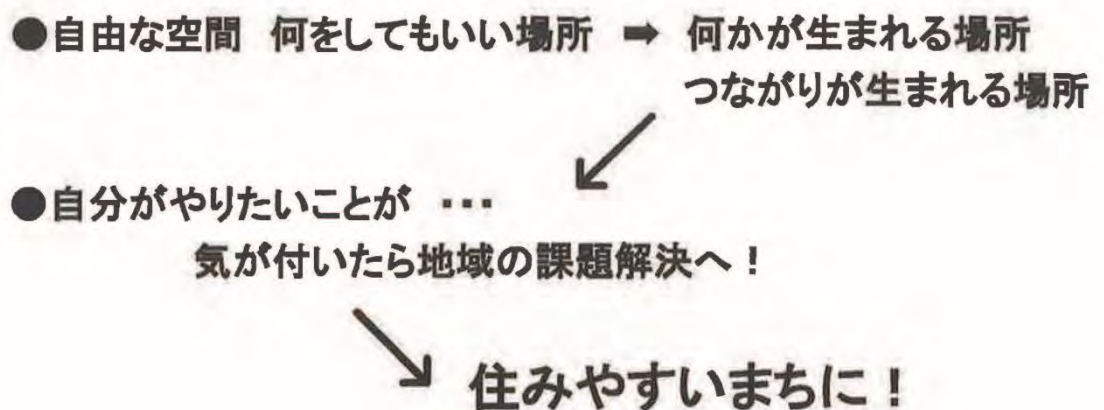
- 😊じっくり、ゆっくり考える時間は必要で、それを与えてくれた。
- 😊場を持つ者が試されている。
飲食店＝飲食を提供するだけの場ではない！
- 😊これまでのお客様との関係性から、その関係を維持しながら、
できることを考える。
- 😊社会の価値観が変わる時、何を変え、何を変えないか——
- 😊何もしないで、じっとしては何も変わらない。



ハートフル・ポートが目指すもの

カフェ…「インフォーマル・パブリック・ライフ」が叶えられる場

『カフェから時代は創られる』 飯田美樹著





事業化



売上



そこそこ儲け、
無理なく、楽しく、
生きがいも...

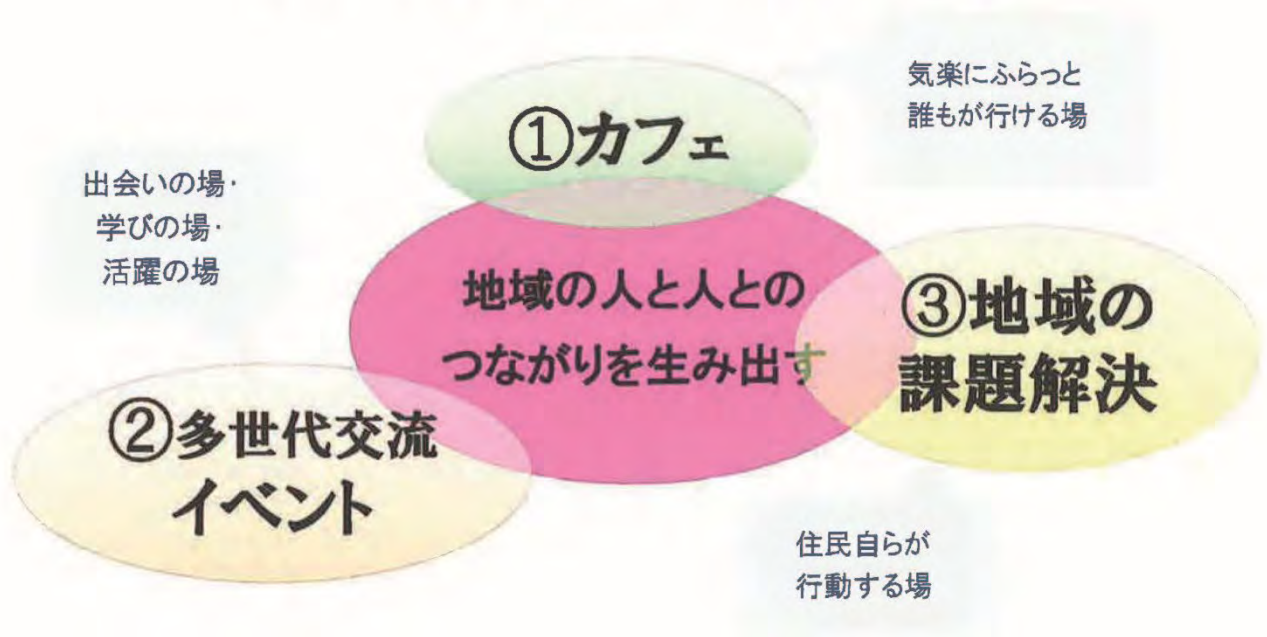
ボランティア



生きがい



ハートフル・ポートの3つの事業





① カフェ

場の**入口**！ …誰でも目的なく気軽に立ち寄れる場

営業時間：火木金 12時～17時（ランチタイム 12時～14時）

スタッフ：5名

メニュー：免疫力アップ腸活ランチセット、ケーキ、ドリンク他

こだわり：①居心地の良さ
②手をかけたメニュー
③人との関わり



② 多世代交流イベント

ほとんどが持ち込み企画！



音楽イベント

各種コンサート、ギター／ウクレレ倶楽部、うたカフェ、
音学倶楽部、親子向け音楽イベント



図書イベント

絵本カフェ、絵本倶楽部、哲学／バイブルカフェ



手作り関係

レンタルスペース手作りマルシェ、展示販売



他、勉強会、セミナー



ざっくばらんにしゃべらん会 etc…





③ 地域の課題解決の場

～孤立している人を 孤立させない～

みなと食堂(地域食堂) 毎月第3金曜 16時～19時 ※2017年～2019年

スタッフは、地域のボランティア

野菜は地域の畑で作っている野菜からの提供

毎回30～40名参加

子ども100円、大人300円



ひとり親サロンの開催

ひとりで子育てをしている方を対象に、
音楽を楽しみ、ランチ・交流の場を提供

主催:子育て支援団体
共催:ハートフル・ポート
ひとり親サポート

お米の配布(地域の人から)





みなとの茶店（認知症カフェ） 毎月第1水曜 14時～15時半

ケアプラザ、地域のボランティアで運営
お茶とケーキ 参加費300円

※認知症について理解を深め、認知症になっても、
安心して地域で住み続けられるよう、
地域で認知症の方を見守っていかうという活動。



地元の福祉事業者・他の団体との緩やかなつながり



作業所で作った商品の販売 売れる商品づくりを提案
販売だけではなく、交流にもつながる



ちょこっと応援団（高齢者の生活支援をする団体）との連携
民生委員との連携



福祉施設で作ったパンの販売するカフェとの協力体制
地元の地域活動グループ・コミュニティカフェとの協働





環境活動グループの発足「E.S.F」 Earth Saving Family

(2019年秋発足)



地球環境を市民目線で考え、行動する自主グループ

これまでの活動

- ・環境座談会の開催
- ・オンライン環境座談会
- ・環境お話し会・セミナー(会場／オンライン)



私たちができること…ライフスタイルを見直し、
ゴミを減らすにはどうすればいいか？

参加者のアイデアを持ち寄り、行動する。

E.S.F.の今後の活動

- ・家庭環境部門
- ・広報部門
- ・手作り部門



子ども達が生きる
未来の地球のため
に今できること

2019年11月30日(土)
14:00~16:00
ハートフル・ポート(地区市民会館5F)
島野真喜子(環境カウンセラー)他
本家の地球に関心のある方
500円(1ドリンク付)
※託児0歳~2歳(1人あたり1500円)

【お問い合わせ先】
電話 0471-771-0100 ext. 4444 heartful-port.jp
http://ca.heartful-port.jp/

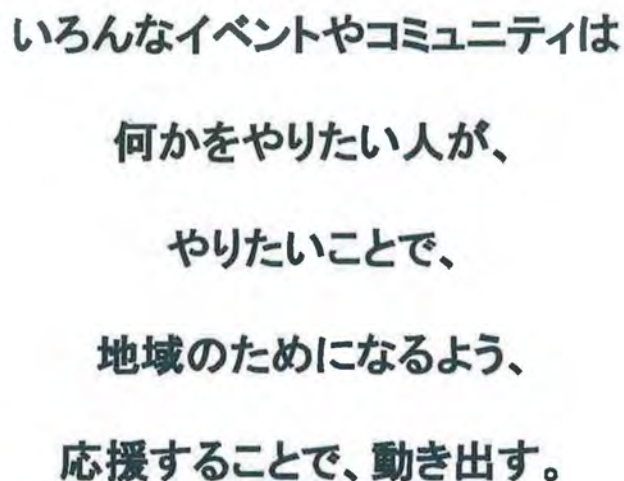


ハートフル・ポートのコミュニティ

- ・大人のための「ウクレレ倶楽部」
- ・大人のための「ギター倶楽部」(現在は別会場)
- ・大人のための「音学カフェ」(現在は別会場)
- ・歌唱健康法
- ・昭和歌謡カラオケ教室
- ・哲学カフェ
- ・バイブルカフェ
- ・もやっとカフェ
- ・ツナガル英会話
- ・E.S.F. (環境活動の自主グループ)

などなど・・・

[イベント -Events-](#) | [ハートフル・ポート](#) | [公式ウェブサイト \(heartful-port.jp\)](#)



子ども
もやっとカフェ

2021年 1月11日 (月・祝)

14:00~16:00

おやつタイムを含めま
るちゅうやう、遠慮もあり

近頃学校がつまらない。
友達ともめのために遠くへもなつた。
勉強にもきょうめがわがわがない。

そんなもやもや、ありませんか？

子どものための「もやっとカフェ」
ここは、何を言っても大丈夫なところ。
日ごろ悩んでいること。
何でもはき出しちゃいましょう！

話を聞いてくれる人：書林孫子
まいんこ 海原樹 じやんやんこらー

場所：倉たートビル・ポート
開催：5月9日(のびのびとおやつ付き)
対象：小学3年生~中学生
定員：8名

03-227-8150



コロナ禍の新企画②

妄想カフェ

あなたの夢を
聞かせてください

ハートフル・ボートの出張
妄想Cafe

こんなことでよかったらいいな！
こんなことで誰かに喜んでもらいたいな！
こんなことで誰かの役に立てたらいいな！

そんなことを思ったことはありませんか？

今、地域には、いろんな課題があります。
それは、「人と人とのつながりがなくなってきていることが
大きな原因ともいわれています。

あなたの夢が人々にもつなぐことであれば、
地域の課題も解決することにつながります。
（ひとりの夢）が（みんなの夢）になります。

みんな、あなたの夢を叶えませんか？

11.22
SUN.
13:00～15:00

場所：オトナ館grand
（京都市東山区京町）

優先案内人：五味典紀
ハートフル・ボート店主
コトコトプロジェクト

参加費：無料
大人参加費（飲み物）は550円
（ドリンク代込）

会場にはのみよ
カフェ・ハートフル・ボート
では、オトナ館まで

（予約）はのみよ
カフェ・ハートフル・ボート
では、オトナ館まで

主催：カワセハートフルボート、地区民衆党（京町）支部、オトナ館、京町地区民衆党支部
Tel: 045-777-6100



多様に関わる人を増やしていく。

何かやりたい、興味がある人たちの声を拾い、

それを一緒にやっていく場。

場づくりは、人づくり。

つながりは、「作る」のではなく、「**創られる**」

× make

○ create



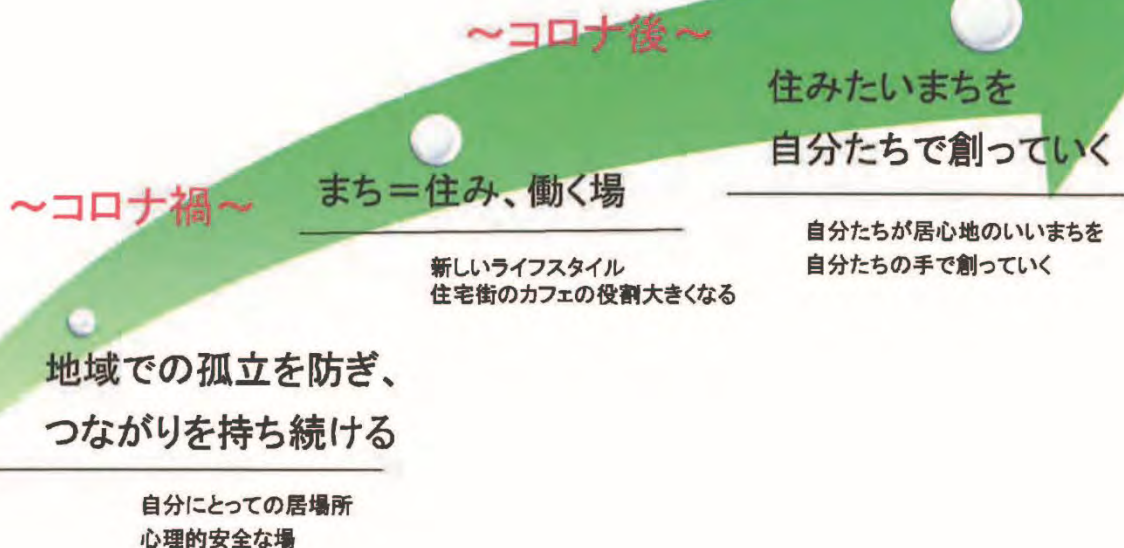
社会は、小さなコミュニティの集合体

どんなに小さなコミュニティであっても、
その小さなコミュニティは、ひとりひとりにとって、
生きがいを生む場となり、
その人にとって、大切な居場所となり、
社会をも変える場となる——

そんな場が地域に点在し、つながっていくことで、地域社会は形成される



コロナ禍、コロナ後の 小さなカフェの大きな役割



ありがとうございました。

ハートフル・ポート

最寄駅：相鉄線希望が丘駅

（駅から徒歩12分）



[ハートフル・ポート | 公式ウェブサイト \(heartful-port.jp\)](http://heartful-port.jp)

3 横浜の下町を盛り上げよう

小林璃代子（横浜橋通商店街学生スタッフ：横浜市立大学学生）

この度はお招きいただき本当にありがとうございます。
す。

横浜市立大学2年生で横浜橋通商店街、南区にある商店街の学生スタッフ代表をしております小林璃代子と申します。今回はその商店街での活動ですとか、今だからこそやりたいことなどお話しできたらなと思っています。



■まちづくりに関わってみたい

早速ですが、「皆さん横浜好きですか？好きだとしたらどんなところが好きですか？」と聞いてみたいんですけど・・・。

私が育ってくる中で横浜で「まちづくり」という言葉はすごく聞いて、でもそれってやっぱりまちが好きだったり、住み続けたいって思わないとやろうとしないと思うので、都市だからということ以外にも、今まちづくりが盛んな理由っていうのがあるんじゃないかなと思いました。ちなみに私は、「独自の魅力をもつ地域が隣接していること」とか、「やりたいことがあった時に、こういう場を作ってくださる」とか「応援してくださる方がたくさんいること」かなと思っています。

私は2000年生まれの20歳です。中学2年生の時に横浜国際フェスタに参加させてもらったことがきっかけで、海外とか地域っていうものに関心が行くようになりました。その繋がりでも西アフリカのセネガルにちょっとだけ行ったことがあるんです。そこで、コミュニティという言葉がなくても木の下でいろんな仕事をしてると人達が集まっているとか、一方で、中心部では急ピッチで開発が進んでいるところは何かを失ってしまうような寂しさも感じました。きっとそのセネガルでも、「文化を継承しながらの開発とは」とか、「開発が行ききった先の疎化どうしよう」みたいな話が、もしかしたら出るかもしれない。ですので私は、ひとまず日本でまちづくり関わってみたいって思いました。

■横浜橋通商店街に出会う

そんな頃、高校3年生の時に南区商店街ボランティアというものに出会いました。弘明寺商店街ですとか、横浜橋通商店街でのイベントの手伝いなどするようになって、後々横浜橋通フリーペーパーの制作を学生で始めました。今は市立大学で三浦半島のこと色々やっていたり、社会学まちづくりなどを専攻しています。

では本題に入りますが、「横浜橋通り行ったことあるよ」という方いらっしゃいますか？ありがとうございます。場所としては、ここからも頑張れば歩けるくらいで、一番近い所だと地下鉄の阪東橋駅、JRだったら関内駅なども徒歩圏内になっています。結構海外の方もたくさんいらっしゃったりする面白い商店街なんですけど、私が一番最初に色々お手伝いさせてもらっていたのは、大通り公園での春のイベントの運営、企画、宣伝とか司会をやらせてもらったり。また「大人の縁日」という真夏の夜を楽しもうというイベントがあって、高校の吹奏楽部を招待したりしました。

商店街が主催ではないのですが、酉の市ではとても盛り上がりますし、ラグビーワールドカップが開催した時にはお神輿も通ったりしました。

でもやっぱり私の感じる一番の魅力は、日常的な方に感じていて、それこそこんな風に立って話してる人たちがいっぱいいたりとか、お昼時になると良い香りがしたりとか、あと路地の魅力とか、があるかなって思います。

関わっていると、すごく今まで追いかけてた「まちづくり」っていうワードにモヤモヤが付いて来て、なんか「そのまちってやっぱそこに暮らしてる人がつくるものだろうな」とか、だとしたら「第三者の私たちって何ができるんだろう」とか、「こういう立ち話的なコミュニティのような自然発生的なものをもっと活発にできたらいいな」っていう風に思いました。

今何か考えても結局答えは出ないけど、やっぱり集まる場所が面白いっていうので商店街には関わり続けたいし、第三者としてできることは、「これが魅力じゃない!？」っていう点を推していくこととか、企画に参加するきっかけを作ることかな、ということで、横浜橋通商店街の魅力を発掘し楽しみ方を提案するローカル情報誌「いきな下町商店街」を学生スタッフで作りました。この時はまだ学生2名ではじめたんですけど、最初は「明日のイベントの告知」とか「どんな商店街なのか」ということを発信していました。だんだん「安い衣料のお店でコーディネートしてもらおう」とか、学生っぽい企画をやったりして、最新のものではインタビュー記事に加えて昔の写真を地域の方に見てもらいながら、思い出話を聞いてみるみたいなもの作ってみました。こういうものも Facebook ページで画像を全部出しているのを見て頂けたらなと思います。

■居心地の良さってなんだろう

制作とか取材を通じてすごい町の方に出会うことができ、最初から思ってたけど本当に色々な人がいる。趣味も年代も本当にそれぞれでそういったところがすごく面白いし、いろんな人がいるのに自分は自分でいられるところが居心地がよい。それって何でなんだろうって思った時に、色々な背景を持つ方が同じ場所に集まって働いたり、生活したりしているからなのかなとか、それぞれ何屋さんっていう役割とか、私だったら情報発信係みたいな感じになってますけど、そういう役割をそれぞれが持っているって言うこと。あとはお店の人に限らずお客さんとかも程よい距離で挨拶ができるとか、顔見知りの人たちがたくさんいるって居心地のよさがあるなというふうに思いました。

それは横浜橋通りの中だけの話には限らないな、と気づいて、例えば吉田新田エリアのこの辺だけでも本当に個性のあるまちがいっぱいあるし、市内で見ても農業がさかんなところもあれば、こういう市街地とかも色々あって。今、遠くに行くっていうことが制限される中で、もっと身近な横浜市内での非日常とか楽しみ方みたいなものを学生の視点で色々提案していきたいなって思っています。

本当は今日に間に合わせたかったんですけど、フリーペーパーの第4弾を今学生5名で作ってるんです。「対面」っていうテーマを設けさせてもらって、移動とか会話とか滞在みたいなものがマイナスに捉えられていて、これからどんどん変わっていくと思うんですけど、全く今までと同じっていうのも嫌だし、全く変わってしまっただけのも嫌だし。商店街の魅力とか対面の魅力みたいなところの残して欲しいところ

を、自分達なりに表現していきたいなっていうのでやっています。

こちらは商店街周辺、今回は市営地下鉄の横浜駅から阪東橋駅と上大岡駅で配布予定なので、SNS 各種に詳細を出させてもらいますので、手にしていただけたらと思います。

ご清聴ありがとうございました。横浜橋通商店街でもお会いできたらと思います。

商店街を中心とした魅力発信

～ 多様性あるこのまちを楽しむ ～

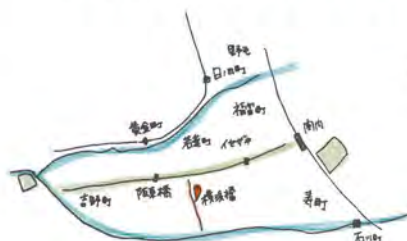


横浜市立大学 国際教養学部2年 /横浜橋通商店街 学生スタッフ代表 小林璃代子

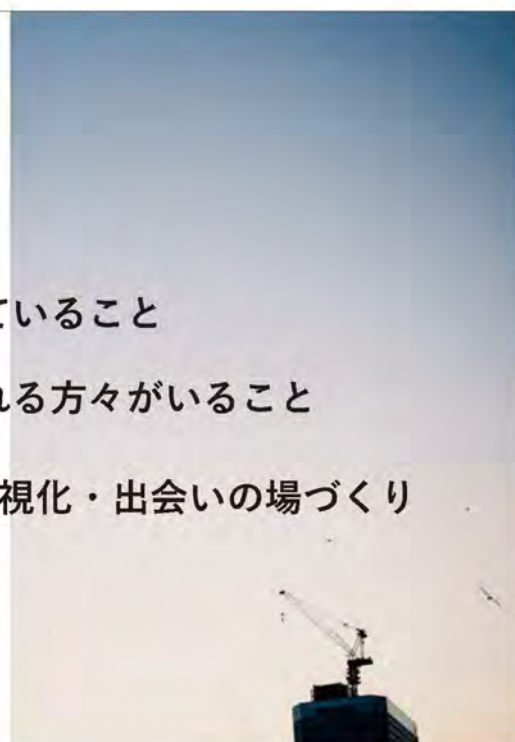
横浜を、好きな理由

独自の魅力をもつ地域が隣接・共存していること

やりたいことがあるとき、応援してくれる方々がいること



→ 魅力の可視化・出会いの場づくり



大学入学

あこがれの横浜市立大学へ
三浦半島研究会・社会学を専攻

コミュニティビルドを学ぶ
写真甲子園準優勝

無料情報誌「いきな下町商店街」発行
横浜橋通商店街でイベントお手伝い

高校3年生

商店街に出会う

南区商店街ボランティア加入

高校2年生

セネガルで2週間ほど暮らしを体験

南三陸歌津

港南台キャンドルナイト

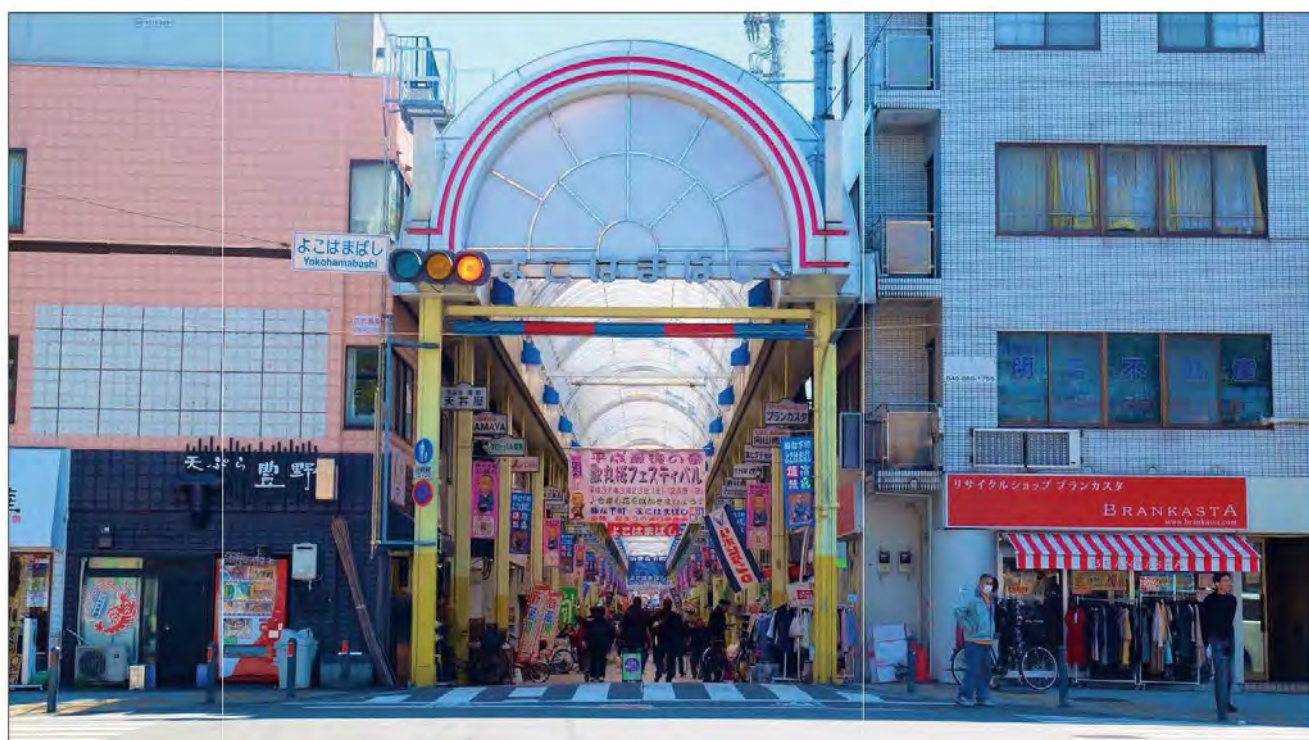
中学2年生

海外や「まち」に出会う

よこはま国際フェスタ

平成12年

夏生まれ





ハレとケ



ハレと **ケ**



愛着ってどうしたら生まれるのだろう

文化を継承した、開発のかたちって何だろう

まちづくり へのモヤモヤ

まちって、そこに暮らす人たちがつくるもの…
だとしたらよそ者には何ができるのだろう

もっと自然発生的なコミュニティを活発にさせたいなあ

答えはどんどん遠のく一方だけれど

人が集まったり、出会う場って面白い

いまの自分にできることは 企画と記録と発信！！

横浜橋通商店街の魅力を発掘し、楽しみ方を提案するローカル情報紙

いきな下町商店街 

いきな下町商店街 2018 創刊号
IKINASHITAMACHI Shopping Street



「いきな下町商店街」

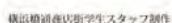
横濱橋通商店街学生生活センター
横濱橋通商店街の月刊フリーペーパー
これまでイベントやフェアとて商店街の方々に交えてきた。横濱橋通商店街のあたたかみ、活気を伝えてきた。横濱橋通商店街の魅力を、商店街の方の声をとをよりよくの方に届け、商店街をよりよくするにしたい。月刊フリーペーパーを所望するにしたい。横濱橋通商店街がこれからは長く存続する商店街であってほしい。もう一つの人々商店街に歩きたい。そのようないて若者活動の若者商店街を歩きたい。歩きたい。

■これまでのイベント情報

西園は従来のブレイン・グループに、今年3月に「戦乱・戦後・ユース・ティバル」に改編しました。学生スタッフのかけとめ、街づくりに関係を持ち、活動を進めることが主眼である。インセン・になりまし。出身地である、模範国立大学の仲間にも、進出街の活動を盛り上げよう。戦後復興の街にガジリの演奏をして、放火被害会の代表がお祭りの実行と作成、学生経済フェのユズリ販売が、お荷を出しに活躍してくれました。



TAKE FREE

Vol.2
2019/3



つくと、いろいろなひとに出会う
横浜橋にはいろいろな人がいる
自分は自分でいられる感覚

居心地がよかった。なぜだろう？

仮説① いろいろな背景をもつ人が同じ場所で暮らしているから、自分も自分らしくいられる

仮説② 役割をもっていられる

仮説③ ほどよい距離感の、顔見知りさん

横浜橋の中だけの話とは限らない？



【今だからこそやりたいこと】

身近な地域を新鮮に楽しむ
視点の提案をしていきたい！！



コロナ禍を経験して早一年
制限される「移動と会話」に向き合い
私たちはどう共存していくのか

今回のテーマは「対面」
いままでと全く違う未来も
同じ未来もなんだかつまらない

日常が変わる今だからこそ再認識したい
横浜橋通商店街の魅力を探ります！

「いきな下町商店街」 第4弾
2021年3月上旬発行予定！

商店街事務所前や市営地下鉄一部駅などで配布いたします！
詳しくはFacebookページ「いきな下町横浜橋通商店街」

4 地域にオープンな大学とは

木村心香 (YUC 〈Yokohama Univer-City〉：横浜国立大学学生)



初めまして木村心香と申します。本日は貴重な機会をいただき本当にありがとうございます。今横浜国立大学の四年で、卒業になるんですが、今までやってきたことを紹介していきたいと思います。

最初に自己紹介ですが、大学の都市科学部というところで都市にまつわる勉強をしつつ、自分の軸は社会学寄りのところに置いています。データ分析の領域にもともと関心があって、インターンとか就職先もそういうところに関わるんですが、ただそれをやるうちに、それだけじゃないなということをしてすごく思ってきて、今は「対話」の領域に関心を持って研究に取り組んでいます。

「対話」という私の関心から、地域にどうやったら「対話」を生み出せるか。そういう自分の興味を基に、YUC という団体を運営してきました。私は代表ではないのですが、代表の代理で来ています。

■大学をまちに開く、大学が交流を生み出す

「Yokohama Univer-City」という今日ご紹介する団体なんですが、ご存知の方はいらっしゃると思います。出来たのは、去年の秋頃 2019 年の秋頃です。まさに地域に向けた活動を進めていこうという時にコロナが来てしまったので、全く活動ができていないんですが、その中でやってきたことを今日ご紹介したいと思います。

「大学を自分たちで楽しむために」ということをコンセプトにされていて、大学の中に、後にご紹介するすごく素敵な場所があるので、そこをぜひぜひ地域の方に使っていただきたい、そういう活動をしています。

大学の中で、地域実践に関わるような授業があるんですが、活動はそれに認定されているので一応単位のでる活動として認められています。

今、いい場所って言いました。これですね、「104ura (都市裏)」と言われる場所なんですけれども、私の所属している都市科学部の講義棟の真裏にあるエリアで、スタジオみたいな場所があったり、その後ろに草地みたいなところがあって、人間と自然が共生できるような素敵な空間があります。

ただ、スタジオも新しく作られたばかりで、2 年前くらいぜんぜん学生も使っていないくて、草地の方にも全然人がいない状態です。資源が使われていないもったいない状態になっています。

もちろん学生に使ってもらうのは当然なんですけれども、せっかくなので地域の人に使ってほしいなと思っています。

団体の活動意義ですが、都市科学部っていうところでいろいろ勉強をしてきて、都市にまつわる様々な色々な問題やこんなことがあるとか勉強しています。それを、ある特定の軸から解決するとか、例えば医療の面から解決するとか、そういう軸を私たちはまだ持っていないくて、都市科学部っていう結構広く勉強してきたので、私達はまだ持っていないんです。

ただ、その大学に、先ほどお見せしたとにかく素敵な場所がある、「この素敵な場所をどうにか使えないか」そういう動機で活動しています。

「大学をまちに開く」っていうところで、この地域の多様な人々が出会う場をつくる、それによってこの顔の见えない関係性っていう、今の社会にあるようなモヤモヤとしたところを解決したいなと思っています。

先ほど饗庭先生のお話で「地域に多様な人たちが集まっている」っていう事があったと思うんですが、「多様な人たちがどうしても出会わない」というのは、データであるわけではないんですがそれは常日頃から感じていて、隣の人の顔も名前もあんまり知らないような状態が結構多いと思うんです。そういうことをどうにか解決して、他の人とお互いに理解し合えるような優しい社会に繋がりたいと思っています。

「大学をまちに開く」ところを詳しくお伝えすると、この大学という場所は若者がすごく集まっている場所で、超高齢社会においてすごく貴重な場所なんです。まちに活かせる実証実験などができる場所としても貴重です。「交流を生み出すっていうのはどういうことか」というと、数少ない若者がすごく集まっているので、若者と地域のいろんな方、子どもを持っている世代の方とか高齢者の方とかが合わさることで一緒に楽しめる文化的な交流だけでなく、せっかく大学という研究機関なので、ゼミの発表とかを地域の人に開いたり知的な交流もできるのかなと考えています。

もう一つ、自分達が楽しくないと活動は継続できないので、楽しんでやるようにと心に留めています。去年のまだコロナが大変になる前の活動はこんな感じです。左の方は、無料のフリーコーヒーを都市裏という場所で配っている様子です。あと真ん中は、移動式の本屋さんを大学招致しています。下の真ん中は、ものの交換のイベントをやって、とにかく人を都市裏に滞留させるということを試みたりしました。一番右側は、音楽イベントを開催した時です。

■コロナでできなくなった活動をどうするか

ただ、コロナ禍でこういうことが一切出来なくなってしまって大学も全部閉じてしまったんです。なのでオンラインでやるしかない。そんな中でどういう風にやればいいのかなんて考えた時に、私達は活動を始めてすぐにコロナ禍になってしまったので、今ある五つのチームを立ち上げて、まず繋がりを作るところからそれぞれ活動をしてきました。今日は時間がないのでよかったですら資料を読んでみてください。

左上のチームは、「理想の大学ってどんな場所だろう？」「都市裏でどんな未来図が描けるんだろう？」と考えたり、その下のチームでは、せっかくオンラインという良さをうまく使っていこうということで、ラジオで私たちの活動を発信してきました。真ん中のチームは、「オンラインでどうつながりを作るか。」っていうことで、ウェブサイト上に写真を投稿してもらおうという企画をして、そこで顔が見えないんですけども、非対面の繋がりを醸成しようと試みたりしました。

右下のチームは、コロナ禍で大学は閉まっているけどでも、その中でどうにか自治会の方々とかが繋がりを持つ機会を作っていたメンバーです。一番右上のチーム、私はここで結構活動していたんですが、ハートフルポートさんが取り組まれていたような哲学カフェをかなり開催してきました。私の関心も「対話」とかにあるので、オンラインなんですけれども色々と試してきたところです。Twitter、インスタグラムもこんなふうに色々と発信しているので、良かったら追いかけていって欲しいです。イ

Instagramはあまり動いていませんが、Twitterの方は動いています。

ウェブサイトはまだまだこれからなんですけれども、さっきご紹介したオンライン上に写真をアップロードしてもらって、つながりを生み出そうという企画もこれから展開していく予定なのでぜひご参加頂ければと思います。

ちょっと載せ損ねましたが、「このような事情でオンライン上に繋がりを作りました」ということは、これから冊子してまとめる予定なのでまたどこかでご紹介できたらと思っています。

一旦ここでお話はおしまいです。大学内の団体として活動して、大学内に色々いい所はあり大学は開きたいけれども活動はしづらい。そんなモヤモヤを抱えているので、卒業したメンバーでまた新たに頑張っていこうと思っています。私自身が入社まであと半年あるので、その中でいろいろ活動していきたいなと思っていて、是非皆様からご助言等あれば改善していきたいと思うのでご意見いただければ幸いです。ありがとうございました。



『地域にオープンな大学とは』 Yokohama Univer-Cityの活動紹介

2021年2月23日(水)

Yokohama Univer-City(YUC)

横浜国立大学都市科学部4年 木村心香

© Yokohama Univer-City 1

自己紹介



木村心香(Mika Kimura) 横浜国立大都市科学部都市社会共生学科4年

大学や長期インターンで量的研究・データ分析を学んでいたが、数字で社会を捉えることに違和感を感じ、現在は哲学的な視点から卒論研究に取り組んでいる。

社会の分断と、それを解消するための人々が「出会う場」の創出に関心があり、YUC(Yokohama Univer-City)の活動を運営中(代表代理)。

© Yokohama Univer-City 2

団体概要



- 正式名称 “Yokohama Univer-City”
- 「大学をまちに」「自分たちが楽しむために」をテーマとして活動
- 2019年秋頃から活動開始
- 学部生23名、院生2名、**計25名で活動中**(2020年10月5日現在)
- 2020年度より、横浜国立大学地域実践教育研究センター/地域連携推進機構が主宰する学部生向け副専攻プログラム「地域交流科目」における「**地域課題実習**」に認定(単位がもらえる活動)
- 大学内の都市科学部講義棟裏一帯、通称「**104裏(トシウラ)**」を拠点に活動(現在は大学からの要請により、オンライン上のみで活動)



©Yokohama Univer-City 3

YUC活動拠点の104裏(トシウラ)



- 横国にはいくつもの通り道が存在
- そのうちの一つに104裏がある
- 104号室の裏にある道だからトシウラと命名

- 意外とこの空間、使われている(目的は様々)
- 使っている人の属性も様々

➡ **この空間、うまく使えないのかな？が始まり。**

©Yokohama Univer-City 4

YUC(Yokohama Univer-City)の活動意義



都市を見つめ直して感じた様々な課題：**顔の见えない関係性の蔓延、社会の分断**etc...

©Yokohama Univer-City 5

YUC(Yokohama Univer-City)の活動意義



都市を見つめ直して感じた様々な課題：**顔の见えない関係性の蔓延、社会の分断**etc...

「大学」という地域の資源を活用することで、この問題に立ち向かえないか？
(特に104裏)

©Yokohama Univer-City 6

YUC(Yokohama Univer-City)の活動意義



都市を見つめ直して感じた様々な課題：**顔の见えない関係性の蔓延、社会の分断**etc..

「**大学**」という**地域の資源**を活用することで、この問題に立ち向かえないか？
(特に104裏)

大学をまちに開くことで、地域の多様な人々が会合う場を作りたい！
自分とは異なる人々と会合、理解し合える社会への第一歩

©Yokohama Univer-City 7

YUC(Yokohama Univer-City)の理念



「大学をまちに」
「自分たちが楽しむために」

©Yokohama Univer-City 8

YUC(Yokohama Univer-City)の理念



「大学をまちに」

「自分たちが楽しむために」

©Yokohama Univer-City 9

YUC(Yokohama Univer-City)の理念



魅力あふれる「大学」という場所を地域に開放し、様々な「交流」を生み出す

- 若者のパッションであふれる場所

→エネルギーをもって活動を起こせる若者が常に集まる

- まちに活かせる実証実験ができる場所

→常識にとらわれない活動が可能

- 多様な人々が楽しめる文化的な交流

→世代、属性を問わず楽しめるイベントの開催

- 大学という特性を生かした知的な交流

→分野を超えて議論し合えるワークショップの開催

©Yokohama Univer-City 10

YUC(Yokohama Univer-City)の理念



「大学をまちに」

「自分たちが楽しむために」

©Yokohama Univer-City 11

YUC(Yokohama Univer-City)の理念



自分たちが楽しんだことが、
周りに伝播し、周りを楽しませ、そして周りを盛り上げる

©Yokohama Univer-City 12

昨年度の活動



©Yokohama Univer-City 13

現在の活動



104model

コミュニティについて
学び、考え、
大学のあり方を提案する

104裏(トシウラ)空間の
デザイン、コンペ実施

104link

他団体と協力しつつ、
地域と大学をつなぐ
プラットフォームを作る

地域町内会への
ヒアリング

104uRADIO

YouTubeを利用し、
情報やエンターテインメント
を提供する

毎週放送のラジオで
YUCの活動を発信

104code

前期に企画した
つながりを示す作品を
作成・展示する

オンラインマンションの
運営、冊子制作

104cafe

オンライン上での
つながり方を試行し、
企画運営する

哲学カフェ等の
オンライン企画実施

©Yokohama Univer-City 14

Website



<https://104scape.wixsite.com/yokohama-univer-city>

5 オンラインセミナー「コロナで見えた新しい気づきとつながり方」

韓昌熹(東京工業大学大学院)



よろしくお願いします。簡単に自己紹介をしますと、私は韓国の大学で建築の意匠と計画のことを専門で勉強をして、その後にエコ建築設計をコンサルティングする会社に就職していました。その間いろいろとセミナーなどに参加するところで日本のまちづくりについて話を聞いて、これを真剣に勉強してみたいなと思って日本に留学をして、今まで勉強しております。

大学が緑区の端っこ、緑区と町田市と大和市の接する辺りにあります。キャンパスが緑区にあっても、なかなか緑区の人達と繋がりが持てなくて、研究を専門にしている大学院、博士課程ばかりあるキャンパスなのでなかなか使われない。多分、横浜国大の木村さんと同じ問題意識だと思うんですけど、すごく良い環境にあるんですが使われていないということで、緑区でいろいろ「地域づくり大学」などで紹介して使えるように、という活動をしてきました。研究としては、まち普請の事例について修士論文を書きましたし、博士論文もまち普請で作られたコミュニティ空間を計画する方法について研究して、3月に卒業する予定です。

現在は、「ザ・まち普請」の本、今日も会場の入り口のところにあるんですけど、韓国語で出版しようとしていて、1年くらい準備をしていました。韓国に行ったり来たりということがなかなか難しくなって遅れたんですけど、多分5月くらいには出版できると思っています。

■コロナの「どうしよう」から生まれたオンラインセミナー

コロナについては昨年2月頃から、韓国では2月から体制を取っていたし、12月頃から「どうなるどうなる」と言ってきたんですけど、ついに4月から日本でも緊急事態宣言ということになって、今までやってきた活動が全くできなくなりました。その時は大学も、いきなりメールが来て「出てください」ということで、その日は夜7時か8時くらいに研究室に行ったんですけども、「明日から学校に行けません」と言われて、「どうしよう」と。パソコンを持って家に帰ったんですけど、留学生なので研究室がないと何もない人間になってしまうんですね。私は他の活動もやっていたので、少し頼るところはあったんですけども、それも出来なくなって「どうしよう、どうしよう」と迷いながら、前から使っていたZoomを使って、皆さんとやり取りをすれば、関与すればどうかな、ということで前もこういうことをやってきました。まち普請の本の出版関係で話しながら、それでオンラインセミナーをすればどうかな、ということで企画したものが今日発表するものです。4回の企画になって、申し込んだ人は391人、オンラインなので出入りが自由なので集計が粗いのですが、このくらい的人数になりました。

まず1回目は、僕が研究しているところがコミュニティ空間ということで、コミュニティカフェがどうなっているか気になったんですね。コロナ時代でカフェがどうい

うふうに活動できるかを調べるために、五味さんのお話とすごく繋がるんですけど、最初の4月頃どうなっているか、「さくら茶屋」と「こまちぷらす」というところでお話を聞きました。森さんの場合は全体的に若いお母さんが中心になった活動をやっている、岡本さんの場合、「さくら茶屋」では高齢者がボランティアで活動している、利用者も高齢者ということで、緊急事態宣言とともに休業ということになりました。森さんの場合は、本当にいろんなことをもともとやってきたところですが、お弁当を売るとか、オンラインで小さいコンサートをやったりとか、そういう活動を新しく展開するようになった。「さくら茶屋」の方は一時休業になったんですけど、その後は「行けないの？」とか「いつ回復するの？」と言うことをずっと聞いて、「やっぱり私達の活動って大切だな」っていうことを活動している人達がすごく感じたということで、まずは電話で、かかってきた人に「どういう状況ですか」と聞きながら活動を始めて、6月からお弁当などを売っているし、定期的に活動しているようです。

2回目はICT時代とコミュニティ活動ということで、今日もオンラインで通信しているんですけど、こういう時代になった、ということで、地域活動に何か良い使い方っていうのはないかな、と皆さんを交えて話を聞きました。ミエルから鈴木さんと横プラの松本さんと、私が韓国の事例を紹介することになりました。ミエルではリアルとオンラインで活動をしていることが特徴になっていて、韓国の場合はマンションの町内会で、98年に入居した場所なんですけど、オンラインの活動も大切だということをお話しました。松本さんからはオフラインで活動するときにQRコードで訪問記録を取るということで活動が継続できるという話がありました。

3回目は、三密を避けてオープンスペースでどんな活動できるかということを横浜の庄司さん、市立大学の三輪先生から話を聞きました。庄司さんが活動していることはオープンスペースでいろいろ面白いことをやるっていう話を聞きました。三輪先生から聞いた話では、饗庭先生が提案のなかで生活道路パークっていうものと通じる話なんですけど、それと近いところで子どもと遊べるっていうことを提案していました。

4番目は3回の活動をまとめて2020年にどういう活動をしてきたか、おもしろいやりカンパニーの津ノ井さんと太陽ローズハウスの増田さんにお話を聞きました。基本的に皆さんすごく感染対策を守ってちゃんと活動をしている。増田さんの場合、太陽ローズハウスでは厳しい条件に上げて、気をつけて活動しているんですけど、おもしろいやりカンパニーの方はこういうふうに対策した上で活動をする。さらにお弁当を配達したりする活動も新しく出来たということで、むしろ「コロナ禍だから新しい活動が出来ました」という気づきがあったというお話でした。

■この1年間、むしろ活動は生き生きした

まとめると、1年間こういう活動を、皆さんも経験したと思うんですけど、オンラインとリアルのコラボというのが意外と進んだのではないかと感じたと思うんです。横浜プランナーズネットワークの定例会も両方でやっているんですけど、それについても皆さん気づく機会になったのではないかと。コロナという問題を抱えているということもあるから、これを解決するっていうことで、むしろ活動が生き生きしたのではないかと思います。感染対策をきちんとするということを前提で、オープンスペースで面白い活動も出来るのではないかとこの可能性も出てきています。コロナの影響で地域活動をするということはすごく大変な状況になってきていると思うんですけ

ど、それにもかかわらず地域にある課題はまだ残っているということで、皆さん頑張ってくださいということで、お話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

オンラインセミナー「コロナ時代のまちづくり4回」の報告

コロナで見えた新しい気づきとつながり方

東京工業大学 博士課程 韓昌熹

自己紹介



韓昌熹（ハン チャンヒ）、韓国(86年ソウル生まれ)
東京工業大学 博士課程

大学で建築学科卒業後、都市・住居環境コンサルティング会社に就職、働きながら、韓国の地域まちづくり大学（2011）で勉強。日本のまちづくりの研究がしたくて2012年日本に留学。緑区を中心に地域活動。博士課程では、まち普請の事例を対象として、「地域課題に対応した市民主導によるコミュニティ空間計画に関する研究」という題名で博論を書いた。現在、ザ・まち普請（本）の韓国語版の出版準備中。

オンラインセミナーの企画

- ・2020年2月からニュースで、海外のコロナ状況を注視した。
- ・「**緊急事態宣言**」発令「4月7日～5月6日」外出自粛要請
- ・今までの地域活動ができなくなり、ZOOMを使って安否確認やおしゃべりカフェを開催した。



オンラインセミナーの企画

- ・自分の活動もこのように、変化があり、現場での皆さんがどのように活動・状態かをお互いシェアし、これからの活動について、考える場を作りたいかった。
- ・ザ・まち普請の韓国語版の出版関係で、横プラのみなさんと議論の中で、オンラインセミナーの企画をすることになった。

第1回「これからの居場所withコロナ」5/23 参加者（申込者：224名）
 第2回「地域×ICT時代のコミュニティのカたち」7/17（申込者：102名）
 第3回「これからのオープンスペース活用」10/09（申込者：41名）
 第4回「これからの交流のカたち」12/19（申込者：24名）

総申込者：391名



地域の居場所・コミュニティカフェはどんな状況？

第1回「これからの居場所withコロナ」5/23

地域の活動は、人が集まり、つながる中で始まります。感染対策のため、人と人との接触を自粛せざるを得ない状況の中、その活動も大きな制限を受けています。

新型コロナの厳しい状況の中、地域の居場所を運営する「こまちプラス」と、「さくら茶屋にししば」の現在の取り組みを聞き、Withコロナ時代の地域の居場所づくりについて考えました。

登壇者：

岡本湊子さん（さくら茶屋にししば）

森祐美子さん（こまちプラス）



地域の居場所・コミュニティカフェはどんな状況？

見えたこと：できることから、地域の安全とつながりを継続するために、頑張っていた。

さくら茶屋：安否確認電話、6月から営業再開、お弁当をテイクアウト販売

こまちカフェ：Facebook、Instagramなどで写真や動画発信、オンラインイベント、お弁当販売



こまちカフェ



さくら茶屋にししば



ICTが地域のコミュニティにどんな影響を与えるか？

第2回「地域×ICT時代のコミュニティのかたち」7/17
 コロナ禍でオンラインとリアルを組み合わせた活動
 をしていた大倉山ミエルの事例、および日本と韓国の
 オンライン・ICTの事例を紹介し、地域活動におけるオ
 ンライン・ICTの活用、その先にある新しいコミュニ
 ティのかたちについて、一緒に考えました。

登壇者：

鈴木智香子（大倉山ミエル）

松本道雄（横ブラ）

韓昌熹（東京工業大学）



ICTは地域のコミュニティにどんな影響を与えるか？

可能性：リアルとオンラインのコラボレーション
オンライン町内会
活動参加者の連絡先登録（QRコード）

withコロナとどう向き合うか
 リアルとオンラインの二本立て



「こんな場だからこそ」と動き出す
 地縁型+テーマ型+ネットワーク型コミュニティ

ミエルのリアルとオンライン



韓国のオンライン町内会

withコロナでの開催
 （高島中央公園愛護会）
 ～連絡先の登録にQRコードを活用～

- 6月から花植え、清掃活動再開
 ① 参加者リストを印刷
 ② 配布先を決定
 ③ 配布先を決定
- ホームページにGoogleフォームを埋め込み
 → ホームページを定額で更新
- QRコードでスマホ入力
 （QRコードを読み取り専用）
 → どうしてもメールの返信が来ない
 → 参加者リスト、リピーターの把握
- 紙での入力も完全にはなくならない
 → 紙とQRコードの両方で入力



高島中央公園愛護会のQRコード

3密を避けてオープンスペースでどんな活動ができるか？

第3回「これからのオープンスペース活用」10/09

感染対策として三密を避ける指針の中で、オープンスペース（外部空間）活用について考えてみました。道路、公園、公開空地のような日常的な屋外空間で、どんな活動ができるか、事例から学びました。

庄司敏雄氏(まちラボYOKOHAMA)
三輪律江(横浜国立大学准教授)



3密を避けてオープンスペースでどんな活動ができるか？

可能性：公園、オープンスペースをもっと面白く使う。

子どものための空間づくり、子どもの育ちに配慮した住まいづくり、住宅地づくりをする。



2020年、我々の活動はどう変わったのか？

第4回「これからの交流のカタチ」12/19

コロナ禍第3派が予測される中で、まち普請事業で整備されて程ない「おもいやり隊」と「太陽公園ローズハウス」の方々から、今までの取組と、4月以降のコロナ禍での活動状況をお聞きし、これからの交流の場をどうつくるか、どのような形で行うかなどを考えてみました。

津ノ井美晴ついのい(おもいやりコンパニ)
増田健一ますだ(太陽ローズハウス)

3密を避けてオープンスペースでどんな活動ができるか？

- ・ 徹底な感染拡大対策を！（店内への入室禁止や人数制限、マスク、パーティション、三密を避ける、消毒する。）
- ・ 新たな発動領域へ踏み出した。（お弁当のテイクアウト、配達）



ご利用の際は、次のことをお願いします
 ・ハウス内は6人まで(お留守番を入れて)
 ・入るときに手を消毒する
 ・マスクを着用する
 ・ハウス内では飲食できません
 ・三密をさける
 ・トイレ使用後は、室内を消毒する



まとめ

- 1年間、オンラインとリアルのコラボレーションが進んだ。
（横プラの定例会もオンライン、リアル両方で、事情があっても参加できるようになった。）
- 問題から工夫をはじめ、活動領域の拡大と活動内容が豊かになった。
- 感染対策とともに、オープンスペースでもっと面白い活動を考えている。
- コロナでの活動には障害があるが、地域の課題はまだある。

ご清聴ありがとうございました。

4 トークセッション

コロナでも『どっこい、つなげるまちづくり』

モデレーター 山本耕平／櫻井淳

ファシリテーショングラフィック 奥村玄

モデレーター(山本):

山本と櫻井淳さんで進行を務めます。櫻井さんには適宜ツッコミやコメントをしていただくという形で進めていきますので、よろしくお願いします。

時間が10分ほど伸びるということですが、盛り上がり様によってはこの部屋を出て行けという時間までやらせていただくかもしれませんかもしれません。オンラインの方はひっそりと退出していただければいいかなと思います。

恒例になったこのトークセッションは、何かまとめようというつもりは全くなくて、もっとしゃべりたい、語りたいというフラストレーションを溜めていただいて、その後の交流会で吐き出していただくということでやっておりましたが、今日はそれができないのが残念です。

前方には、このとく&トークの名物であります奥村玄さんに、ファシリテーショングラフィックで議論の整理をやって頂きます。奥村さんの名人芸を見て帰るだけでも、横プラはすごいなという風に思っただけなのではないかなと思いますので、奥村さんよろしくお願いします。

まず最初に、櫻井さんにこのトークセッションではどんなことを議論しようかという、キーワードみたいなものを出していただければと思いますが。



モデレーター(櫻井):

櫻井と申します。今日の皆さんのお話に共通するキーワードは「モヤモヤ」ですね。コロナでみんなモヤモヤしてる中で、どうやって解決するかということが今日のテーマっぽいなと思いました。ただ「モヤモヤ」ですって言うだけでは本当にモヤモヤになってしまうのですが、モ

ヤモヤの中身、なぜモヤモヤしているのかがこの後半の議論で明らかになるんじゃないかと期待したいと思います。

ところで饗庭先生のおっしゃってた定常都市という一つの提案なんですが、以前に横浜市からコンパクトシティについて委託を受けたことがあったのですが、その時にそんなにコンパクトにするなよ、という思いが強くあって、先生の今日の「スポンジ化」の意見は大賛成なんですけど、私はスポンジ化というより一つずつ固まっている、あとで出てきた群島化ということに近づいている。例



えば、栄区の野七里というところ、過疎化して空き家が増えて、空き地化が進んで、もう赤信号に近いところが横浜の他の地区にも多く出てきているわけです。

その解決策は何だろうかって、そのヒントとしてモビリティっていうか交通手段をどうにかすれば何とかなるという、ひとつの提案が先ほどありましたけども、これもひとつのテーマかなあと思いました。

それから事例の中にあつた、まち開き、家開きの話もそうですし、学生さん達がやってた学校と地域コミュニティの関わり方みたいなことも、多分モヤモヤを解決する大きなテーマなんではないか。やはりコミュニティが果たす役割っていうか、そういうところがモヤモヤの中の、縮退する都市の大きいテーマだという感じがしました。

モデレーター(山本):

はい、では今日の議論のテーマはモヤモヤということで(笑)。

饗庭先生の話の中で、時間軸で考えたときにずっと高齢化が進んでいくわけではなくて10年くらいの先を見通してということがありましたが、この話に少しほっとしたというか、10年頑張ったらなんとかなりそうだということで非常に心強い思いがいたしました。われわれ横プラのメンバーは、10年後にまだ活躍している人はそう多くはいなさそうですが(笑)。まちづくりに関わっている人たちは、コロナで先行き・方向性が見えないなかで、いつまでやったらいいんだと思っている人も多いと思いますが、とりあえず10年頑張れば次のステップにたどり着きそうだというような、そんな風にお話を受け止めました。

さて饗庭先生には横浜市での取り組みの事例を聞いていただきましたが、最初に感想も含めて、櫻井さんからの問題提起も含めてコメントを頂けますでしょうか。

饗庭:

事例を聞かせていただいて、知らない話ばかりだったんでめちゃくちゃ面白いなと思いながら聴いてました。何が面白いかって、皆さんやってることがバラバラすぎて面白いっていう感じです。横浜プランナーズネットワークのシンポジウムなので、都市計画があつて地区まちづくりがあつて、という体系的なまちづくりの取り組みが出てくるのかなと思っていました。「まちづくり」という言葉が広がってきた、いろいろなものが含まれているっていう面白さを見せていただいて、凄く楽しませていただきました。

僕らの若い頃と全然違って、今って空間が余りまくってるんですね。大学も、昔だと学生たちがサークル同士でけんかしながら占拠しながらとりあいつたわけなんですけども、場所が簡単に使えるってことが今の時代のアドバンテージなんですね。

若い人がまちづくりをやるというときに、例えば「この街で見たことないコミュニティカフェを作ってやろう」と思ってその街に入って、空いている家のピンポンを順番に押してくと、5件目ぐらいでただで貸してくれる人が見つかりそうな、そんな社会なんだと思うんですよ。昔は絶対ダメ、誰も貸してくれなかったんですよ。場所が使いやすくなったことが、今の時代のアドバンテージだと思いました。

一方でコロナでオンラインの取り組みと、拠点を使ったリアルな取り組みを組み合わせる工夫



してやってこられたわけですが、普段会えない人にオンラインで会えていることに可能性を感じます。例えば10人ぐらい集まって勉強会を開くよりも、ZOOMを使った「オンラインカフェ」をやった方が、会えない人が入ってきます。コロナで悪いこともたくさんあったけど、この1年間で会えない人と会えたことはとても面白いと思いましたし、会えるようになったらZOOMでしか会えていない人に、会いに行きたくて欲しいなと思っています。実際に会いに行ってみて次にどういう関係ができてくるかにすごい興味がありますね。

リアルな話でいうとやっぱ空間がすごく見つけやすくなったですねっていう話の一つ、コロナのおかげで知らない人と繋がるようになった可能性がありますねっていう話の一つということで、今日は二つほどの可能性を感じたということでコメントさせていただきます。

モデレーター(山本):

ありがとうございます。横浜市の都市計画というのは都市計画の教科書に載るんですが、市民がずっとやってるこういう地道なまちづくりは、都市計画の教科書には1頁も載ってないですね。それで自分たちで「ザ・まち普請」という本を作ったんですけど…。出版社からこんな本は売れないといわれて、横プラの自費出版という形になりました。地域まちづくりの可能性がいっぱいつまった本ですので、ぜひ読んでいただきたいと思います。

今、饗庭先生からこのモヤモヤに対して、場所が、空間が見つけやすくなったということと、そういう意味ではまちづくりがやりやすくなったという側面もある。もうひとつは、オンラインで人と人との関係性、つながりが広がることの可能性ということの示唆をいただきました。これはぜひ奥井さんにコメントしてきたいと思いますけども。海外ともつながって、野毛のどちらかという下町の古いコミュニティが海外とつながる、そのことでコミュニティがどう変わって、どうなっていくのかはよく分かりませんが、そういう大胆な取り組みがあります。

そもそも「密をどうつくるか」というのかっていうのが、地域まちづくりのコアだったような気がするんですけど、「密」じゃだめだということで、新しい「密」のあり方、バーチャルの「蜜」とか、そういうような関係論を作ろうとしているという取り組みについて、今日いくつかのお話があったような気がします。

発表者の方に、お互いの発表を聞かれて、あるいは饗庭先生の話も含めて、短いコメントをしていただければと思います。では奥井さんから順番にお願いしますか。

奥井:

はいありがとうございます。皆さんの話を聞いているとまさに様々な視点があるのかなと感じました。私の活動は、日本の地域と海外とを繋げて何をしようとしているかっていうと、日本の常識を海外の



事例と比べることによってシャッフルして、新たなアイデアが浮かんでくることを目指しています。しかし、今日の皆さんの話を聞いてると、皆さんすでに柔軟な発想で活動されてると私も改めて大変勉強になりました。

五味:

今日は若い人のエネルギーをすごく感じました。地域活動していると結構年配の方が多くて、若い人たちがなかなか入りづらい感じがするんですが、これだけ若い人達が頑張っているんだと考えてやってくれることに、すごく力をいただきました。私も負けないで頑張ろうってきになりましたし、何か一緒に出来たらいいなって思いました。

先ほど櫻井さんから出た「モヤモヤ」というキーワード、本当にそうなんですね。それで実はうちは「もやっとカフェ」というのをやってるんですよ(笑)。明日なんです。そのファシリテーターはご近所で心理カウンセラーをされている方がやってくださるんですけど、とにかく「モヤモヤを吐き出そうよ」とってことで。

一人で抱えてるからモヤモヤしてるんであって、誰かに吐き出すことによって、何か解決の糸口になったり、自分の中で消化して一歩進むようになったり…。

「あの時話したおかげで自分の中で変わっていくことができました」といった方もいらっしゃいました。

オンラインも便利ですが、私たちはリアルな場も大切にしています。オンラインだと会った気分になるというか、話した気分になるというか、リアルで会って話す時とは違った感覚がある。ZOOMで会った後、リアルに会って関係性を深めるということがこれからは必要になってくるんじゃないかなと思います。

モデレーター(山本):

はい、どうもありがとうございました。では学生さんお二人に。今日の参加者は皆さんに期待すること大ですので。モヤモヤを晴らしてくれるのは若い人だと。年寄りも頑張ってもモヤモヤはなかなか晴れないので、是非ご意見をいただきたいと思います。

小林:

モヤモヤからいろんな話に広がるっていうのはとっても面白いなと思っていて、街ごとの中心部みたいなものが小さくいっぱいできていくんだなっていうことと、スポンジ化の話も凄いなあと感じました。やっぱりその空いたところが拠点になって、私もすこしやっているような情報発信とかができる機能があったり、人が集まる機能を持ったりとかするのかなって。

さっき意見の付箋も貼ったんですけど、市街地、横浜でいったら桜木町とか関内とかのエリアの役割みたいなものってどうなっていくんだろうと。都市の小さくなりにくさというのは少しあるような気がしているので、中心市街地が政治や行政だけの役割になってしまっても嫌だし、これからの市街地の役割みたいなところも、郊外を考えたり自分の近くの身の回りの暮らし方を考えるのと同時に何か考えていきたいなって思いました。



モデレーター(山本):

ありがとうございました。都心がどうなるのかという話はとても重要ですね。あとで饗庭先生からコメントしていただきたいと思います。今商店街で一所懸命やっておられるということからも大変興味がありますよね。では木村さんをお願いいたします。

木村:

ありがとうございました。今日、ほんとうにいろいろな話をお聞きして、是非皆さんとも一緒にイベントやってみたいなと思いました。

モヤモヤに関してですが、私が活動するきっかけとなった都市生活におけるモヤモヤとコロナ禍におけるモヤモヤの二点お話ししたいと思います。前者についてですが、都市には多様性というのがあるのにそれを活かしていないことにモヤモヤを感じてきました。勝手に敵意を持って勝手に対立したり、すごいやさしくない世界ができていて、それにモヤモヤを感じて来ました。そういう問題をどうやったら解決できるのかなと思って、私は対話という手法で取り組んでいるんですけど。

コロナ禍のモヤモヤですけど、ZOOMでサロンとかやっているんですけど、五味さんの話と全く同じで、ZOOMで哲学サロンとかやっても視線が合わないんですよね。同じ空間を共有していないので、哲学カフェにならない。対話が成り立っていないのでどうにかして対面でやりたい。でも大学は開かない。ということでどうしたらいいのかなと思って、大学外の組織をつくって、これから始めようかなと思っています。

モデレーター(山本):

ありがとうございました。ZOOMはまだみんな慣れていないですね。使いこなせていないけど、あっという間に世界中とつながって時間を共有できるというのは大変な道具ですね。昔、ファックスができたときには書類があっという間に離れたところに届くということで便利になったと思ったら、インターネットのメールが登場し、SNSでコミュニケーションの方法が変わり、そしてZOOMのような多人数でコミュニケーションできる道具が出てきました。

これまでのまちづくりの中では、人と人が会って、みんなの意見をどうやって整えていくのか合意形成していくのかということ、いろいろと工夫をしてきたわけです。それがZOOMを使って会議やるとかワークショップやるとか、われわれも全然やったことがないし多分多くの人もやったことないと思いますけど、そういうツールを使う手法を見つけて、工夫して使いこな



していくっていうことが必要になってくるんだと思います。まあわれわれだけでなく、若い人もモヤモヤしている。お互いにモヤモヤしてるって事が分かったということでよかったかな(笑)。モヤモヤ感は共有してるということが確認できたということで。では次に、韓さんをお願いいたします。

韓：

今日は皆さんありがとうございます。特に饗庭先生の話の中で「スポンジの穴」という話があったんですけど、そういう穴を埋めることが我々がやっている活動じゃないかなと。そのときスポンジと同じ材料で埋めるのじゃなくて、様々な材料で埋めたらもっと面白いスポンジになるんじゃないかなと、今日の話聞きながら思いました。

その穴がある状況は若者にとってはすごくチャンスだと思います。空間が余っているから、なんかチャレンジできるような環境にはなっていると思います。そういう穴があくというのは、まちづくりの活動にとってただ障害っていうか、敵ではないっていうことには賛成するんですけど。日本ではあまり見えてこないんですが、世界ではジェントリフィケーションということがあるんですよね。だから経済成長とか経済発展とかという観点からは、やっぱりまだスポンジの穴は敵とされているんじゃないかなと思っています。今日本ではまだそれと向き合う環境になってないんですけど、もしそういう環境になるとしたら、どういう戦略で戦えばいいかな、ということを饗庭先生の話聞きながら思いました。

モデレーター(山本)：

どうもありがとうございました。もう一回、饗庭先生に皆さんからの質問、意見についてお話ししていただけないでしょうか。

饗庭：

どんどん話が広がるなあと、メモしながら聞いていました。

まず世代の話だと思うのですが、こういう場所に学生や若い人がいると、若い人に期待する、というような話になってしまいます。しかし今の日本の人口ピラミッドを頭に浮かべていただくと、次は団塊ジュニアの世代、1970年代生まれぐらいが今後10年間ぐらいの社会のボリュームゾーンなんですよ。その上の人たちは引退してしまったので、いろんな組織を一町内会でもいいですし、会社組織でもいいですし、コンサルタント会社でも、政党でも何でもいいんですけども、横浜市役所でもいいと思うんですけどもー40代後半、50代ぐらいの人たちが動かせるはずなんですよ。その人たちの動きも大事だと思ってるので、そこは意識的に見た方が良くと思います。なんでもかんでも若者に投げないということですね。

あと、スポンジの穴という話には、小さな穴にいろんなものが入ってきて・・ということで、皆さんの活動とイメージがぴったり合ったかなと思います。そしてそこには何が入ってくるかということですが、社会には本当に困っている人たちがいるので、切実なものが入ってくるという話と、趣味的なものが入ってくるという話があると思うんですね。困っている人達に目を向けずに、趣味的なものばかり盛り上



げてしまうと、韓さんが言われたようなジェントリフィケーションになってしまうわけですね。金持ちが趣味的にコミュニティカフェをやってるみたいなことになってしまう。韓さんが、戦うための戦略ということをおっしゃいましたが、両方あるということは知っておく必要があると思います。

明日食べるに困らないけれども、楽しい活動みたいな事もやりつつ、そのかけた力の2割や3割ぐらいを困ってる人たちに対する活動に向けて行くみたいなのが、大事な事かなという風に思っています。ハートフルポートさんのところで、3つの柱のうち一つに課題解決を上げていらっしゃるんですけど、そういうことだと思うんですね。困っている人にも目を向けるっていうのがちゃんと活動の柱の中に一つ入っていることがすごいと思いました。

いろんな団体が、いろいろな活動が、切実なもの趣味のものをバランスよく続けるっていうところしかないかなという風に思います。それがジェントリフィケーションと戦うということだと思います。

モデレーター(山本):

ありがとうございます。櫻井さんから・・・

モデレーター(櫻井):

先生のお話を聞いていて、横浜橋通商店街で活動している小林さんが言ったこととの関係で言うと、やっぱり郊外の過疎化の問題よりも、むしろインナーシティの問題が大きい。

例えば、寿町を見ても、もう昔みたいなことにはなくなって、高齢化したおじいさん達がうろうろしてるだけで、ドヤも空き部屋が出てきたしそのためにホステルビレッジみたいになったところもありますが、全然インバウンドのお客さんが来なくて、今は閑古鳥が鳴いてて皆どうしようかって言っています。

本当に都心部が過疎化してるんですね。その問題も相当大きくて、関内の僕らの事務所がある近くも、老舗の飲み屋でやめた店がいっぱいあってですね。僕らの入ってるちっちゃいビル、アーティストをいっぱい集めてるんですけども、そのアーティストも家賃払えなくて家に引っ込むとかそういう状態が出てきてる。コロナの問題でモヤモヤどころじゃなくてヒヤヒヤになってる。路頭に迷うって言うか、そういうアーティストがいっぱいいて、それを何とかしようっていうのが今僕らの最大のテーマです。

今芸術不動産をやってるんですけども、そこで都心部の空き部屋をどうやるか、市役所が移転したもんですから関内周辺はすごい空いてるんですね。そこをどうにかして、建替えの前のビルでイベントしようかと今考えてるんですけども。横浜では郊外も問題なんだけど、都心部も実は大きな課題を抱えていて、その辺の問題はどういう解き方をすればいいのかっていうことを、ちょっと伺いたいと思っています。



饗庭：

横浜の都心の話ですよね。横浜の都心を見渡すだけでも実に様々な古さのさまざまな形をした建物が建ってますよね。この(市役所の)向こう側、関内の方に行くと、いろいろなものが建っています。

ジェーン・ジェイコブスは、まちには様々な古さを持った建物があることがいい、という言い方をしています。一般的には古い建物は家賃が安くなったり使われなくなったりして、もったいない状態になります。横浜のこのあたりはほとんど巨大開発をやってませんし、関東大震災と戦災以降に災害にもあってないので、バームクーヘンのように古い建物から新しい建物が街中にびっしりとあるということだと思います。その中を丁寧に探していけば、困ってる人に対する不動産のマッチングが結構成立すると思うんですね。つまり、街を丁寧に見るって言う事に、まあ当たり前で釈迦に説法だと思いますが、まだ可能性があると思います。

もう一つ、郊外でも顕著ですが、建ってから30年ぐらいたつと、建物の所有者が「どうでもいい」と思い始める段階が始まります。最初20年ぐらいはローンがあるので、一所懸命きれいに使うのですが、30年ほど経つとどうでもよくなって、半分空き家のようになる、ということになってくる。それは多分この辺の建物も一緒に、今から30年前というと1990年頃なので、バブルの前後ぐらいに建ったピカピカしたビルを調べると、結構無駄に空いたスペースとかあって、オーナーさんが「もういいよ、タダで貸すよ」と言ってくれる可能性がありそうだと思います。30年ほど立った建物が狙い目なのかもと思いました。

モデレーター(山本)：

まるで櫻井さんがやっていることそのままじゃないですか。古いビルに安い家賃で入って(笑)、そのものですね。櫻井さんがやってこられたまちを丁寧に見るって、やってることは正しい、間違っていないということですね。

小林：

私は商店街のことをやっているんですが、もう明らかに道幅的にも建替えとかも出来ないようなところで、空いてそうなところがいっぱいあって、個人的な話なんですけど母と喫茶店がやりたくて中古物件探したことがあったんですけど、なかなか連絡がつかないことが多くて。そういうところをどう仕組みを変えていったら若い人とかも、使えるっていう認識に変わっていくのかなと、今のお話で色々な可能性を感じました。ありがとうございます。

モデレーター(山本)：

なるほど、商店街は何か始めるにはいちばんやりやすい場所ですね。完全に寂れてしまったらなかなかリカバリーするのは大変ですけど、今ならそこまでいかない段階なので、活用できる空間が手に入れやすいということもあるかもしれませんね。

ここでさきほどポストイットにご意見、質問を書いていただいたので内海さんに紹介していただきたいと思います。



内海(横プラ):

会場におられる4名の方からご質問をいただいています。一つは「スポンジ化した都市で新陳代謝していけるかどうかを見極めるポイントは何か」ということです。

関連しているのが、「今後市街地はどんな役割を持っていくのか」というのもあります。ここでいう市街地は郊外の住宅地あるいはその団地だとかそういうところを言っているのだと思います。また、「具体的にどのようなプロモーションがあるのか、事例があれば知りたい」というご質問です。

それから、「住宅地、団地だとか、主体が一例えば管理組合と自治会とか、それから立場の違い一例えばリタイアした人とまだ働き盛りの現役の人では、考え方が違ったりすることがよくあって、非常に分断、対立しやすい、合意形成が難しい」というご意見です。

4つめは「コロナで若年層とかオンラインで在宅勤務とかになり、地域活動に参加しやすくなったけど、うまく担い手にできるのではないか」というご意見です。多分、学校ボランティアの人も含めて、そういう環境の変化もあるので、少しでもきっかけを与えたりなんかすると、うまく担い手にできるのではないかなというように感じます。以上4点です。

モデレーター(山本):

ありがとうございました。饗庭先生に質問がありましたけどお答えいただけますか。

饗庭:

一つ目の質問は「新陳代謝の見極め方」でした。なかなかこれだっというのはいないんですけど、私がどうやって見てるかって言うと、どの街にもその前に開発された「先輩の街」がいるんですよ。5年先輩の街があれば、そこには自分の街の5年後の姿のヒントがあるはずですよ。皆さんそういうふうには街を見てらっしゃらないと思うのですが、アタリをつける参考になる情報が得られると思います。

あとは土地と建物の値段を常に見ておくことです。SUUMOなどにアクセスして自分の街の建物いくらで売れてるかなって見てみるとよいと思います。感覚的には1000万ぐらいまで落ちてないとすれば大丈夫ですね。横浜の住宅は今3000万とか4000万くらいだと思いますけれども、2000万くらいまでは下げる余地があると思います。値段を下げれば売れるはず、新陳代謝が起きるはずですよ。売れる値段を見極めて、そこでどのような新陳代謝ができ



るのかの判断をするとよいと思います。しかし、4000 万で売れるのに 3000 万で売ってしまう、3000 万で売れるのに 2000 万で・・とやってしまうと、負のスパイラルに入って価格がはやく落ちてしまいますから。この街では 3000 万くらいで売りたいなと思ったら、街をきれいにするとといったような努力をすることが大事だと思います。

二つ目の質問にある住宅地の役割というのはなかなか難しいです。今のところの饗庭説では、子育ての時は一軒家ぐらい、でも年取ったらサ高住に早々に移る、退職は 70 歳くらいになりそうなので、70 歳くらいでわっと動く。空いた一軒家に若い人がまた入ってくるようなのが、一番合理的だと思っています。しかし、若い皆さんがこれから家族などを持って行く時に、どういうところに住むイメージがあるかということが、一番大事だと思います。

3番目の質問はプロモーションでした。プロモーションについては私も試行錯誤してるんで、答えがないんですけども・・僕は結婚しているので、マッチングアプリを使ったことないんですよ、彼氏彼女見つけるアプリ。やってみたくてしょうがないんですけども。

自分がこういう街に住みたい、と条件を入れたら、横浜のここなんてどうですか、このお給料で、あなたに釣り合いますね、地域コミュニティがしっかりしていて、子育てもしやすいですよ、というようなマッチングアプリがこれから発達していくと思います。プロモーションとは、そこにどういう情報を出すかということです。マッチングアプリを意識して自分たちの街の情報をつくっていく、ということを考えるといいと思います。こういうことを言っていると、どこかのベンチャーがマッチングアプリ作ってくれるかもしれないんで、そうなれば一緒にやりたいなと思っています。

最後の質問は、いろんな立場を超えた対話がしにくい、ということでした。これも永遠の問題なので答えはないんですけども・・。

最近はやっている「clubhouse」を先日に行ってきました。面白かったですよ。クラブハウスはこの街についての話題を、この街に住んでる 3 人がダラダラしゃべりますっていう感じですよ。例えば、野毛の話を奥井さんとそのお友達 2 人ぐらいがだらだらしゃべりますっていうと、野毛に興味がある人達に情報がたって、その時にみんなが聞きに来るっていう感じなので、まああのクラブハウスやってる若い人なんかは引っ掛けられることができますと思います。

何が言いたいかというと、もうメディアによって発信できる層が決まっています。clubhouse を使っているのは比較的若い人たち、ZOOM は ZOOM を使っている層、Facebook はちょっと日本では上の世代の利用が多くて、ツイッターは何となく荒れてて不特定多数みたいな感じであんまり繋がるツールになってないところがある。もうこういうツールは使い倒して、自分たちの街に来て欲しい人達に向けたソーシャルネットワークを使っていくというのが一番安上がりだし、妥当な戦略かなという風に思います。たいしたヒントになりませんがそんなこと思いました。

以上です。ありがとうございます

モデレーター(山本):

ありがとうございました。今の饗庭先生のお話を伺って、今までまちづくりに SNS を使う議論はしてこなかったなあということに気がきました。そういう視点からは、もっと ICT を活用したまちづくり手法というのを工夫する必要があるという感じがいたしました。

あまり時間がないんですけど、会場に来ていただいている方の特権で、直接発言をしていただきたいと思います。いかがでしょうか。

山路(横プラ):

プレイヤーの問題があつて、饗庭先生からも団塊ジュニアっていう話があつたんですけど、今横浜市の各区では「地域づくり大学校」という人材を育てる、発掘する事業をやっています。私も鶴見区などで少しお手伝いをしているんですが、以前の応募者の平均年齢は70歳代ぐらいだったんですよ。ところが今年は40代、50代が中心で、一人だけ70代の方がいました。70代以降の方は、コロナで外に出て行くのを止められて来られなかったのかも分かりませんが、圧倒的に40代、50代の、それも大半が鶴見生まれ鶴見育ち、いわゆる「鶴見っ子」の人たち。家にいる時間が増えて、自分の身の回りのまちのことに興味が湧いてきましたっていう動機だったんです。

さっきもコロナで働く環境が変わるっていうことで、その地域との距離感みたいなものも変わってくるんじゃないかってご意見がありましたけれど、その可能性を少し感じました。これから地域づくりに関わる人は、「若い人は忙しいからね」って言うだけではなくて、可能性としても色々あるんじゃないかなと感じたしだいです。



大木(横プラ):

泉区で、農業ボランティアを学校でやっています。今地域では、高齢化とか後継者がいないとか若い人が関心がないとかずっと言われて、団塊の世代の人からはおまえたちなんでやらないんだと言われて、今は地域で PTA とおやじの会やって、田んぼのボランティアやって、自治会で次世代交流団体をやって、青少年指導員もしています。

そういう中でやっぱり思うのは、リタイアした時間がある人が細かいこともガンガン言ってきて、管理組合で若い人がまいつちやうみたいなことがあつて。こういうことがコロナですごく対立になりだして寂しいなあと思う一方で、若い世代は、年を取っちゃった農家の 80 何歳の人が、学校で 40 年間も田植えやってきたのを手伝ってくれてる。僕たちが何とかしようって、若い人たちで LINE を使って、毎朝水の管理をしてるみたいな。

こういう動きをうまくお年寄りの方にも理解していただいて、緩く、「べきだろう」じゃなくて「おまえたちいいことやっているな」という、昔の村長(むらおさ)みたいに緩くおさめていくためにはどうしたらいいかを聞きたいです。

モデレーター(山本):

ありがとうございます。大木さんもそろそろ村長(むらおさ)になるお年ですから、人ごとのように言わないで(笑)。高齢の先輩方には「村長になるにはどうしたらよいか」とか「賢い隠居の仕方」とか、そういうのもやったらどうかと思いますね(笑)。

さてそろそろ時間がなくなってきましたので、奥村さんにまとめていただいたものを、説明をしていただきたいと思います。キーワードのモヤモヤを解く議論の内容を整理をしていただく、奥村さんのファシリテーショングラフィックのテクニックをご覧ください。



ファシリテーショングラフィック(奥村)

本当に色々なお話をいただきました。グルーピングしてみました。「俺の言ったことはそこじゃないよ、別だよ」という方もいらっしゃるかも分かりません。私の解釈の甘さで、そこはお許しいただければと思います。

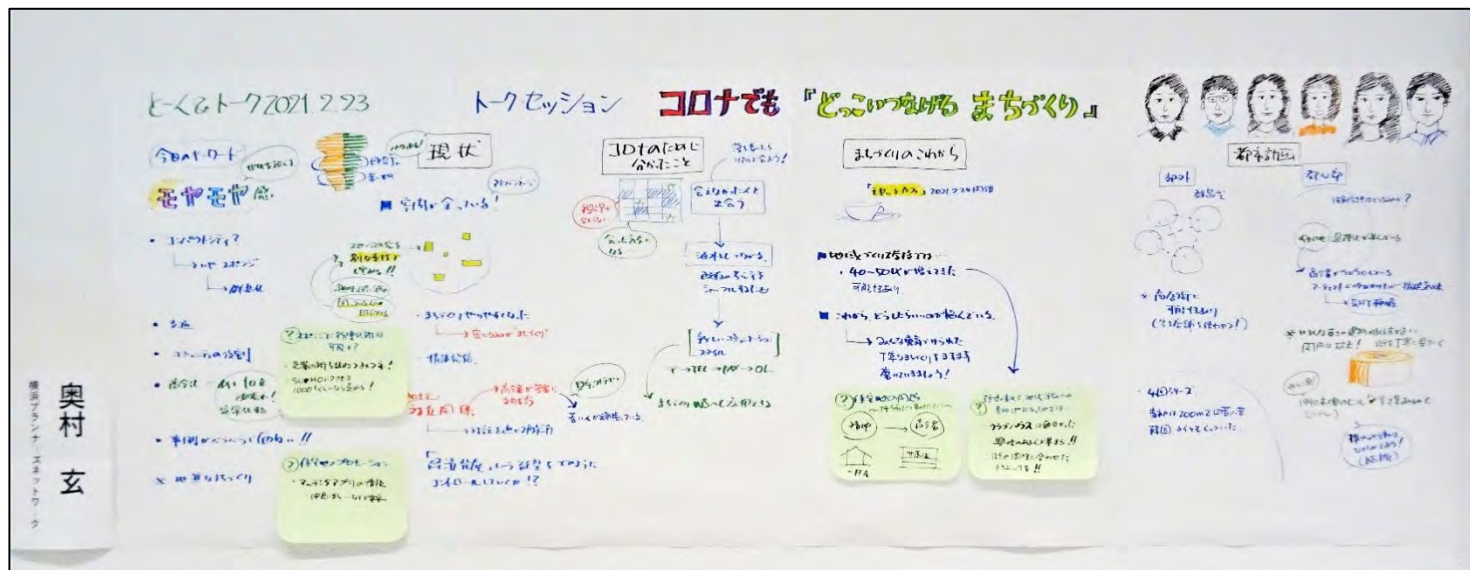
まず一番左には現状、その右にコロナのためにこういうことが分かってきた、さらにその右にはこれからのまちづくりに活かそうアイデア、一番右に都市計画全般に対する捉え方を整理してみました。

モヤモヤ感が今回のキーワードですが、まず最初に現状を見てみましょう。アドバンテージもちゃんとあります、空間が余ってるんだと。そこを別な要素で埋めていくこと。別な要素っていうのは趣味活動もそうだし、それから困ってる方達に目を向けるような活動だとか、いろんな視点で余っている空間に入れていくことで、むしろ街が均一な状態から多様な状態に変わっていく。そのアドバンテージが今ありますよっていう整理ができそうです。

コロナの影響で対立関係がどうしても目についてきますが、頑張ってる若者たちをもう少し温かく見守るような、そういう関係を作っていく。あるいは対話を通じて解消していく。そういうことが大事であるという意見もありました。

新陳代謝って話もいただきました。不動産の状況を見てみるとか、先輩格に当たる街を訪ねてみるとか、いろんな方法でこの様子を把握することができる、という意見もありました。街のプロモーションについても、今までの不動産情報プラスアルファによって、余ってる空間の活用につながるような、そういう新しい転入者が入ってくる可能性も十分あるんじゃないかって、これは大きなアドバンテージだという話を頂いています。

コロナのために、ZOOM やオンラインで対応することが多くなってきているわけですが、今まで出会えなかった人と出会うことができたり、海外ともつながる。それは言ってみれば自分達の今までの固まった考え方じゃなくて、新しい考え方とつながることで、自分たちのあり方みたいなものも考えることになるんじゃないか。でこれは実は新しいコミュニケーションのスタイルとして、これからのまちづくりワークショップにも応用できる、そういう可能性を秘めている、という話もいただきました。一方で、なんとなく会った気になるけれどリアルに会ってないというもどかしさもある、視線がとにかく分からない、感情とか表情とかそういうものまでなかなか共有することができない。そのため、スライスした一断面でしかかで見えていない部分がもどかしいという意見も頂きました。



まちづくりのこれからとしては、「もやっとカフェ」の話はもう少し伺いたかったんですけども、ミエルさんの活動にも近いのかしら、パキパキした感じじゃなくって、そこで緩くいられるような、ある意味モヤモヤしていいですよみたいな、そういうカフェが明日開催されるというお話もいただきました。地域づくり大学校では若い世代がテレワークが進んできていることもあって、受講生の世代が少し若返ってきてるから大いに可能性がありますよっていう話もいただきました。

クラブハウスみたいなアプリケーション使って、興味のある人達が集まれるような、意見交換をするような、そういうことも今のテクニックの中で色々あるので、その街にあった方法を使うこともできるわけです。

もう一つの視点は、いろんな街を動くということ、すなわち移住をしていくこと。生活シーンに合わせて住み直していくということですね、家を交換していく、これは持ち家だとちょっと動きにくいというお話もありました。この話題は都市計画レベルの話にも繋がっていくのではないかと思います、後で饗庭先生にお聞きできればと思います。

最後に都市計画の話ですが、饗庭先生のお話にあったように「群島型」というのが郊外型の住宅地における一つのスタイルだということ頂きました。商店街にも可能性はすごくあるという話もいただきました。

また都心部って一体どういう役割分担をするべきなのか、少し広域に捉えてみると、実は中心部というのは過疎化が非常に進んでいて、高齢者ばかりうろうろしてるようなそんな街になっているという分析をいただきました。アーティストに呼びかけて、新しい風を入れようとしたんだけどでも現在は撤退気味で、芸術不動産みたいな活動もやりにくくなっているというお話もいただきました。

ただいろんな古さの建物があるということは、これは非常に大きいアドバンテージだよっていう話を饗庭先生からいただきました。ですから関内は大丈夫ですよという太鼓判いただきまして、街を丁寧に見ていけばそこに大いに可能性がありますよっていう話でした。1990年頃、特にあのバブル期に建設された建物は家賃も当時はめちゃくちゃ高かったんでしょうけども、今は少し値段が下がってきていて、空き室があるかもしれない。こういう建物のオーナーが30年たって、入居者が少なくなってきたから家賃を少し下げるとか、そんな動きがあるかもしれない。こういうところが狙い目ですよっていう話した。

それなら、これまで横プラがやってきた活動ってのは、これはなかなかのもんだねということで、最後に自画自賛で締めたいと思います。

モデレーター(山本):

ありがとうございます。自画自賛で締めるところも含めて、さすが奥村さんです。本当はもう一巡ご意見を頂こうと思ってたんですがちょっと予定の時間も過ぎてしまったので、そろそろお開きにさせていただきますと思います。

今日のテーマは、コロナの後はどうなるのかね、われわれが今やってることはコロナと共存とかアフターコロナを考えたときにベクトルは合っているのかね、いろんな現場で活動している人も含めて本当にモヤモヤしてるわけで、それを「方向は間違っていないよ」「ちょっと方向は違ってる」というようなことを言うてくださる講師をお願いしようということで、饗庭先生に来ていただきました。方向は間違っていないよ、いいことやってるんだよと勇気づけられたと思っていますが、これからのまちづくりにおいて、われわれが今やっていることにはどういう意味があるの

かということも示唆していただいた、客観的に見つめ直す機会になったというように感じております。

では最後に櫻井さんにコメントしていただいてお開きにしたいと思います。

モデレーター(櫻井):

ありがとうございました。だいぶモヤモヤもスッキリしたと思います。今まで韓さんが中心になって4回の ZOOM のセミナーを重ねて今日になったわけですが。その中で非常に面白かったのは、いろんな人が参加していただいて、韓国の人が入ったりなんかして、面白い成果が出たんじゃないかなって思っています。ZOOM のセミナーに登場していただいたさくら茶屋の岡本さんは、最初は ZOOM 使えなくて、練習で3時間ぐらい行って、今ではだいぶ使いこなせるようになったというようなこともあるし、野毛の奥井さんの海外とのつながりの話も本当はもうちょっと聞きたかったんだけど、コロナの中でのすごい面白いことが行われている。韓国と結び、タイと結び、そういうローカルとグローバルがくっついた地域の取組も行われているということも含めて、横浜のまちづくりの今後を共有する面白いシンポジウムになったんじゃないかと私的には思います。ありがとうございました。



資 料

◆ 登壇者プロフィール

◆ アンケート結果

◆ 登壇者プロフィール 登壇順・敬称略

饗庭 伸

東京都立大学教授。NPO 法人まちづくり情報センターかながわ（略称アリスセンター）元理事長。専門は都市計画・まちづくり・市民参加で、人口減少時代の都市計画のあり方、震災復興、東アジア諸国のまちづくり、全国各地のまちづくりに関わる。

主な著書：『都市をたたむ』（2015）、『津波のあいだ・生きられた村』（2019）、『素が出るワークショップ』（2020）、『平成都市計画史：転換期の30年間が残したもの・受け継ぐもの』（2021）。

奥井 利幸

野毛坂グローバル代表。アジア各国でコミュニティ開発／高齢者支援／障害者支援などを、住民への直接アプローチを通じた政府/社会への働きかけ（＝エンパワメントアプローチ）に拘って実施してきた。現在は、海外と日本の学びあいによるコミュニティづくりの実践中。2020 年アジア健康長寿イノベーション賞国内優秀事例賞受賞。

五味 真紀

ハートフル・ポート代表。3 人の子育て、自宅での介護/看取りと 地域活動の経験から、居場所の必要性を痛感し、2014 年自宅を 改修して住み開きカフェをオープン。地域に住む多様な人が主体的に関われるイベントも多数開催。カフェからはじまるまちづくりを実践中。かながわシニア起業家ビジネスグランプリ 2018 神奈川県知事賞 受賞。

小林 璃代子

横浜市立大学国際教養学部 2 年（社会学専攻）。多様な人が集まる場である商店街に興味を持ち、まちへの愛着や居心地の良さのもとを探し中。横浜橋通商店街では高校時代より学生スタッフとして情報誌「いきな下町商店街」を制作。

木村 心香

横浜国立大学都市科学部都市社会共生学科 4 年。社会の分断と、それを解消するための人々が「出会う場」の創出に関心があり、大学を地域に開く活動をする学生団体 YUC（Yokohama Univer-City）の活動に取り組んでいる。

韓 昌熹

東京工業大学建築学系/博士課程。86 年ソウル生まれ、2011 年韓国の地域づくり大学で「まちづくり」について勉強し、日本の事例に興味を持ち大学院へ留学。横浜の地域づくり大学校修了、防災士など、日本での地域活動に参加してきた。修論でまち普請事業の市民提案の研究をし、博論で、引き続きまち普請を対象として、コミュニティ活動について研究している。横プラ発行の『ザ・まち普請』の韓国語翻訳中。

◆ アンケート結果

とーく&トーク 地域まちづくりをみんなで語る会 2021

アンケートのお願い

1 年齢を 教えてください。 ①10代 ②20代 ③30代 ④40代 ⑤50代 ⑥60代 ⑦70代 ⑧80歳以上

2 お住まいを 教えてください。 ①横浜市内 (_____ 区) ②神奈川県内 (_____ 市・町・村)

③東京都内 (_____ 区・市・町・村) ④その他 (_____)

3 職業等を 教えてください。 ①会社員 ②公務員 ③会社役員 ④自営業 ⑤自由業 ⑥専業主婦(夫)

⑦学生 ⑧パート・アルバイト ⑨NPO ⑩その他 (_____)

4 本日のプログラムで関心を持ったことをお聞かせください。

① 基調講演について：

② 実践報告について：

③ トークセッションについて：

④ その他

5 テーマ コロナでも『どっこい、つなげるまちづくり』に関連した事例や取り組みをご存じでしたらご紹介ください。

・ 事例や取り組みの名称：

・ 場所等：

・ 事例や取り組みの概要：

6 その他、感想、ご意見等がありましたらお書きください。

下記のQRコードから
スマホでも
ご回答頂けます



ご協力ありがとうございました。企画の振り返りと今後の検討に活かしてまいります。 NPO 法人 横浜プランナーズネットワーク

とく&トーク 地域まちづくりをみんなで語る会 2021

コロナでも『どっこい、つなげるまちづくり』～課題はある、だから知恵がでる～

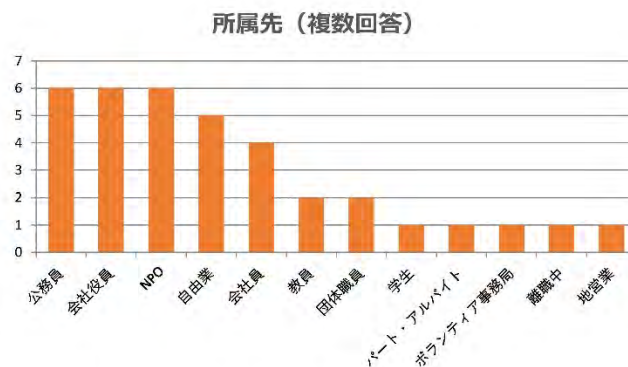
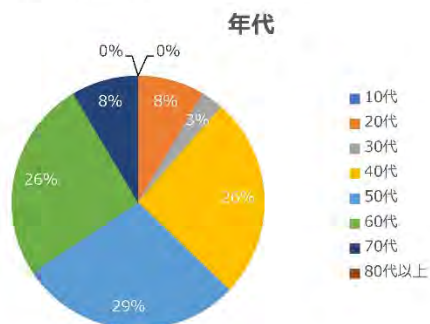
開催日時：2021年2月23日（火・祝）13:30～16:30

開催場所・方法：横浜市民協働推進センター スペースA/Bおよび オンライン（Zoomミーティング）

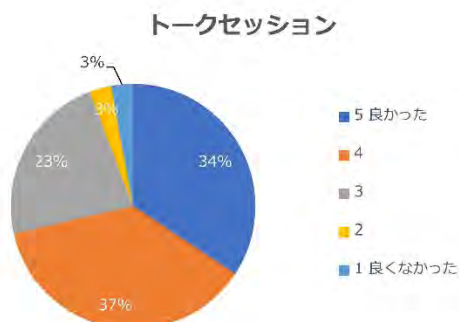
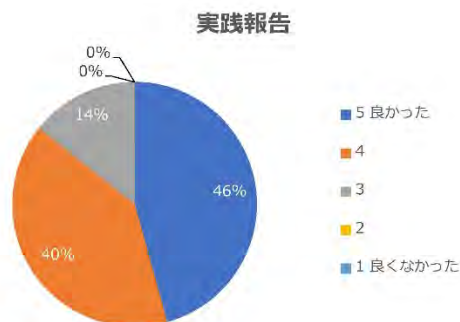
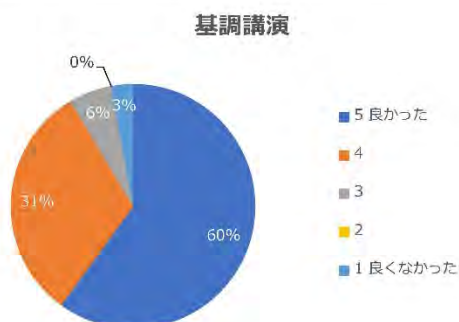
参加人数：76名（会場：34名、オンライン：42名）

回答者数：35名（回答率：46%）

1. 参加者属性



2. 評価



3. コメント

基調講演

冒頭で航空写真を使い東京、ロンドン、米国の都市比較をして、人口減少への心配に及ばないという話はわかり易かった。
そして空き家空き地を如何に位置付けるのかというところに課題があることを意識づけることができた。
都市の縮退に伴う都市づくりのありよう、進め方が、実際に取り組んでいる中で感じていたことと符合する部分が多くよかったです。
一方で、横浜の場合は、東京郊外でのスタディによる知見と異なる部分もあり、横浜での知見として取りまとめる必要性を痛感しました。
鳥の目の視点で町を見ることはなかなかできないので、大変勉強になりました。
定常化都市の話、スポンジ化した都市に、埋め込んで魅力的なまちをつくるプロセスの話など、ありがとうございました。
都市がスポンジ状になる話、人口減少の変化を短いスパンで考える話、今の時代のアドバンテージを考えると大切な視点をいただきました。
お話がとても聞きやすく、引き込まれてました。テレワークによって空き家が負債ではなく可能性変わった、というお話が印象的でした。
コロナ禍で進むのはオンライン化だけでなく、いろんな可能性があるんだなと思いました。
収縮していく社会の中で、あと10年で高齢化がある程度止まる…という話は、希望が持てた。
しかし、これから郊外住宅地も努力するところとしないところの格差が出てくると感じた。
地域づくりというと、活動の中身に焦点が当たりがちですが、ハードの部分から考えるというのは、普段と違う視点でまちづくりを考えるきっかけになり、非常に新鮮でした。
もともと書籍を読んだこともあり、実際にお話を伺えてとても嬉しかった。
改めて今後空きスペースの魅力的な利用をしていくことがまちづくりの課題になるのだと感じた。
10年前、コミュニティカフェを始めたときは、子ども食堂も、認知症カフェも、SDGSもありませんでした。
震災を越えて、コロナを越えて、次に見えてくるものを様々な、具体的に教えていただきました。もう10年がんばって、また次を見たいと思いました。
自分は開催がモヤモヤなパラリンピック関係なので、物理的スペースが増えるなら、インクルージブに体をうごかすことのできる施設を整備したらいいのと思
い聞いていました。カナダには日本のパチンコ屋さんと同じくらいスケートリンクがあります。パラリンピックは、障害者も高齢者も、生涯のコミュニティの選
択肢としてのスポーツを理解するチャンスになると思います。なかなか選択肢に辿り着けないなあいつも思っています。
切り口が新鮮で大変参考になりました。
現在の状況を災害対応とは違うという捉え方は新たな視点として参考になりました
過疎のマイナスだけでないプラス面の発想は嬉しかったです。
2割の空きスペースの活用をどうするか、興味ある課題ですね。
創意に満ちていてよかった。
とても良かったです、もっとじっくりお話をお聞きしたかったです。
次回も機会があれば、聞きたいです。

実践報告

五味さんの実践は、まさに、饗庭先生のおっしゃる、街の中に魅力的な場を創り、街の価値をあげていく活動。学生の活動も若い方々の、地域への関心の高さを
実感でき、つながりたいと思いました。
それぞれの取り組みにおける「意識」に刺激を頂いた。対面すること、視線を合わせること、自ずとつながること、ゴールを共有する協働、新しいつながりな
ど、大切にされている想いと工夫を発信くださりありがとうございます。
いま、誰にとっても共通の条件としてコロナ禍にあるが、まちづくりを考えると、人間の多様性と可能性、社会課題に正面から向き合う必要があるんじゃない
かと思いました。「空き家活用」という条件のもとでは、高齢者の退屈を解消するようなアイデアしか出てこないような気がしていましたが、若い人たちも退屈
してるのかなと思いました。
地域等との関わりやつながりにとどまらず、ハートフル・ポートのような実践的な地域まちづくりの展開を、横浜の現在抱えるテーマや課題を軸に報告され
たら、もっと基調講演とのリンクができたように思います。
横浜橋商店街の情報発信の取り組み、身近な地域を新鮮な目でみる大切さ、可能性を感じました。五味さんのハートフルポートでの取組はこれからの活動を考え
るときに大変参考になりました。ハンさんのレポート、国大のオンラインマンション、外と内の野毛坂グローバルさんのお話もっと聞きたかったです。チェッ
クします！ありがとうございました！
様々な取り組みを知ることができ、興味深かったです。特に、学生さんの活動は知る機会が少ないので、刺激になりました。
横浜橋商店街、横浜国大のとくみなど聞けて良かったです
学生さん達の力量にびっくり！素晴らしい活動の継続を期待しています。
若い世代の活動を知ることができてよかった。
学生さんのお話とても良かったです。
世代もさまで学びになった
コロナ禍でもオンラインなどを利用して前に進み続けていらっしゃるのと同時に、オンラインの問題点など実践者としてのご意見が聞けて参考になりました。
コロナ禍、地域で色々工夫されているのがわかり、勇気付けられました。
とても多様な実践報告、どれも興味深かったです。
それぞれの活動が特徴ありとても参考になりました
今後も定期的活動報告を聞きたいです。
ちょっとコンセプトがまとまっていなかった感あり。バラバラの報告になってしまったのが残念でした。報告者ではなく企画した側の課題。
様々な事例が聴けて良かったが、もう少し時間が欲しかった。
各報告に対してもう少し時間が欲しかった。発表数を減らしても良かったのではないかな。
少し慌たしかったですね。

トークセッション

「モヤモヤ」というテーマはとても身近でした。また、モヤモヤしたままでもいいという言葉は希望のようにも思えました。「ジェントリフィケーション」にも
関心を持ちました。
モヤモヤ という捕まえ方をして頂き、それぞれの想いを掴むことができました。
世代交代の話題では共感することがたくさんありました。大学生のパワーに圧倒されてなんとか繋がりたいと思うばかりでしたが、自分と同じ世代にも時間で
きて地域づくりに目が向いているとのこと。もう一度周りを見回してみようと思いました。
学生と、横濱の代表とのやりとりは、世代を軽々と超えて、これからのまちづくりのあり方を見るようでした。
基調講演と実践報告の繋がりを理解出来て大変興味深いものだったが、登壇者（実践報告者）の話をもっと聞きたかった。

実践報告で様々な取り組みが報告されたので、それぞれの活動をもっと深堀したり、それぞれの活動をつなげる方法や、共通の課題について話し合うなど、もっとそれぞれの活動を深めるような話を聞きたかったです。

基調講演と実践報告のつながり・関わりを深堀するのが難しく、基調講演での問題提起に対する質疑応答だけが目立ってしまった印象でした。

トークを最後に整理され頭の整理ができ良かったです

最後の方で触れられてましたが、コロナ禍での人材面のリスクと工夫がもう少し聞けるとさらに良かった

「8割で趣味の充実、2割でヘビーな社会課題の解決に目をむける」という話でしてでしょうか？もしそうなら、それは違うんじゃないかと思いました。

毎回、ユーモアがあって楽しいです。

かみ合っていてよかった。

ゆるりと、本音トークで楽しかったです

いつもながら時間がなかった。響庭先生のコメントは明快で面白かった。

もっとじっくり登壇者の方にディスカッションをしてほしかったです。

時間が足りませんでしたね。

その他

奥井さんの元に戻るって何というモヤモヤは共感できました その点が少しずつ共有されて将来を考えられるようになりたいと思います

コロナ禍は、困りごとを抱えた人々の上には、何倍もの厳しさと同時に、社会変革の機会となり、思い合う豊かさへの可能性をみていると思います。多様な社会背景をもつ人々が、同じ地域に、世界にもいることに目をむけていくことで、多様性により近づけるんじゃないでしょうか。

どのような論点で何を議論するのが準備不足で、企画者と報告者で共有化されていないといけないなあと改めて感じました。

zoom参加の方との双方交感が実感できるとなると良いと感じました。

最後のZOOMの説明とか横プラスタッフの紹介とかは蛇足だと思います。

4. 関連事例

事例や取り組みの名称	場所等	事例や取り組みの概要
移住スカウトサービス「SMOUT」		地域のマッチングをしているサービスです。響庭先生がおっしゃっていたマッチングアプリのお話で、下記のウェブサービスを思い出しました。 https://smout.jp/user_shindans/new
郊外住宅地で広がる移動販売	泉区下和泉、旭区今宿地域CP、青葉区あかね台等	高齢者の買い物難民対策として、移動販売を継続していくためには、販売場所の設置・整備（公園再整備、空き家・空地の利活用等）、野外交流サロン・ラジオ体操との連携などが重要になり、地域づくりや地域活動の視点が大事になっている。
小学校と地域の連携で続く食農教育	泉区いずみ野小学校とその田畑3枚	小学校、農家、地域の連携で40年続く実際の田畑の農業生産・食育の継続への思いと苦労と工夫
横浜をつなげる30人	特になし	現在、取り組みを検討しているところです。
空き家対策と居住支援	横浜市	横浜市協議会
ラジオ体操	津々浦々	

社会的処方、小規模多機能自治について、次は知りたい。

5. 本イベント全体について

行政における工夫も伺いたいと思いました。事業の推進とリスクの回避への向き合い方をどのように工夫しておられるのでしょうか？

今後の課題解決に市民協働による解決はどのように展望できでしょうか。

50代になり、親の介護、子供の独立、まちを歩いて気になることがあっても私は何もできていない、もやもやしていました。でも！今日のお話を聞き、アドバンテージはあるじゃないか！そんな気持ちになりました。私がもやもやするのは当たり前。50代つまり出番です。まちづくりに向けて一歩踏み出したい。そんな気持ちになりました。横プラの皆様の鋭い視点とあたたかい言葉が、私のぐるぐる回った頭と心に、心地よく響いております。ありがとうございました。

ソフトな都市作り（街作り）の在り方を、実践者の報告と共に理解することができた。

出来ればもう少し個々の事例を掘り下げ、課題や難しさまで提示の上、議論頂ければ良かった。

それぞれが工夫しながら活動している事例を知ることができて大変参考になりました。ありがとうございました。

建築やまちづくり、コミュニティデザインのプロの実作を通して成功/失敗についての発表を聞きたかった。

総じて良かったです。横浜市の様々な部署の職員にも聞かせたかった。

多様な視点・世代の登壇者の方から多角的な視点でお話を伺うことができ、視野が広がったように感じます。

持病があり外出のハードルが高いので、オンラインとハイブリッド開催していただいたおかげで参加することができました。ありがとうございました。

コロナ禍において、イベント自体がオンラインに取組しがちですが、ハイブリッドの開催というところに、次へのステップを感じました。

カメラの配置、音声などの工夫により、会場の雰囲気もよくわかりました。

遠方からだとなかなか参加しにくいイベントを拝聴することができ、貴重なお話を聞くことができました。ありがとうございました。

コロナ後も、オンラインとリアルのハイブリッドで続けて欲しい

ハイブリッドのとくとく&トークとしたために、それを実現するノウハウを持っている方の役割が大きかったが、オンラインで参加していた方々の会場とのやり取りがあまりなかったのは残念でした。

響庭先生の基調講演をはじめ、色々興味深いお話が聞けて良かったですが、全体として時間が短かったと思います。

中々難しい選択とは思いますが、事例を絞って、じっくりするのでもいいかと思いました。

これまでの流れを踏まえず勝手にお邪魔してすみませんでした。横浜市では福祉のまちづくりが進む一方で、海外では当たり前前のインクルーシブや共生社会への実務が遅れているように思われます。スポーツ・レクリエーションの面からは、いまだに障害者スポーツセンターを増設（上大岡）したり、各区にもほぼ1箇所ずつしか公共のスポーツセンターがなかったり。体育館をバリアフリーに設計しても結局床を大事にしすぎて車いすで使えないだろうと思います。遠慮した変革で中途半端にしか作れないと、せっかく世代が変わっても遺物を使用することになってしまいます。共生社会とは何かを正面から考え、市民が自分たちに必要なもの、不要なもの（カジノとか？）はと考える、世代によらず、この機会に明日変えていくことができるムードがイベントでできれば素晴らしいなと思います。

今回は開会ありがとうございました。とてもためになりました。

一連の取組お疲れ様でした 今後ともよろしくお願ひします

皆様、お疲れ様でした

またぜひ参加したいです。

タイトル とーク&トーク 地域まちづくりをみんなで語る会 2021

コロナでも『どっこい、つなげるまちづくり』

～課題はある、だから知恵がでる～

実施日 令和3年2月23日（火・祝日）13：30～16：00

会 場 横浜市庁舎1FスペースAB+ オンラインのハイブリッド開催

発行日 令和3年8月

発行者 特定非営利活動法人 横浜プランナーズネットワーク

